
銀魂 - Lonely rainy day -

菜ノ花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂・Lonely rainy day

【Nコード】

N2009U

【作者名】

菜ノ花

【あらすじ】

6月の雨の日の夜、かぶき町にはひとりの少女の姿があった。彼女の名は雨宮志保。あまみやしほ青みのかかった美しい目をした彼女は、雨に怯えているようだった――。

かぶき町で新たに出会った人々、再会した人々が、そんな彼女の凍りついた心を溶かしていく。

真選組に入隊した志保の明るくて、優しくて、哀しいドタバタストーリー！ になればいいと思っています…。

笑いあり、涙あり、…恋もありです！

こんな作品ですが、気に入っていただけたら幸いです。
『最終章 過去篇』、更新中です！

プロローグ（前書き）

初めまして、菜の花です！

初投稿なので至らないところも多々ありますが、どうぞ
よろしく願います。

ブローグ

私は雨が嫌いだ。

空から降り注ぐ透明な雫。地面をはじく音。

その全てが私の心に冷たく鮮やかに突き刺さる。

雨は自分の何かを洗い流してくれるものだと思っていた。

だけど、それは私には不可能なのだ。

その理由は、今は閉ざされてしまった過去にあるのだろうか…。

その過去を覗いて、何かを見つけることが出来たならば、この苦しみから解放されるのだろうか…。

けれど、私にはいまだそのすべが分からないままで――

独り、暗闇に取り残されている。

誰か、私を救い上げて下さい――。

プロローグ（後書き）

「Lonely rainy day」とは「孤独な雨の日」という意味です。

最初は「悲しみの」にしようかとも思いましたが、「lonely」って響きがすごく気に入ったので、

みなさんにも気に入っていただけたらいいな。

第1話 雨の日の出会い（前書き）

暑いです……ヤバいくらい暑いですっ！

ついこの間まで雨がたっぷり降っていたのに、もう日差しが…（<

―>）

外で行う部活なので紫外線対策が大変です。

この季節でこのくらいだったら夏本場はどうなるんでしょう。
今から気が遠いです…。

第1話 雨の日の出会い

6月の、ある雨の日…。

時刻は午前3時を回ろうとしていた。

眠らない街、かぶき町もさすがにこの時間になると人通りが全くない。

そんな中、笠を深くかぶりフラフラと傘もささずに歩く着物姿の少女がひとり。

少女は灰色にくすんだ雨空を見上げその憂いの表情で何かを思っていた――。

だが、ついに力尽きたのかフツと前のめりに倒れた。

その場所は、奇しくも真選組屯所の前だった…。

「あー、雨相変わらず降ってんなア。」

暗闇に軽快な声が響く。

真選組1番隊隊長、沖田総悟は鼻歌を唄いながら屯所の周囲を徘徊していた。

月明かりだけがその足元を照らす。

普通はこんな時間に、しかも雨の日に外を歩き回ることなどめったにない。

だが今日はふと目が覚めたのだ。そして自然と足が外に向いた。

気がつくと屯所の方向に戻ってきていた。

明日に差し支えるし（仕事ではなく仕事から逃げるための体力のためだが）そろそろ寝るか屯所に戻る。

しかし、門が見えてきた時、その前に何かが倒れているのが沖田の視界に入ってきた。

沖田は不審に思いながらも近づいて行っ

いつでも応戦できるように刀に手を掛けながら。

いや、何かじゃない——人だ！

沖田はその冷え切った体を抱き起こすと、それは美しい顔をした少女だった。

だがずっと何も食べていないかのようにやせ細り、顔は青ざめていた。

沖田は少女を抱きかかえると、屯所の門をくぐった。

「——雨、止んだ。」そして傘をたたむ。

志保はあたたかい光によって目が覚めた。

目を開けると世界はぼんやりとしていたが、次第にはっきりと見え
てくる。

そこは部屋だった。

ぼんやりとした意識のまま身を起こそうとしたが、起き上がれない。

——何か重い。

横を見ると、栗色の髪の毛にハツとするほど整った顔立ちの少年が
静かに寝息を立てていた。

志保に抱きついて。

その瞬間、志保は覚醒した。

「ぎゃ ああああああー！」

志保は100mm先までも聞こえるぐらい大きな悲鳴を上げた。
悲鳴というよりは断末魔の叫びに近い。

そして襖の向こうからドタドタという足音が聞こえてきた。だんだ
ん近づいてくる。

「なんだア！？ 朝っぱらからうるせー……」

足音の主は襖を開け、志保と目があつた瞬間、身動きもせず固まった。

その男は無造作な黒髪に鋭い相貌を持っていた。そしてもともと瞳孔が開かれているであろう目をこれでもかというくらい見開いている。

志保はそんな瞳孔ガン開きにしなくてもいいから早くこの少年から私を解放してくれないかなー、と心の中で呟いた。

「総悟、トシ。何の騒ぎだア？」

その後ろからゴリラっぽい、というかゴリラそのものじゃね？ という感じの男も顔を出す。

そして瞳孔男と同じく固まった。

「ん、なんでイ。うるせーなー…。」

志保に抱きついていていた男が目を覚ましたようだ。眠たそうに目をこすっている。

その少年は、見ていると吸い込まれそうな深紅の眼をしていた。

寝起きで着物の前がはだけ色っぱかった。志保は不覚にも少しドキツとしてしまった。

「あ？　なんでイ、この女は。俺の部屋に無断で入りやがって。」

——　は？　それはこっちのセリフなんですけど！

「てめーが連れ込んだんだろーがアア！！　ちゃんと分かるように説明しろ！」

瞳孔男に先に言われてしまった。

「あー、あー……。あ、思い出した。」

志保に抱きついて寝ていた男——　沖田総悟は、志保を夜中に拾ったという。

そしてとりあえず部屋で布団に寝かせたらつい自分も寝てしまった——　ということなのだそうだ——。

志保は拾ったという表現に力チンとしつつ、助けてもらったのだからと頭を下げた。

沖田の説明を聞きながら瞳孔男こと、土方十四郎とゴリラこと近藤勲はホッとしたような、呆れたような表情をしていた。
土方はことさらに怒っていたが。

寝起きだったこともあり、沖田と土方がギャーギャー騒いでいるのをボーッと眺めていた。

そのうち、だんだんまぶたが重くなってきた、3人が気づかないうちにコテンと布団に倒れこんだ。

しばらくして、土方がふと志保の存在に気づいたように振り返った。

「オイ、お前名前は――」

「くーかー……。」

その時には、志保はすっかり眠りの中だった。

「くー……。くー」

「呼びましたかい、土方さん。」

沖田は名前も知らない拾った少女が夢の中にいる間に、隊服に着替えた。

土方が部屋に呼んでいるとひとりの隊士から言伝をもらったので、稽古の後、しぶしぶ来たのだった。

「お前、あんな得体のしれない女連れ込んでどうするつもりだ。」

自分の目の前に沖田を座らせた後、土方が唐突に切り出した。

呼ばれた時から、沖田はこのことの話なんじゃないかと察しはついていた。

「別に、どうもしゃせんよ。」

「お前は無責任すぎる。攘夷志士のスパイかもしれないんだぞ。」

「……直感でさア。」

「あ？」

沖田は雨の中、見つけた時のあの少女の顔が頭に浮かんだ。

気を失っているのに、何かに怯えているかのような、哀しい透き通った顔――。

「あの時、目が覚めた時……。外に出れば、何かいいものが見つかると思っただけさア。」

そして、目覚めた少女を見た時、それは確信に変わった。

「お前が他人に興味を持つんざ、珍しいな。」

土方は煙草に火をつけ煙を吐き出した。

「ま、もしあの女のせいで真選組に火の粉が降りかかったらてめーに落とし前つけてもらうからな。」

沖田は土方の部屋を出た。

名前さえ知らない雨の中出会った少女のことを思い浮かべながら――

第1話 雨の日の出会い（後書き）

今日はいとこの赤ちゃんの2歳の誕生日です。

遠いところに住んでいるのでなかなか会えませんが、この場を通してお祝いしたいと思います！

Happy birthday♪

この1年がきみにとっていい年になりますように！

菜の花

第2話 雨模様の空の下 刀が交りあう

再び目覚めた時、外からはまた雨の音が聞こえてきていた。

上半身を起こし少し開いた障子の向こう側をぼんやりと眺めていた。

雨の雫によって弾かれた池の水面が波紋を広げている。

「目が覚めたか。」

襖がパタンと開き、瞳孔を意味もなく開いた男が入ってきた。
煙草のにおいがかすかに部屋に広がる。

「……瞳孔さん。」

「誰が瞳孔だ！ 土方十四郎だ！！」

キレる土方の後からけだるそうな沖田も入ってくる。

土方と沖田は志保の目の前に座る。

その雰囲気から、志保も布団を出て2人の前に正座する。

「オメーは何者だ。」

前置きも何もなく土方が切り出す。

その鋭い相貌で志保を睨みつけている。

沖田はその隣りで面白そうにその様子を観察していた。

志保も土方をじっと見つめ返す。

「……行くあてもなく放浪しているただの人間です。」

ちよつととぼけてみせた。

「ふざけてんじゃねエ、ちゃんと答える!!」

土方が刀を抜き、光のような速さで志保の首元へあてがう。

志保は身じろきもしない。

「そうですね。——私の名前は、あまみやしほ雨宮志保。それ以外はまったく分かりません。」

約2年前――。

真つ暗で雨に濡れた、深い深い森の中で志保は目覚めた。

何もかも忘れ、たったひとりで――。

その時持っていたのは、鋭く研ぎ抜かれ、雨上がりの月明かりで妖しく蒼い光を放つ刀一本だけだった。

それに、「雨宮志保」と18年前の「6月4日」と彫られた蒼く輝く石のペンダント…。

自分の勘だけを頼りに森をなんとか出た。

ひたすら歩いて、人里に着くと耳寄りな噂が志保の耳に入ってきた。

眠らないネオンの街、江戸。

その人里をずっと南に行くと江戸に出るということだ。

志保はその街をただひたすらに目指した。

「……記憶喪失、ですかイ。」

「まあ、そういうことですね。」

志保の話を聞いた土方は、聞く前より少しばかり表情が険しくなくなっていた。

「まあ、お前の事情は分かった。だがな……」

「話は聞いたぞ！」

襖がスパンと開き威勢良く近藤が入ってきた。

「近藤さん。」

「人の話を盗み聞きですか。随分利口なゴリラですね。」
志保はいきなり入ってきた近藤を見ておもわず言う。

「ちよつとオオオオ、俺ゴリラじゃないから！！ ゴリラっぽくてもゴリラじゃないからアア。」

「ゴリラっぽいこと認めてんじゃねーか！」

「雨宮志保さん、行くあてがないなら、真選組に入らないか？」

その場にいる全員が近藤を見つめた。

「ちよつ、本気か近藤さん！？」

土方が立ち上がり叫ぶ。

「まったく、お人よしな近藤さんらしいですぜ。」

沖田は呆れたような、面白そうな、どこか嬉しそうな表情で肩をすくめた。

「いいだろう、トシ！　こないたいけな少女をほっておく訳にはいかんだろう。」

土方はため息をついた。
そして頭をボリボリ掻く。

こんな敵がいなそうな土方でも近藤には頭が上がらないのだろうと志保は思った。

「わーった。」

土方が志保の顔を真正面から見る。

「ただし——俺と剣ケンで勝負して勝ったらだがな。」

「「「！」「」」」

10分後、志保は今にも泣き出しそうな空の下で土方で向かい合っていた。

その傍らで近藤、沖田がその様子をじっと見つめている。

隊士たちには知らせなかった。

面白がった沖田がみんなを連れてこようとするのを土方が止めた。

たぶん、土方の配慮なのだろう。

「準備はいいか？」

土方が刀に手を掛ける。

「いいですよ、いつでもどうぞ。」

志保も2年前から片時も離さなかった刀をスラリと抜いた。

真剣勝負。一歩間違えれば命を落としかねない。

志保は深呼吸する。

深く息を吸うと、落ち着いた。

近藤がふたりを交互に見てから手を上げた。

「では――初め！」

土方と志保は同時に踏み出した。

双方の刀が鋭い音でぶつかり合う。

土方の剣は見えないほどに早い。
だが志保もそのスピードに劣らずついて行く。

いったん離れ、呼吸を落ち着ける。

「なかなかやるじゃねーか、お前。」

「アンタこそ、ニコチンのくせに体力ありますね。」

「お前マジで叩き斬ってやるからな！」

再び刀が交わる。

「そーだ、もう一つあった。」

土方の刀を受け止めながら呟いた。

「ああ？ 何だ、聞こえねーぞ！」

「私がかつていること——あともう一つは…」

ガキイイイン

志保の背中の方こうで、土方の刀が空まで響き渡る音を立て、真つ二つに折れた。

志保は刀を鞘に収めた。

それは、私にはこの剣一本で自分の身を守ってきた、強さがあると
いうこと——。

「…………。」

土方は信じられないという表情で折れた刀の先を見ていたが、やがてフツと笑って煙草に火をつけた。

近藤と沖田がふたりのほうへやってくる。

沖田も近藤も笑顔だった。

「アンタ、結構やりますねイ。」

近藤が手を差し出す。

「ようこそ、真選組へ！」

志保も微笑んでその手を握り締めた。

第2話 雨模様の空の下 刀が交りあう（後書き）

ご覧くださってありがとうございました！

志保と土方の戦闘シーン、なんかあっさり志保勝っちゃったなーとか思ったんですけど、なにせ戦闘シーンが苦手なものでして…。

これから真選組のみんなと奮闘していく志保を描きたいと思っているので、どうぞよろしくお願いします♪

そして連載開始から1週間も経っていないのにこんな作品にお気に入り登録してくださった3人の読者様、本当にありがとうございます！

第3話 雨宿りの場所（前書き）

いいですね、日曜日。

もうなんかずっと土曜と日曜であってほしいです。

第3話 雨宿りの場所

志保はシンとした夜の廊下にひとりで立っていた。

見渡す限り人っ子ひとりいない。

さかのぼること2時間前。

土方との対決の後、いろいろ準備があるからと沖田の部屋に押し込まれ一歩も外に出させてもらえず、あぐくについさつき地味の申し子のような男にここまで引っ張ってこられてのだ。

「呼んだら入ってきてください」って言ってたけどどんだけ待たすんだよ？

おいおいおい、これ何の仕打ちだよ？

入隊手続きをするから、と土方に言われていたのだが、何なの？

柄にもなく緊張してきた。

「じゃあ今から新入隊員紹介します。志保ちゃん、どうぞ！」

機嫌が良さそうな近藤の大声にビクツと反応する。

もう、こうなったら行くしかない。

襖を開けるとそこには人、人、人ばかり。

なんだよコレ、人多すぎ！

しかもみんなこっち見てるしイイイ！！

見せモンじゃねーんだよコルア！

そう思いつつもペコツときこちなく頭を下げる。

「あ、雨宮志保です…どうぞよろしくお願いし、ます…？」

頭を上げると、みんな口をポカンと開けたままとか、鼻糞ほじったまま一時停止している。

アレ、私なんか変なこと言っただけ？

「な「いよっしゃあアアア!!」」

「ついに女隊士来たアアア!!」

「いつかは来ると思ってたアアア!!」

「しかもめっちゃ美人だしイイイ!!」

「メス豚だしイイイ!!」

「オイ、誰だ今メス豚って言ったヤツ。」

「俺でさア。」沖田がぬけぬけと言った。

「やっぱりテメーかアアア!!」

何故かみんな一斉に叫び出した。

約1名変なのいたけど。

「局長どこで捕まえたんですか」もう局長もスミに置けませんね
「コノ」。」

「ガハハハ、いやいろいろあつてな。」

志保を連れてきた（というか持ち込んだ）のは沖田だったが、近藤が気分が良さそうだったので言うのはやめた。

「土方さんもうしたんですかその瞳孔ガン開きの顔、開きすぎてスミに逝つてろコノコノ。」

「総悟オオオオ！！ テメーそこに直れ、叩き斬ってやらアアア！！」

よく分からないがとりあえず受け入れられたみたいだ。

ホッとしているとコップと酒を渡された。

え、酒？

「近藤さん、私未成年……」

「じゃあみんな雨宮志保ちゃんの入隊を祝して、乾杯イイイ！！」

「乾杯イイイイ！！」

「オイ、聞けや。」

近藤の音頭を合図にみんな次々と酒を飲み始めた。

啞然としている志保の隣りに沖田がやってきた。

沖田もすでに酒を飲んでいるのか顔がほんのり赤い。

「雨宮も飲みなせイ。」

「いや、私未成年なんで。」

「大丈夫、俺も未成年でさア。」

「大丈夫な要素皆無ですよ。」

拒否し続けていたら痺れを切らしたのか無理やり飲まされた。

次の瞬間志保の意識は途絶えた。

「アリ？　　おーい、雨宮？」

沖田が無理やりお酒を飲ませると急にぱたりと倒れこんでしまった。

呼びかけても答えない。

「そんなに酒が弱いんなら飲まなきゃよかったのにねィ。」

沖田は自分が無理やり飲ませたことをすっかり忘れて志保の身を起こそうとした。

次の瞬間――

志保がいきなり抱きついてきた。

沖田はその勢いを受け止めきれずに後ろに倒れこむ。

「!？ オイツ、何してんでィ！」

慌てて志保を引きはがそうとするがまったくビクともしない。

幸いみんな酒に夢中で誰も見てなかったが、少し気恥ずかしい。

「にやはは〜沖田さ〜ん」

志保が急に甘えた声を出した。

「…頭壊れたかい？」

「ビドいですよ〜にやははは。」

……コイツは猫か。

「とりあえず俺から離れろィ。」

離れようとするがそうするとますますひつついてくる。

この体制じゃせつかくの酒が飲めない。

沖田は諦めることにした。

周りの騒がしい雰囲気の中で志保の小さな声が聞こえてきた。

「ここの人は、みんな楽しそうでいいですね…。」

「うるさい奴らばっかだけどねイ。」

「すごく、みんな…あつたかいです。」

「暑苦しいただけどねイ。」

「ここなら、私も雨宿りできるのかな…。」

「…は？」

志保の表情は、儚げで、寂しげで、今にも壊れてしまいそうだった。

「スー…スー…。」

聞き返した時にはもう沖田に寄りかかったまま眠りこんでいた。

「……。」

コイツも、見えない記憶の中で、ずっと苦しんでいるのかもしれない。

い…。

次の日の朝、志保は激しい頭痛と共に目が覚めた。

——何か重い。アレ？ 前にもこーいうことなかったっけ？

横を見るとまたもや沖田の顔があった。

「ぎゃあああああー！」

ああ…ようこそ、新しい生活。

第3話 雨宿りの場所（後書き）

これで晴れて志保も真選組の仲間です♪

にぎやかな生活、楽しそうだなあ。

真選組のあの雰囲気大好きなんですよね。

でも万事屋も好きです。はやく銀さん達も登場させたいですね。

第4話 思い出せないのに 懐かしくて

再び朝目覚めたら志保に乗っかっていた沖田を押し分け、志保は局長室を訪れていた。

「改めて真選組というのはな、江戸の平和を護る武装警察なんだ。」
近藤が重々しく説明する。

「そして幕府の將軍様を護ったりもする。つまり攘夷志士が俺達の最大の敵なんだ。日頃から襲われたりもするから、用心しなければならぬ。」

真選組と言うのは思った以上に大変な仕事なんだ。

「真選組は局長、副長、そして各隊を引っ張る10人の隊長がいる。俺が局長で、トシが副長、そして総悟は1番隊隊長だ。」

志保はうなずく。
それである2人はあんなに偉そうなのか。

特に沖田はまだ志保と同年代というのに。

「そこで志保ちゃん、君の役職は「1番隊副隊長でイ。」

沖田が部屋に入ってきて近藤のセリフを遮った。

「総悟オオオオ！！そこは俺がカッコよく決めるとこだよねエ！

「？」

「ま、雨宮はまあまあ強いからヒラの隊員じゃ分が悪いだろうって土方さんが言っちゃした。」

見事にスルーされた近藤は部屋の隅にうずくまってしまった。

「私に負けたのに随分上から目線ですね。」

「負けてねエ。ただ刀が折れたただけだ。」

土方も声もかけずスカズカ入ってくる。

みんな無礼だな、オイ。

「往生際が悪いですね副長さんは。だから瞳孔が開いてんですよ。」

「瞳孔関係ねーだろうが！！」

「おうおう、雨宮もつと言っちゃれイ。」

「テメーは黙ってる、総悟！！」

「志保ちゃん、今日は初の勤務だからトシと総悟にいろいろ教えてもらっちゃれ。」

いつの間にか復活した近藤さんが言った。

「えー、結構です。」

「露骨に嫌な顔すんな！」

結局2人に江戸の街を案内してもらいながら仕事を教えてもらうことになってしまった。

「オイ、雨宮。」

局長室を出ると沖田が志保の名前を呼ぶ。

「何ですか？」

沖田は志保の顔をじっと見つめる。

「何ガンつけてんですか？」

「…お前、昨日のこと覚えてねーのかイ。」

「は？」

昨日は志保の歓迎会を開いてもらった。

だが沖田に酒を飲まされたところまでしか記憶がない。

「なんかありましたっけ？ はっ、沖田さんまさかあなた私になにかしたんですか!？」

「大丈夫でイ。俺アお前みたいな女には興味ありやせんから。」

「うっ、そう真っ向から言われると傷つく…。」

「……………」

沖田の表情は、心なしか思い悩んでるように見えた。

「沖田さん？」

「てめーらなにやってんだアァ！！ 早く行くぞ！」
空気の読めない土方が遠くから叫んだ。

志保は慌てて走った。

沖田はその後をゆっくりと歩いてきた。

「雨宮、お前の隊服はまだ届いてないからその格好でいいだろう。」

志保は沖田に拾われた時の、青地に白い蝶が舞った着物を着ている。

おとといも昨日もいつの間にか寝ていたのですっと着っぱなしだった。

お給料をもらったら着物を買うに行こうと決めた。

「まずパトロールだ。俺達は江戸の街の治安を預かってるんだ。悪い輩がいたら即刻捕まえる。」

3人はパトカーに乗っていた。

土方が運転し、助手席に志保、後ろの座席に沖田が座っている。

……コレ、傍から見たら連行されているように見えないか？

まあ、いつか。

「普通は歩きだが今日は特別だ。いつもパトカーでいけると思うなよ。」

「あいあいさー。」

「真面目に聞いてんのか？」

車の中から見える景色は、今まで見たことのないものがたくさんあった。

色とりどりの看板。

見上げるほど大きい建物。

何もかもが新鮮だった。

「あ、甘味処だ。あとで行こうつと。」

「お前もサボりに走るなよ。」
ため息をつきながら土方が言った。

「？」

後ろのシートで、沖田は奇妙なアイマスクをつけ居眠りしていた。

「ここからは歩きでいくぞ。」

パトカーを強制的に降ろされた。

人混みの中を3人で歩いて行く。

2人の真選組隊服を見て、人々が怯えるような表情をするのは気のせいだろうか？

「真選組って一般人にはよく知られてるんですか？」

「ああ、まあな。」

「俗にはチンピラ警察24時って呼ばれてやす。」沖田が口をはさむ。

「チンピラ警察24時!？」

「あとは税金泥棒とか。」

……真選組のイメージどんだけ悪いんだ。

志保が苦笑いしていると、向かい側にさっき見つけた甘味処があった。

「あ、ちょうど甘いもの食べたい気分。」

土方にはサボるなど言われたが、これはサボりじゃない、市民の間で人気の甘味処の調査だ。うん。

先を歩く2人の眼を盗んでのれんをくぐった。

「おじさん、団子2本ください。」

「はいよっ！ 嬢ちゃん、見ない顔だねエ。」

真選組の新人隊員だとはなんだか言わないほうがいい気がする。

「最近この街にきたばっかなんです。」

「そうか、江戸の街はいいよ！ お前さんもきつと気に入るさ。」

「はい、そうですね。」

そんなふうに雑談してたら、またひとり客がのれんをくぐった。

「おい、親父、団子5本ね。」

「あいよ。」

—— 5本！？

どんだけ甘いものすきなの？

気になってその客の方を見ると――。

ふわふわの銀髪――。

鮮やかな深紅の眼――。

初めて見たのに、その男はどこか懐かしくて……。

眼があつた瞬間、気が付いたら、志保の瞳から涙がこぼれていた。

第5話 溶けてしまいそうな茜色の中で（前書き）

もうすぐ「ハリー・ポッター 死の秘宝 part 2」公開ですね！

私もう熱狂的なハリーポッターのファンなんです♪

映画もいいですが、私個人としては本もより素晴らしいです！！

まだハリーポッターシリーズ全7巻読んでない方は是非読んでみて下さい。

携帯版も出てますので！

第5話 溶けてしまいそうな茜色の中で

その銀髪は、心をざわめかせた。

銀髪男は志保を見て、ハッと驚く。

一瞬固まった後、オロオロと慌て始めた。

「え、お嬢ちゃんどうしたの！？ 何コレ、俺が悪い感じ？」

志保は銀髪男には何も非がないことは分かっている。だが涙が止まらなかった。

後から後から零れ落ちてくる。

「何かよく分かんないけど、ほらっ！ これやるから泣きやんでくれ、頼むから。」

そう言っつて銀髪男は手にしていた団子を2本差しだした。

志保は気持ちさがこみ上げて来て、グスンと鼻を鳴らした。

先ほどまで訳も分からず泣いていたのに、目の前であたふたしている男の様子を見たら自然と笑みがこぼれた。

「ありがとうございます。」

銀髪男もやっと志保が泣きやんだのでホッとしようだった。

「あのさ、確認しとくけど。俺何もしてないよね。俺ら初対面だよね。」

「そうです。こんなクルックルの天然パーマ見たのは初めてです。」

「アレ？ さっきまで泣いてたよね。」

それには答えずに銀髪男からもらった団子を頬張る。

甘い味が口いっぱいに広がった。

「あなた甘いもの好きなんですね。」

「は？」

「いくら甘い物好きの私でも一気に5本は買ったことないですから。」

銀髪男は一瞬呆けた後、目を輝かせて口を開いた。

「え、銀さんもあんこはこしあん派ですか!」

「志保ちゃんも? やっぱこしあんだよね。」

甘味処で出会ったきれいな銀髪の男は、江戸のかぶき町で「万事屋」というものを営む男だった。

その後、志保と銀髪男は甘い物好きということで意気投合した。

「そうだ。俺アここかぶき町で万事屋つてのをやってる坂田銀時^{さかたぎんとき}だ。お嬢ちゃんの名前は?」

渡された名刺には「万事屋銀ちゃん 坂田銀時」と書かれてあった。

「私は、真……いや、雨宮志保です。」

真選組の新人隊員だと名乗るのはなんだか気が引けた。

「雨宮、志保……?」

銀時は最初志保が泣いているのを目にした時のように驚いた表情になった。

「私の名前、変ですか?」

志保が聞くと、ハツとしたように「いや、なんでもねエ。」と笑った。

「そうだ志保ちゃん、アンタ刀とか持つてるか?」

「え? まあ持ってますけど」

一瞬真選組の隊士ということを取り戻したのかと思ったが、そういうことではなさそう。

「ちょいと悪いが、見せてもらえねーか?」

不思議に思ったが、銀時の真剣な顔を見て素直に渡した。

銀時は鞘から刀を抜いて――ほんの少し、表情が揺れ動いた。

「その刀がどうかしたんですか?」

「んにゃ……いい刀だな」

銀時はちよこつと笑って刀を返した。

その後、銀時が住む万事屋を訪ね、今に至る。

万事屋には、2人と1匹の住人がいた。

玄関をくぐると、メガネをかけたあまり印象に残らない男の子と、頭にぼんぼりをつけたチャイナ服の可愛い女の子、それに真っ白な毛で覆われた愛くるしい目の巨大犬だ。バタバタと玄関まで出迎えに来てくれる。

「銀ちゃん、誰アルかこの子。銀ちゃんのコレアルか。」と小指を立てながらしきりに言われたがそこはスルーした。

「コイツは新八と神楽。まあ、万事屋の従業員だ。」

「志村新八です。よろしくお願いします。」

「フン、万事屋のヒロイン神楽アル。」

スルーされたのが気に食わないのかそっぽを向いて言う。

「ワン！」

「あ、この子は定春です。」

志保はにぎやか過ぎる3人+1匹に迎え入れられた。

「やっぱあんこはこしあんだよね。」

「はい、つぶあんのつぶつぶした感じよりこしあんのなめらかな食感のほうが好きです。」

あんこ談議に華が咲く。

「何言ってるアルか！ そんな甘ったるいものなんか頭がクルクルパーの奴しか食わないネ！」

「神楽ちゃん、クルクルパーって俺のこと？」

「あなたには聞いてませんよ、チャイナさん。あんこは甘い物の王様です。ま、つぶあんは邪道ですが。」

「そうですか？ 僕はつぶあんも好きですよ。」

「だーってるメガネ。ちなみに俺はうぐいすあんも好きです。」

「何さり氣に自分の好み発表してんですか！ 持ってきてほしいことバレバレですよ！」

「そーですよ。あなたがどんなにうぐいすあんが好きでも私はこしあんしかお土産にはもってきませんから。」

「持ってくるんだ！ こしあんは持ってきてちょうんだ！」

ガブッ

「あだだだだ！！ 定春、噛んでる噛んでる！」

「お前らがうるさいから噛んだアル。定春はお利口ネ。」

「そうですね。どっかの同じ白髪よりよっぽど賢そうですね。」

「お前も含まれてるんだヨ。」

「だそうです、天然クルクルパーマ。」

「志保ちゃんンンンンン！？」

10年来の友達のように、スツと馴染むことが出来た。

万事屋の3人は、雨の日の仕事帰りに明かりのついている家に帰ったようなあったかさがあった。

心から、笑顔が綻んだ。

銀時は神楽や新八と一緒に騒いでいる志保を見て、フツと微笑みを浮かべた。

その直後に志保に「何ニヤけてるんですか。気色悪いですよ。」と言われ引っこんでしまったけれど。

気が付けば、窓から茜色の光が差し込んでいた。

「もうこんな時間かよ。」

「そーですね。次はこしあんのまんじゅう1人分持ってきます。」
志保は立ち上がりながら言った。

「1人分って、僕の方ですよ、志保さん!!」

「何言ってるんだ、俺の分に決まってるだろ!!」

ギャーギャーわめき出す2人を一瞥した後、志保はにこりとして言った。

「何言ってるんですか。私が食べる分です。」

ソファーに座って黒いオーラを出す2人とつかつかってくる神楽を完全にスルーして定春を撫でていると、外のほうからバタバタと騒がしい音が聞こえてきた。

その音はどんどん近づいてくる。

「「「雨宮ノ志保ちゃん!!」」」」

そして、ガラスと玄関の戸が開く音がし、真選組トリオの近藤、土方、沖田、それにキング・オブ・ジミ的な誰かがなだれ込んできた。

「みなさん、一体どーしたんですか。」

「雨宮…テメー今までどこほっつき歩いてやがったアアア!!」

一瞬立ちつくした土方だったが、いきなり志保の首元を掴みあげグイグイ締め上げた。

「あ。」志保は一緒に巡回していた土方と沖田をすっかり忘れていた。

ものすごく恐ろしい表情をしている。

志保はそれにも動じず答える。

「すいません。でも甘味処で銀さんに会ってから、ずっとここにいましたけど。」

土方の背中越しに、安堵したような近藤、ベスト・オブ・ジミと、やれやれと首を振る沖田が見えた。

「志保ちゃん、もしかして俺のこと覚えてない？　しかもさっきと今で何か呼び方変わってるし…。」

「すみません。あなたの存在自体知りませんでした。」

「何それエエエ！！　俺山崎、山崎退だからアアア！」

「あ、何？　志保ちゃん、コイツらと知り合いなの？」

顔を上げ銀時が尋ねる。

「志保ちゃんは真選組^{ウチ}の新入隊員だ！」
近藤が大声で答えた。

「お前、税金泥棒の仲間だったアルか！　どうりでやな奴アル！！」
神楽がさも気分が悪そうに叫んだ。

「チャイナ、てめーは黙ってるイ。」

「なんだとコラ。ガキは黙ってるアル。」

「てめーのほうがガキだろ。」

沖田と神楽はメンチを切り合う。

「ところで副長。なんでそんなに慌ててるんですか。」

志保がそう言うのと土方はますます慌てて志保を離れた。

「なっ、慌ててねーよ。」

その様子を見て銀時はハハン、という顔になった。

「志保、今度俺の分のこしあんも持って来てくれよ。」

志保は訳が分からなかったが、口を開く前に土方にまた首根っこを掴まれた。

「礼なんざ言いたかねエが、うちのモンが世話になったな。」

「別に、俺アなんにもしてねエよ。」

「フン。帰るぞ。オイ、総悟！」

神楽と相変わらず喧嘩していた沖田も「へーい。」とついてきた。

「二度と来ないヨロシー！」

玄関から顔を出して叫ぶ神楽に、志保もベーツと下を出した。

「雨宮。土方さん、お前がいないことに気付いた時、ものすごい焦ってましたぜ。」

帰りの車の中、後ろの座席に並んで腰かけていると、沖田がこっそり耳打ちしてきた。

「え、ホントですか？ 副長。」

「コラ総悟、聞こえてんぞ！！」

土方が運転しながらブチギレる。つーかちゃんと運転しろよ。

「俺が目を離れたからこうなったとか言っただけやし。」

「攘夷志士にさらわれたかもしれねえ、とも言っていました。」

「山崎、後で裏に来い。」

「なんで俺だけエエエエ！！」

「土方さんは心配症ですねイ。」

「でも沖田隊長もものすごく心配してたよ。」

「え？」

「隊士全員に連絡して探させたりして、江戸中走り回ってたよ。」

「へえ…。」

「山崎、後で裏に集合な。」

「また裏アアア！？　つーか裏ってどこの裏よ！」

「ガハハハ！　お前ら喧嘩はほどほどにな。」

「ていうか局長。これは喧嘩ではなく死刑^{リンチ}になりそうです。」

志保は4人の声を耳に聞きながら、窓の外を眺めた。

今朝も見た、かぶき町の景色がオレンジ色に、染まっている。

「銀さん。志保さん、次来る時まんじゅう持ってきてくれますかね？」

志保が帰った後、新八が期待するように言った。

「さーな。」

「税金泥棒の仲間になんか二度と来ないでほしいネ！」

「神楽ちゃん、そんな言い方はないだろ！」

ギヤーギヤー騒ぎ出す新八と神楽を尻目に、銀時はジャンプを読みながら椅子をキーキー鳴らす。

雨宮志保――。

それは、懐かしすぎる名前だった。

あんなに風貌もそっくりなのに、名前一緒なんて…。

ましてや持っている刀でさえアイツがいつも肌身離さなかったものと同じだった。

――いや、そんな訳ねエよな。

夕暮れの中、思い出されるのは何年も前に死に別れた少女のことだった。

「俺、どんだけ未練がましーんだよ…。」

銀時の弦きは、誰にも届かず夕暮れの中に溶けていった――。

（つーか狭すぎですよコレ！）

（しかたねーだろ、後ろ座席3人なんだから。）

（よーし、山崎降りろイ。）

（なんでいっつも俺なのオオオ！？）

第5話 溶けてしまいそうな茜色の中で（後書き）

第5話、ご覧いただきありがとうございます！

まず、2週間近く掲載できなくてごめんなさい！！

実は私つい先日まで期末テストがありまして…。

あるうことか七夕と沖田の誕生日をテストで過ごしてしまったので…。

ううう…。

でも、これからは夏休みなので、バンバン掲載していきたいと思います！

どうぞよろしくお願いいたします♪

第6話 仲間であることの証

朝。

昨日まで雨がしとしと降っていたのに、今日は雲ひとつ空になかった。

新しくもらった部屋で、外から差し込む日の光に目を細める。

沖田から借りた寝巻のまま縁側に出ると、庭の葉っぱに朝露が静かに零れ落ちている。

志保の体をしつとりと蒸し暑さが包んだ。

ああ、…夏が来たな。

「志保ちゃん！！ 君の隊服が届いたぞー。」

初夏の朝、屯所に近藤の明るい声が響く。

「へー、そうですか。じゃっ。」

志保は笑顔で言い、背を向ける。

「ちょっとオオオ！！ 志保ちゃんンンンン！！」

「だって、あんまりそーいうの興味ないですもん。」

「いいから着ろ。そいつアてめーが真選組の一員っていう証なんだよ。」

土方も話に加わる。

「それにお前の隊服は他の奴らのと違って特注だ。」

「でも…。」

なおも洩る志保に、沖田もひょうひょうと近づいてくる。

「ほお。お前、そんなに似合う自信がねーのかイ。」

挑発するような沖田の言葉に志保の眉がピクリと動く。

「そんなことないです。いいですよ。じゃあ着てやります。」

志保の言葉に近藤が嬉しそうな叫び声をあげた。

そんなに私の隊服姿見たいか。

志保はハメられたと思ったが、いまさら後には引けないので渋々別室に移動した。

「コレ…何か短くないか？」

別室に行き段ボールを開けた志保は即座に後悔した。

中には、隊長クラスの人たちが着ているようなスカーフ付きの上着だ。

ただ、問題なのは下だ。

スカート。

しかも短い。

「志保ちゃん、まだ？」

「はいはい、分かりましたよ。着りゃあいいでしょ。着りゃあ…。」

近藤の催促する声に半ば開き直って志保は着替えを終えた。

「局長ー。着替え終わりましたよ。」

部屋から顔だけ覗かせ外の様子をうかがうと、そこには近藤だけではなく土方と退屈そうな沖田もいた。

なんで局長コリッだけじゃなくまだ副長サコと隊長サドもいんだアアア！！

私の隊服見て笑われるのがオチだろうが！！
悲しい結末になるのが見え見えだろうが！！

志保は心の中で叫んだ。

「遅エよ。どんだけ待たせんだ。」

「俺ア忙しいんでさっさとしてほしいんですがね。」

「お前はサボって寝るだけだろ。」

「ちよっ…局長。なんでこの2人もいるんですか。」

「志保ちゃんの隊服初お披露目だ！」

「何嬉しそうに言ってたアアア！！」

志保は引つ張り出そうとするクソゴリラに抵抗して障子に貼りつく。

「何やってんだ。さっさと出てこい。」

「や、ちよつ…。」

無理矢理みんなの前に出された。

めっちゃ恥ずかしい。

「……………」

「……………」

「……………」

「…………ちよつと、何か言ってくださいよオオオ!!」

固まっていた3人は志保の叫び声で我に返る。

コレ地味に傷つくんですけど。

静かになるのホントに地味に傷つくんですけど。

「…や、可愛いよ。ウン、すごく可愛い!」

「局長、無理しなくてもいいですから。」

「まア…馬子にも衣装みたいな？」

「副長私に聞かないでください。」

「…アレだねイ。豚に真珠。」

「アンタはやっぱり豚関連かアアア!!」

……似合わないなら似合わないってハッキリ言えやボケ。

「副長、書類持ってきました。」

そこに実は監察だった山崎がやってきた。

「おう、山崎ご苦労だったな。」

「あ、山崎さん。この格好変ですか？」

「ん？ 全然、すごく似合ってるよ。」

「ホントですか!？ さすがジミー山崎さん!!」

志保は山崎に抱きついた。

「ジミー!？ 何それ、地味からきてるの？」

さすが山崎さん。

後ろの3人と違って女性の扱い方が分かってる。

「ちよつ、志保ちゃん！ めっちゃ見てるから！！ 副長達こつちガン見してるから！！」

「そんなのいいじゃないですか。あんな野郎ほつとけほつとけ。」

「いやいや全然よくないから！！ 志保ちゃんには見えてないけど副長と隊長今凄い顔してるからね、バックに鬼出てるからねエエエ！！」

「山崎、夕方裏に来い。」

「またそのネタアアア！？ しかもなんで夕方！？」

「山崎、土方さんが終わったら1時間後また裏に集合でイ。」

「同じことの二の舞！？」

「ガハハハ！！ お前ら仲が良いなー。」

「どこですか！？ つーか局長のセリフ前話ともろカブってますよー！」

「いいことですよ、仲がいいのは。」

「志保ちゃん見捨てないでエエエ！！」

志保は4人を後にしてその場を去った。

その日はそれからすれ違う人みんなに隊服のことを褒められ、志保は内心舞い上がっていた。

そして夕方、1時間おきに2回ほど山崎に叫び声がどこからか聞こえてきた。

第6話 仲間であることの証（後書き）

もうすぐ夏祭りや花火大会の季節ですね。

毎年楽しみにしているんですが、今年は原発事故の影響で花火大会は10月に変更になり、自分の町内の夏祭りは中止になってしまいました…。

でも、夏の風物詩を今年もしっかり楽しみたいと思います！

第7話 買い物へレッツゴー

ある日の朝、志保は新しく届いた隊服に身を包み廊下をブラブラと歩いていた。

忘れ去られてるかもしれないが、志保は一応「真選組1番隊副隊長」というポストを貰ってしまったので、近藤、土方、沖田以外は全員部下という状態なのだ。

そして18歳だと思われる志保は沖田と並んで隊内で最年少。

なのに自分より年上の人間達から「雨宮さん」や「副隊長」などと呼ばれるのは歯がゆい。

まあ、でもそこは仕方がないわけで。

「志保ちゃん！」

巡廻へ向かおうとしたら、近藤に呼び止められた。

「何ですか？」

「いや、前に着物を買に行きたいって言ったただろう？ だから今日は休めでいいから行っておいで。着物だけじゃなくいろいろ生活に必要なものも買ってくるといい。」

そう言っただけで巾着を渡された。

ずっしりと重く、中にはそれ相当の金額が入ってそうだった。

「え、でもこのお金……。」

「いいんだよ。俺だってそこそこ稼いでるんだから。」

そう言っただけでガハハハと笑った。

ああ、局長が神様に見えます（ゴリラの）。
後ろに何か輝いて見えるよ（バナナが）。

確かに仮にも真選組局長なんだから稼いでないことはないだろう。

それに自分は無一文だった。

ここはありがたく申し出を受けることにしよう。

「ありがとうございます。」

「うん、じゃあ行っておいで。」

近藤に見送られて門をくぐった。巾着の重みに、近藤の優しさを感じる。

「雨宮ー？ 何やってるんでイ。」

屯所の塀の角を曲がったところで、聞き慣れた声に呼び止められた。

「隊長。」

1番隊隊長である沖田とは、同じ隊の隊長と副隊長であることもあり、最近はよく一緒だった。

「局長が、いろいろ買ってきていいって言ってたので、買い物に行つてきます。」

「じゃあ、雨宮は江戸のこと知らねエーだし俺が案内してやりやしょうか？」

「結構です。だいたいあなたバリバリ仕事じゃないですか。じゃっ。」

沖田の目の前を通り過ぎようとすると、腕を掴まれた。

アレ、なんかこのシーン少女漫画っぽくない？

っーか早く買い物行きたいんですけど。

「俺が案内してやってるって言うてんでイ。それを断んのかおーコ

ラ。」

「隊長、キャラ変わってますよ。小悪魔が大魔王に変身してます。」

「俺アいつだって自分に正直に生きてらア。」

「そりゃーそうでしょう。隊長は正直すぎます。」

「よし、ここで永遠に眠らせてやるか。」

「いえ、喜んで一緒に来てください。」

志保が即答すると沖田は「分かりやいいんでイ。」とコロッと笑顔になった。

何だか今日も大変そうです。

「で、まずはどこに行きたいんでイ。」

かぶき町の繁華街へ志保を引っ張ってきた沖田は言った。

「そうですねー。まずは着物を買いたいです。」

「じゃああそこがいいでさア。」

そう言つて沖田が指さしたのは、いかにも高そうな呉服屋だった。

「え、あんな高そうなところ無理ですよ！」

「着物だけでも綺麗なほうがいいだろイ。」

「オイそれどういう意味ですかコラ。顔はブサイクってことですか。」

「じゃあ入りやしよう。」

「無視ですかコノヤロー。」

志保は強制的に呉服屋の中に連れていかれた。

クソー。分かってますよ。

自分の顔が整ってないことぐらい分かってますよコノヤロー。

でもあんなハッキリ言わなくなつたっていいだろーがアアア！！

「ホントバカだな。」

そんなこと思ってるわけねーだろイ。

そんな沖田の呟きは志保の耳には入らなかった。

「いらっしやいませ！」

店に入るとオーナーらしき人が沖田の方に寄って来た。

「旦那、来たぜイ。」

「沖田さん、いらっしやいませ。今日は何をお買い上げで？」

どうやら沖田はこの店の常連らしい。

なんかカッコいいな。

「いや、今日は俺のじゃなくてコイツのを頼んまσα。」

沖田が志保を指さす。

オーナーの視線が志保を捉えて、にんまりとなった。

「おや、沖田さんが女の子連れとは珍しいですね。まさか沖田さんのコレですかい？」

オーナーは小指をあげて言う。

何この人。つかコレ前々回くらいに万事屋のムカつくチャイナさんにもやられたし流行ってんの？

「違いますア。主人とペットで「違いますウウウウー！　あの、お友達です！　お友達ー！」

「チツ。」

「いやチツじゃないからね。何周りに変なこと吹聴してんですか。」

もう少しで危ないところだった…。

ほとんどペットって言ってたけど。

そうこうしている間にオーナーが3着着物を持ってきた。

「お嬢さんに似合いそうなものをいくつか見繕ってきました。」

黒地に桜が舞っている柄や、白地に青い花の柄の綺麗な着物が並んでいる。

「わあ、綺麗…。」

志保が決めかねていると隣りにいた沖田が口を開く。

「じゃあ、旦那。コレ全部くだせエ。」

「え？」

「はい、かしこまりました！」

「え？ え！？」

志保が焦っていると珍しく爽やかな顔で笑いかけてきた。

「俺からの入隊祝いでさア。」

「…どっかで頭打ちました？」

「ここでお前の頭打ち付けてやろうか。」

「いやとんでもないです。めっちゃ嬉しいです、ハイ。」

沖田は「分かってんじゃねーかい。」と志保の頭をグシャツと撫でた。

こういう時は身長差を感じてしまう。

いや、だってあの隊長が。

私のmyプリンを目の前で堂々と食っちゃった隊長が！

どんな悪い人にも心はあるんですね、うん。

志保が心の中で頷いていると、沖田がオーナーに声をかけた。

「じゃ、領収書は土方十四郎でお願いしまさア。」

さっきの感動を返してほしい。

その後、ふたりは（沖田の邪魔に遭いながら）もろもろの生活必需品を買って屯所に帰った。

「近藤さん、ありがとうございました。」

志保は巾着袋を近藤に返した。

「あれ？　ほとんど使ってないじゃないか。」

「まあ、ちょっと…あはは…でも必要なものは全部買ったので！
では！」

志保は首をかしげる近藤を置いてそそくさと部屋を出た。

言えない……全部副長行きだって絶対言えない…。

（オイ、俺のところに高額の領収書がいくつも届いてんだけど。）
（誰でしょうね。私じゃないですけど。）

（ぜってーお前だろ。）

（違います！ 隊長です！！）

（じゃあなんで着物3着って書いてあんだよ。）

（いやそれは…ぎゃあああー！！）

（バーカ。）

第7話 買い物ヘレッツゴー（後書き）

今回副題が見つからなかった…！！

いつもなんなかイイ感じなのが当てはまってたんですけど、今回はちょっとおふざけですね。

でも、いいよね。コメディーだもの（柳生篇のお妙と九ちゃん風）。

第8話 広がる仲間の輪（前書き）

なーんかいつも終わりがワンパターンですね。
もうちつと工夫したいです。

第8話 広がる仲間の輪

「わっ、どうしたんですか局長その傷!？」

沖田とつるんで土方のマヨネーズにわさびを入れたことがバレてしまい、屯所の中を鬼ごっこしていると、近藤がボロボロになって帰ってきた。

「大丈夫さ志保ちゃん、これは愛の試練なんだからなガハハ。」

「どうしたんですか局長、ついに顔面だけでなく頭までゴリラになりましたか。」

「トシー、志保ちゃんが反抗期ー!!」

「大丈夫だ近藤さん、いつものことだ。」

「それどーいう意味ですかコノヤロー。」

話を良く聞くと、近藤には惚れている女の人がいるらしい。そして傷はその人を護衛(という名のストーカー)しようとして照れ隠し(近藤の幻想だが)にボコボコにされた時に出来たものだそう。

「あの局長、今の話聞く限りどう考えても嫌がられてると思うんですけど。」

「ガハハ何言ってるんだ志保ちゃんー。お妙さんはシャイなアンチキショーなんだよ。」

「妄想も大概にしたらどうですか。」

「雨宮、もう何言ったって無駄だ。」

なんだか自分の局長がストーカーなんて悲しくなってきた。

次の日、志保が市街を巡廻していると、デレデレとした顔の近藤が歩いていくのを見かけた。

……あの顔は明らかにストーカーだな。

志保と一緒に巡廻していた土方の目を盗み、近藤の後をつけた。

「コラ雨宮どこ行きやがった——！！」という土方の叫び声が聞こえてきたが気にしなかった。

近藤の後をつけ始めてしばらく経つと、結構大きな道場らしき建物が見えてきた。

その門を近藤はくぐる。

「お妙さん！ あなたの勲で…グハア！」

志保は門から片目を出して覗くと、そこには美しい女の人が恐ろしい形相で近藤をボコボコにしている地獄絵図のような光景があった。

——激しく逃げたい！！

志保は回れ右をして全速力で走った。

グサッ

奇妙な音が足元でして、下を見るとそこには鋭く尖ったなぎなたが足から数センチずれた地面に刺さっていた。

「……………」

恐る恐る振り向くと、さっき逃げてきた門のところに、にっこり笑った女性が立っていた。

「そんな慌てて逃げなくてもいいのよ（逃げたら殺すぞ）。」

「……………ハイ。」

「局長が惚れている女性がこんな綺麗な方とは。」

「うふふ、あなたそんな本当のこと言わなくていいのよ。」

「姉上、ちよつとは謙遜を覚えて下さい。」

「そして新八君の姉上様とは。一瞬似てな過ぎて彼女さんかと思いました。」

「ちよつ、そんなわけじゃないですか志保さん！」

「うふふ、そうよ。」

「ですよ、新八君にこんな素敵な彼女さんが出来るわけじゃないですよ。」

出されたお茶をすすりながら志保がサラリと言った。

「どっちにしろ僕けなされてるよねエエエ？」

近藤のストーカー被害に遭っている美しい女性は、どうやら銀時の元で働いている志村新八の姉だった。

「お妙さん！ 新八くん！ 志保ちゃん！！ 助けてー！」

庭の洗濯物干しに吊るし上げられた近藤の叫び声は無視した。

「真選組1番隊副隊長、雨宮志保です。」

「志村妙よ。よろしくね、志保ちゃん。」

「はい。」

「でも真選組の1番隊副隊長ってすごいよね。」

「いえ、そーでもないです。上に局長コウジと副長タロウと隊長サトルがいるので。」

「……今すごいルビが聞こえたんですけど。」

「気のせい気のせい、新八君。ダメガネ」

「オイイイイ!! また聞こえたぞオオオ!! しかもなんだダメガネって!!」

「原作では「ダメなメガネ」の略ですが、私的には「ダメ」と「メガネ」の合わせ技です。」

「そんな工夫せんでもいいわアアア!!」

「今日は妙さん、ありがとうございました。今度うちのゴリラが無礼をしたらすぐにご連絡ください。この世から抹消するので。」

「まあ、ありがとう。助かるわ。」

志保はお辞儀して庭に出ると、気絶している近藤を地面に降ろして、引きずりながら志村家を出た。

こんな日も悪くないな、と思いながら東の方が黒く染まりかけた赤い空を見上げた。

「雨宮…どこ行ってやがった？ うおっ、近藤さんじゃねーか！」

屯所に着くと、真っ先に土方が声をかけてきた。

「ゴリラのハントをしながらお茶を飲んでました。」

「はあ？」と言う土方と気絶した近藤を残し機嫌良く志保は中に入っていたのだった。

第8話 広がる仲間の輪（後書き）

ご覧いただきありがとうございます！

実はこの前ご感想を頂いた時、

「『土方&沖田↓志保↓銀時』なんですか？」というご質問がありました。

うーん、確かに「恋あり」とは書いたんですが、いまのところはそういう感じなのはありませんね。

これ以上書くといういろアレなんで止めておきますが…。

少なくとも志保はいまのところ銀さんは恋愛対象ではありません。

「あれ、この人なんか懐かしい。」くらいな感じです。

でも、一応「恋あり」なのでいつかは誰かとくっつきます、たぶん。

それはこれからの展開にご期待下さい！

第9話 過去の破片

「いいか、コイツらは要注意人物だ。」

外で蝉が鳴いている。

それは、毎年1番暑い夏の次期の到来のしるしだった。

「狂乱の貴公子——かつらこたろう桂小太郎だ。」

うちわでパタパタ仰ぐ志保に土方が重々しく言う。

「目印はうざったい長髪…見つけたら何よりも優先して斬れ。分かったな？」

「この顔にピンときたら」という指名手配の紙には長い黒髪の男が載っていた。

「要は自分たちじゃ捕まえられない——ってことでしょ？」

「んなわけねーだろ。てめーがコイツが危険人物だってことを知らないでこのこ近づいてって斬られたらいろいろ面倒なんだよ。」

「隊長言っていましたよー、副長が何回も桂を取り逃がしてるって。」

「あんの野郎オオオ！！　あとで叩き斬ってやる！」

あー、暑い。

なんで真選組の隊服ってこうカチツとしてんだろ。

夏バージョンとか作ってくんないかな。

「オイ、雨宮。聞いてんのか。」

「ハイハイ。そいつがいたら髪の毛切ってやりますよ。」

「そっちの切るじゃねエよ！！」

「ハイハイ。」

かぶき町を歩いていると、新しい甘味処を発見し巡回ルートから大きく外れてしまった。

結果、

「思い切り迷いましたアアア！！」

ちなみに志保が巡回中に迷子になるのは3回目だ。

「ヤバイ…副長にドヤされる。」

以前仕方なく迎えに来てもらったときにコテンパンにされた。

その上雨が降ってきて、志保はもう泣きたい気分だった。

ひとりでブツブツ呟いていると、上の方からギャーギャーうるさい声が聞こえてきた。

見上げると、そこには案の定「万事屋銀ちゃん」の看板が。

そしてふと手をつつこんだポケットには何故かまんじゅうが1つ（このネタが分からない人は第5話をチエケラ！）。

「ラッキー。」

足は、自然と階段へ向かっていた。

ピンポーン

「銀さん、志保ですけど。」

チャイムを鳴らし、返事を待たずに玄関を開け中に入ると、そこには驚きの光景が広がっていた。

「！」

志保が万事屋のチャイムを鳴らす数十分前、やっぱり万事屋のチャイムは押されていた。

「どちらさん？ 新聞ならいりませんけどー。」

銀時が玄関を開けると、そこには視界に一瞬さえ入れたくない2人（？）組が立っていた。

「銀時… 今日こそはウンと言ってもらうぞ。」

『おじゃまします。』

うざったい長髪、幕府直々の指名手配犯、桂小太郎。

そしてその桂の片腕でもあるペットのエリザベス。

今1番来てほしくない人物堂々の1位だ。

「なんだよツラ。おめーホントに他に行くとこねーのかよ。攘夷志士って暇なのな。」

「ツラじゃない桂だ。銀時、上がらせてもらうぞ。」

桂は勝手にリビングへ入った。

「あれ、桂さん。また来たんですか。」

と新八は言いつつも桂がソファーに腰掛けるとお茶を持ってきた。

「うむ、すまない。」

エリザベスもポニユっという効果音をつけて桂の隣りに座った。

「銀時、これまでも言ってきたが俺と一緒に再び刀を取ろうではないか。」

「……………」

「仲間を失いたくないというお前の気持ちも分かる。だが心配はいらん。俺達は無血革命を重んじているんだ。なっ、エリザベスそうだろう?」

『そうですね、桂さん。』

「……………」

「新八君とリーダーもそう思うだろう。こんな死んだ魚のような目よりきらめいた目の方がいいだろう。」

「……………」

「……………」

「……………」

「無視か貴様らアアアア！！　あくまでだんまりか！！　いいだろう、こっちにも秘策があるんだ。ちよつと悪いがエリザベス、例のアレをとつてくれんか。」

その言葉に反応し神楽が桂の腰のあたりをまさぐる。

「あ、そうそうそれ。」

それはチョコやらキャンディやら銀時の好きそうな甘いものばかりだった。

全て神楽の胃袋に収まった。

「ふふふ、銀時。これを見てもまだ無視を決め込むか？」

「桂さん、秘策消化されちゃいました。」

「何イイイ！？」

満足そうな神楽と怒った桂と、仲裁に入ったエリーとなんやかんやで加わった新八が例にもれず騒ぎ始めた。

漫画でいう白いもやもやの中で殴ったり蹴ったり殴られたり蹴られたりされている状態である。

そんな様子をジャンプに目を落としながら相変わらず無視していた

ら、本日2度目のチャイムが鳴った。

4人は喧嘩に夢中でまったく気付かない。

「銀さん、志保ですけど。」

何だよ、まためんどくさい奴じゃねーか、と顔をしかめて数秒後、大変なことに思い当った。

——ヤバい、今志保は真選組だ。

——しかも記憶喪失ぶっこいてんじゃねーか!!

「ツラア、お前早く逃げろ!」

銀時の叫び声にひとまず喧嘩は収まったが、桂はその場にいたままだった。

ガラッ

「!」

振り返ると、そこには真選組の隊服を着た、志保が驚きの表情で突っ立っていた。

万事屋に入ると、そこには先ほど土方に見せてもらったばかりの、桂小太郎が当たり前のようにそこにいた――。

「か、つら……。」

指名手配犯が、そこにいるのが信じられなかった。

志保自身も驚いた表情をしているだろうが、それを見つめている桂の表情も、見ているものが信じられないという顔だった。

それはあの時の、銀時の表情にそっくりだった。

「志保……!？」

「!？」

なぜこの男が、自分の名前を知っているのだらう。
だが、ひるんでる場合ではない。

『見つけたら何よりも優先して斬れ。』

「桂アアアア！！」

志保は刀を抜き桂に斬りかかった。

その刀を自分の刀で受け止めながらも、桂の表情は変わらなかった。

だが、ふと哀しそうな、憤りを感じているような、やるせない顔になった。

一瞬、手の力が抜けた。

その隙を見て、桂は雨の中オバQのような謎の生命物体を連れて逃げていった。

「待て、桂アアア！！」

その叫び声は虚しく空に響いた。

桂が逃げていった後、志保はすぐに帰った。

「なぜ桂があなたの家にいたのかはまだ聞きませんから。」

冷たい口調を装いながらも、どこか困惑した色を見せながらそう言うて。

そして志保が帰り際そつと渡したまんじゅうは、少し変な味がした。

「今日はあの女とヅラが来て嫌な日だったアル！」

「あれ、銀さんどこ行くんですか？」

「おお、ちょっとヤボ用。すぐ戻るわ。」

プリプリ起こる神楽とお茶を片付けている新八を置いて銀時は外に出た。

雨は、上がっていた。

ゆつくりと歩いて街外れの川に行くと、やはりそこに目当ての奴はいた。

「ッラ。」

「ッラじゃない、桂だ。」

隣りに並びいつものセリフを言うと、やはりいつものセリフが返ってきた。

「志保は…死んだのではなかったのか。」

「…俺だってそう思ってたさ。だけどある日、またふっと現れやがった。」

見下ろす川の流れはゆるやかで、その水は底の小石が見えるくらい澄んでいた。

「初めて見た時はあんまり似てるもんだから、腰ぬかすかと思った。だけどな、それ以上に驚いたのは…」

桂は黙った続きの言葉を待つ。

「——泣いてやがったんだ。」

「泣いていた？」

あの白い頬を伝っていた透明な雫は、今でも頭にこびりついている。

「ああ。それでもただのそっくりさんかもしれないね。エッという考えは捨てられなかったな。名前が一緒でも、あの刀でさえ同じだって知っても。」

銀時はしゃがんで川の水を手ですくった。
水は、すべて手から零れ落ちてしまう。

「その考えは捨てたほうがいいな。」

「あ？」

桂を見上げる。その目は真剣だった。

「あの目——アイツと目があつたんだが、蒼く、染まっていた。」

「！」

そうだ。

数年前、死んだはずだったアイツの瞳は、黒い瞳だが瞳の奥が蒼く澄んでいた。

そして——

「アイツは、俺に殺意を持っているということだな……。」

その瞳は、雨空の下で殺気を持つと鮮やかな蒼に染まる――
|。

「……桂。」

「桂じゃない、ヅラだ。あつ間違えた。」

「アイツは今2年前から前の記憶を一切失ってる。つまり俺達のことをなんにも覚えてねーんだ。」

「それは本当か…?」

「ああ、だから志保がお前に殺意を持っているというのは半分当たっていて半分外れてる。」

「……。」

「アイツは、俺達と過ごした日々を忘れてるんだからな。」

銀時は、いつだって忘れたことがなかった。

もう2度と戻ることができない、志保やみんなや、先生と過ごしたあの頃を……。

松陽先生——。

志保、俺達のこと思い出してくれんのかな。

思い出してくれるよな、先生……。

数日後、銀時はお腹を壊して1日中トイレから出られなかった。

原因は、10日も賞味期限を過ぎたまんじゅうを食べてしまったことだそうだ。

第9話 過去の破片（後書き）

今回、めちゃめちゃ長いですね！

2話分に分けようかとも思ったんですが、面倒くさくなりそうだったので。

桂も登場して、いよいよ過去が少しずつ見えてきました…よね？

あと、第8話でお妙さんのことを「新八の姉」じゃなく「新八の弟」にしていたことがある心優しいユーザさんのおかげで発覚致しました…。

「何だよコレ」と思った皆さま、本当に申し訳ありませんでした。

これからは気をつけていきたいと思います！

第10話 夏の夜の風物詩 前篇

7月下旬のあくる昼、庭の隅っこで近藤と沖田が何かこそこそやっているのを、偶然縁側を歩いていた志保は目撃した。

そつえばこの組み合わせは意外と見たことがない。

近藤と沖田が2人きりで一緒にいるのは珍しいし、沖田が昼間あの変なアイマスクをつけて寝ていないのや、近藤がお妙のところに行っていないのはもっと珍しい。

「？」

ニヤニヤしているのが気味が悪かったが、突っ込むとバズーカをぶっ放されそうだったのでそのまま通り過ぎた。

その1週間後、今度はその2人組に山崎も加わっていた。

朝の早い時間に、道場の真ん中で何かやっていた。

小さい机を囲んで、またもやニヤニヤしている。

「？」

誰もいない時間に練習にきた志保だったが、そのまま何もせず立ち去った。

その理由が分かったのさらに3日後の夜中だった。

「…何なんですかこの騒ぎは。」

部屋ですやすや寝ていた志保は、いきなり沖田に叩き起され庭に連れてこられたのだ。

『チキチキ真選組夏の肝試し大会〜ドンドンパフパフ〜』

「何って、肝試しだよ志保ちゃん！」

「そんなのは見りやあ分かりますよ。そうじゃなくてなんで人をわざわざ叩き起して肝試し？ もう私寝ていいですか。」

隊長と局長がこそこそやってた正体はこれか。

見渡すと庭にはほぼ隊士全員眠そうな顔でいる。

中には明らかに無理矢理連れてこられましたという感じの人もいた。

「何が肝試しだ。くだらねエ。俺は部屋に戻るぞ。」

土方もどうやら沖田の被害に遭ったらしい。

「土方さん、やっぱり今でも幽霊が怖いんですねイ。」

「んなわけねーだろ！ ただめんどくせーだけだ。」

「今でも？」

今でもということとは前にも同じようなことがあったということだろう。

「ああ、前に屯所で幽霊騒ぎが起きたんでイ、そんな時土方さんビビってつぼの中に入ろうとしてたんだぜイ。」

「そうだったのかトシ！」

「うるせえ！！ あん時はただびっくりしてただけだ！！ なんだ
雨宮その目は！」

ジト目で土方を見る志保に沖田のドSの矛先が向かった。

「ほお、雨宮…お前はお化けは平気なんですねィ。」

ビクツと志保の肩が跳ねる。

「え？ 私ですか？ わ、私は平気に決まってますよコノヤロー！
何言ってるんですか。死ねば？ 土方死ねば？」

「なんで俺が死ぬんだよ。」

「え？ まさか志保ちゃんお化けがこわ…」

「おあつと局長顔に蚊がアアア！！」

「ぐほア！」

志保は近藤の顔面を思い切り平手打ちした。

それを見た沖田がニヤリと黒い笑みを浮かべる。

あ、マズい。

「あつ、雨宮の足元に生首が！」

「ひぎゃあああああ！！」

志保は悲鳴をあげて近くにいた沖田に飛びついた。

「あ。」

恐る恐る顔をあげると、真上に志保を見下ろす沖田のドヤ顔が。

志保は慌てて沖田から飛び退く。

「まさか雨宮も幽霊が苦手だったとはねイ。」

「な、何言ってるんですか。今のはさっきぶつけた足の小指がまた痛んで『ひぎゃあああああ』となっただけです。オイ、やめろその笑顔！」

「意外に可愛いところもあんじゃねーかい。」

「なっ、なななに言ってるんだ殺しますよコノヤロー！」

「あ、また後ろに足のない女が。」

「ひっ…ってまた驚くとおもったかアアア！！」

「でも志保ちゃん本気で驚いてたよね。」

「何こんなとこで地味な観察力発揮してんじゃねエジミ崎イイ！
！」

「ちよつ、何ジミ崎つてエエエ！？」

「ま、土方さんも雨宮も参加決定で。」

さつきから志保が騒いでいるのを高みの見物していた沖田が口を開いた。

「「はア！？」」

土方と志保の声がハモる。

「何言つてんだ。俺はやらねーぞ。」

「あらら、やっぱりビビりは直ってないんですねイ。」

「何言つてんだ総悟、雨宮と一緒にすんじゃねエよ！！」

唐突に土方が志保を指さして叫んだ。

「なつ、何自分が図星つかれたからって瞬時に私に矛先向けようとしてんだマヨ方アア！！」

「誰がマヨ方だ！！ ビビって総悟にしがみついていただろーが！！」

「ビビってません！ちょっとびっくりしただけです！どこ見てんですかバーカバーカ死ぬ。」

「バカなのはお前だろ！ つーかお前ちょっと涙目になってんの知ってんだからな！！」

「なつてねーよコノヤロー！！ こつちだつて隊長が『足のない女』って言つてた時コケかけたのお前、見てんだからなはっはー！！」

「んなカツコわりーこと誰がするかアアア！！」

「してたのはお前だろオオオ！！」

「あ、ふたりの間に半透明の子どもが。」

不毛な言い争いを続ける2人の間を沖田が指して言った。

「「ぴぎゃああああ！！」」

結果土方と志保、「チキチキ真選組夏の肝試し大会以下省略」に強制参加決定。

第11話 夏の夜の風物詩 後篇

前回のあらすじ。

ある日夜中に叩き起された志保は、『チキチキ真選組夏の肝試し大会』ドンドンパフパフ』に強制参加することになってしまい、その上なんやかんやで幽霊の類が大の苦手なことが発覚してしまったのであった。ついでに土方も。

ルールは簡単。

今から決められたルートで屯所内を周り、何箇所かあるポイントでそれぞれ石を取ってくればいいのだ。

全ての石を取ってこれれば、商品のスイカがもらえるらしい。

「そんなスイカなんて嬉しくないんですけど。」
志保は覚めた表情で言う。

「『いよつしゃスイカアアア!!』」

「喜んでるよ。なんだよ『スイカアアア』って。」

「はい、じゃあ順番決めるんで雨宮もクジ引いてくだせイ。」

「ハイハイ、もう引きますよ。」

沖田が持ってきた白い箱（白つてとこが何か不気味じゃない？ 不気味じゃない。ああそう。）の中に手をつ込みゴソゴソ紙を探す。

取り出し折りたたまれた紙を広げると――

「ラスト決定！。」

そこには最後と大きく書かれていた。

なぜに最後オオオ！？

最後つてなんかやじゃん！！ みんながスイカ食いながら「恐かったよね」とか言ってるそばで行かなきゃなんないじゃん！！ いや、別にスイカ食いたいわけじゃないけど……。

「じゃあ何気に1番を引いた土方さん、ちゃっちゃと言ってきてくだせエ。」

どうやら土方は1番を引いた様子。…コレ明らかに隊長の陰謀だろ。

土方は最後まで舌打ちしながら言い訳しながら暗闇の中に入ってしまった。

数分後。

——ぎゃあアアアア!!

「今のは副長の…声、ですね。」

「まさかトシ…なにかあったんじゃ。」

「いやまさかね…あはは。」

「つかおめーらも一緒に仕掛けてただろ。」

何故か仕掛け側だったはずの近藤や山崎も悲鳴を数回あげ残念な姿でご帰還し、ついには志保の順番が回ってきてしまった。

みんな疲れきって口から魂飛び出ている状態だったので最初に思い描いたみんながスイカをワイワイ食べてる中しょんぼり、という感

じではなかったが、それだけに恐怖は倍増してしまう。

だが沖田の手前「やっぱ無理です」は通用しない。

「じゃ、じゃあいい行ってきます。」

「どもってるぜイ。」

「う、うるペー！」

「うるペーってなんだようるペーって。」

事前に配られた地図を見ながら（どこまでアイツらは用意周到なのか）恐る恐る廊下を歩く。

「まずは山崎さんの部屋か…。」

あのジミ崎もこそそ一緒にやってたもんな、と心の中で志保は呟いた。

実際にはそんなに冷静ではなくすぐにでも逃げ出して部屋で布団がぶりたいくらいビビっていたのだが。

そうこうしているうちに山崎の部屋たどりつく。

監察という特別部隊なので、隊士たちの部屋があるあたりでも隅の方に部屋があるのだ。

志保はそおつと襖を開ける。

部屋の中は殺風景で、あるものといったら机と布団とミントン道具ぐらいだ。

外を吹く風の音にもビクツとしながら机に近付く。

そこには指定の石が1個置いてある。

とりあえずほーっと息をついて石を手にとると、足に何か勢い良く当たった感触が。

いや、当たったというより何かに掴まれている。

「……………」

下を見ると、暗闇でボンヤリとかすんだ2本の白い手が、志保の足首をむんずと掴んでいた。

「ふぎゃふああああー!!」

「今の声…志保ちゃん早すぎだろ。」

「ザキの部屋のところですネイ。」

「あれアどんなやつでもビビるな。仕方ねエよ。」

「アレ、土方さん。あそこのトラップで引っ掛かったのは土方さんと雨宮だけですぜ。」

「……。」

そんな会話が庭で行われているとも知らず、志保は全力疾走で山崎の部屋から脱出した。

「なんだよアレ、どーやったらあんなのを仕掛けられるんですかコノヤローー!!」

志保の半泣きの叫び声は誰にも聞きとられず屯所の闇に消えていった。

「つ、つぎは食堂……。」

早くも疲労の色が見え始めている志保。

よろよろと食堂に入る。

食堂は普段多人数で賑わい活気がある分、今は沈んで見えた。

「今度はどこにあんのよ。」

半ばやけになりながら目当ての物を探すと、それは厨房の台の上にあった。

志保は周りの机の下などを確認し、バツと勢い良く石を手取る。

カチッ

「え？ 『カチッ』 ってなに？」

今度は右も左も下も確認したはずなのに。まさか…

ブチュッという気色悪い音と共に黄色いマヨネーズがポトポト上から落ちてきた。

「……………」

志保は体が震えたが、恐怖からではなく怒りからきたものだ。

「あんのマヨネーズ野郎死にやがれエエエエ!!」

「あんのマヨネーズ野郎死にやがれエエエエ!!」

志保の本日2度目のシャウトは、庭にいるお騒がせ野郎の連中の耳にも届いていた。

「…アレ俺のことだよな。つーか何か怒ってねーか？」

「さては食堂のマヨネートラップですねィ。」

「え、あれはキツイ！ この感じだともろにかぶつちまったみたいだなあ。」

「俺は嬉しいけどな。」

「アンタはね。アンタは嬉しいでしょうよ。」

上から土方、沖田、近藤、またもや土方、それに山崎が口々にグダグダな会話を繰り返していた。

志保は、食堂マヨネートラップの後も次々仕掛け（最早肝試しというよりただの嫌がらせ）を乗り越えた。

ちなみに庭の仕掛けはバナナが次々に飛んでくるといふ明らかにゴリラ向けのもだった。

「……………ナイ。ココはナイ。」

そして、ついに最後の場所に辿り着いたのだが——そこは道場だった。

道場と言えば、この極度に面倒くさい企画をつくった3人がこそこそやっていた1番危険そうな場所なのだ。

しかしここで止まっても仕方ない。

志保は意を決して敷居をまたいだ。

高い位置にあるいくつもの窓から月明かりが淡く差し込み、なにやら幻想的な雰囲気醸し出していいた。

中には、中央のあたりに小さい机がひとつだけだ。

きよろきよろあたりを見渡して瞬時にそこへ移動した。

しかしそこにはメガネがひとつあるだけだった。

しかもそれは印象に残らない至って普通のメガネだ。

他にどうしようもないのでとりあえずかけてみた。

すると、左右にひとつずつ…気配が現れた。

振り向くと、それぞれ頭からつま先まで隠れる白い布をかぶった人影がゆらゆら揺れているではないか。

小さいほうの影には、持って帰らねばならない石が、その手(?)に握られている。

「僕の…メガネをかえせ…。」

だんだん影が近づいてきて、距離が短くなっていく。

志保は息をのむ。

気絶しそっだが必死で耐えた。

その時機の向こう側に、フツと前触れもなく細い女性が現れた。

「楽しそうね……私も混ぜて……？」

その女の人は月明かりしかない闇の中なのに不自然に白く輝いていて……よく見ると、足がない。

—— 足が、ない？

「ぎゃああああああー！」

志保より先に悲鳴を上げたのは、白い布をかぶった背の高いほうだった。

そして一目散に道場から逃げていく。

もうひとりのほうも「あつ、待ってくださいー！」と叫んで、石を放り投げて後を追いかけてしまった。

「メガネ、置いてっちゃったよ。」

かけっぱなしだったメガネを取って首をかしげる。

そして落ちている石を拾ったところで、白い女性のこと気が付く。

しかし、そこにいたはずの女の人は、跡形もなくなくなっていた。

アレ、どこに行ったんだ？

つーか足なかったよね。

それにどっかつーと白く輝いているっていうより半透明……。

……………。

「うぎゃあああ本物オオオ!？」

結局志保はその場で気絶。

駆け付けた沖田ら4名によって部屋に寝かされ、その後数日つなされましたとさ。

くおまけく

「ハイ旦那。この前のギヤラでイ。」

肝試しの晩から数日後、沖田は万事屋を訪れていた。

実は沖田は先日の肝試しのためにわざわざ万事屋3人にお化け役を依頼していたのである。

山崎の部屋の白い腕の正体は神楽。

そして道場の白い布の2人組が銀時と新八である。

「それとなぜか新八君のメガネも雨宮が持ってたんで返しときまさら。」

「あ、き、肝試しね。ハイハイ…そこ置いといて。ちょ、今俺のことはほっておいて。」

銀時は肝試しの話題が出たとたん怯えているようだった。

新八もお茶を出した後はげんなりとソファーに座っている。

神楽だけは、「税金泥棒のために働くななんてごめんアルけど、金も貰えたしご飯も腹いっぱい食べれたし、まあいいアル！ 後半寝て覚えてないアルけど。」と元気そうだった。

「旦那方、何かあつたんですかい？」

「別に…何も。」

沖田は、銀時と新八も本物の幽霊を目撃したことを知る由もなかった。

第11話 夏の夜の風物詩 後篇（後書き）

夏の真選組の出来事っていったらまず肝試し、怪談話系があがりますよね？

実は私もそっち系は大の苦手なんです…。

遊園地のお化け屋敷なんてもつてのほか。

中学校の文化祭のでも入れないビビりなので（＜―＞）

でも、銀魂でやると面白いですよね！

私のは面白くないかもですが…。

第12話 水平線のかなた？

「あれ、皆さんお揃いで。何やってるんですか？」

ある日の朝、会議室に行くと近藤、土方、沖田が風呂敷に着物などいろいろなものを詰め込んでいた。

「おう、志保ちゃん！ 何って、海に行くんだよ、海！」

「は？」

浮足立つゴリラに詳しく話を聞くと、どうやら日頃の感謝を込めてみんな海に行くらしい。

「でも局長、みんなで行ったら江戸はどうなるんですか？」

最もらしいことを聞く志保に、近藤は得意げに笑う。

「はっはっは、志保ちゃん。そんな心配は必要ない！ 行くのは俺とトシと総悟と君だけだよ！」

「近藤さん、山崎を忘れますぜイ」

「がはははは、そうだったなあ！」

「や、そんな心配してないですけどね…」

「ったく、本当にアンタはどこまでも子供だな」

「雨宮、お前もさっさと準備しろ。置いてくぞ」

「なーにアンタも張り切ってんですかクソマヨ。海で魚に食われて死んじまえばいいのに」

「そんなデカイ魚いねーよ！ー！」

「まだ前話のマヨネーズのこと根に持ってますねイ」

「元はといえばアレはお前が用意したんだろーが、総悟」

そんな会話をしながら、真選組海へレッツゴー。

「わあー…！」

初めて目にする海は、どこまでも広がっていて不思議に懐かしかった。

「おおー、よしっトシ、総悟！ スイカ割りしようスイカ割り！」

「アンタら何かにつけてスイカ好きですね。普通ならバナナでしょう。ゴリラなんだから」

「志保ちゃん…俺泣いてイイ？」

浜の隅っこで涙をゴシゴシ拭きながらスイカを食べる近藤を一瞥する志保。

「スイカ割りのスイカなくなっちゃいますよ」

「大丈夫志保ちゃん、局長予備のスイカ10個ぐらい持つてきてるから」

「真選組屯所はどれだけスイカが有り余ってんですか。つか山崎さんいたんですね空気かと思いました」

山崎も近藤と一緒にスイカをムシヤムシヤ食べる。

なんだかお互いに慰め合っているようだ。

つかスイカ10個も持つてくる余裕がどこにあんだ、と辺りを見回すと、どうやらスイカを入れていたらしい袋が半分ほどペタンとつぶれていて、そのすぐそばにお腹を大きく膨らましたオレンジ色の髪の毛のチャイナ娘が転がっていた。

「「あ」「

土方に向けて砂を投げていた沖田と、声がきれいに重なった。

「なんだよ、またテメーらか。健気な庶民から税金とって海でバカ

ンスですかコノヤロー」

「ていうか僕たち、志保さんが真選組に入ってから会う確率高くな
ってません？」

「まったくハタ迷惑なヤツアル。とつとと残りのスイカも置いて失
せるヨ！」

おなじみの3人組である。

最近、目障りなほどよく会う。

まあ、お互いにとってはお互いの存在自体がそもそも目障りなの
だ
が。

「あんだとコラ。それはこっちのセリフだ」

「こちとら愚民どものために毎日働いてんでイ」

「誰がグミですか！」

「いや、3人の近藤さんと同じ聞き間違えしてんじゃねーよ」

「そつだぞ！ これは俺達のスイカだ！！」

「スイカはどうでもいいです。なんならそのチャイナ娘さんに全部投やってもいいですよ」

「あげちゃうのかよ」

不毛なやり取りの中で相変わらず不機嫌そうに銀時が口を開く。

「とにかく俺らが先にこの浜に来てんだ。てめーらはどっか行け」

「ああ？ 警察に喧嘩売るたアいい度胸だな」

「何が警察だ。ただのムサイ集団の塊じゃねーか」

「ふっはっは、残念だったな、雨宮がいるからもうムサイ集団じゃねエさまーみる」

言い争いが取っ組み合いの喧嘩に発展していく。

いつもの黄金パターン。

「あんなチンチクリンなんか女じゃねーよ！！ 残念なのはそっちだブアーカ！！」

志保のこめかみがピクリとうずく。

「オイ銀髪。今アンタなんて言いましたかコノヤロー」

「あ？」

土方の頬を掴んでいた銀時と、銀時の髪を引っ張っていた土方が一同に振り返る。

「誰がチンチクリンじゃアアア！！」

志保が新たに加わり、喧嘩はますますヒートアップした。

「ちよつ、おい冗談だつてば！　もうこの子は冗談が通じないんだからーや、な、ホントに…」

「おいしい、なんで俺まで巻き込まれんだ、ちよつお前…」

「「「うぎゃああああ！！」」」

喧嘩バトルというか、もう一方的な死刑リンチに変化を遂げていたけれど。

「どうしますかねえ」

「そうだねえ」

「副長達もうボコボコだもんね」

「志保さん完全に目がイってますからね」

新八と山崎は遠目に3人の様子を見つめる。

近藤と神楽はスイカのことでもめている。

「俺たちじゃ止めようとしたら逆にあの世行きだもんね」

「それがオチですよ」

「いい案考えついたぜイ」

「「沖田さん／隊長」」

ふたりが振り返ると沖田が悪戯を考えついたような表情でこちらを見ていた。

「いい案ってなんですか？　沖田さん」

「決着をつけることが出来、なおかつ楽しいこと。それは…」

「それは？」

沖田がニヤリと黒く笑う。

「名付けて…『万事屋VS真選組　浜辺を賭けた夏のスポーツ大会！』でさあ」

…今日も大変そうだ。

ふたりの心の声が揃った瞬間だった。

「ぎゃアアアアア！」「」

再び青い空と海に死刑執行中の声が響いた。

第12話 水平線のかなた？（後書き）

水平線って案外簡単に見られるんですよ。

でも、地平線ってなかなか見る機会なんかないんです。

だから、生きてるうちに地平線を1度でも見てみたいですね。

第13話 水平線のかなた？

「で、今度は何を思いついたんですか。隊長」

実は前話からいた定春を撫でながら志保は明らかに嫌そうに言った。

「万事屋VS真選組 浜辺を賭けた夏のスポーツ大会！」の元に集まった万事屋と真選組総勢8人+1匹。

「隊長、あなたってホントに意味の無きことが好きですね。ていうかなんか題名が肝試し…の時と力ぶってますよ」

肝試し、と言った後、かすかに顔色が青くなったのは気のせいではない。

「そんな照れるじゃねーかい」

「いや、褒めてませんから」

「で、なんだよスポーツ大会って。リレーでもすんのか？」

そう言う土方と、志保をはさんで隣りにいる銀時は、顔がはれ上がり紫の青あざがたくさん出来ている。

「副長もどうしたんですかその顔。チャンバラごっこでもしたんですか？」

「コイツ前話でやったことすでに忘れてるよ。ある意味才能だな」

「まあ、リレーっちゃんありレーだねィ」

「「「「「「「「「「「「「「「「」

沖田の説明も妙に回りくどかったので（わざとだと思っが）まとめると

・浜辺を賭けていくつかの夏らしい競技をする。

・？ビーチバレー（2人参加）

・？水泳リレー（全員参加）

以上のふたつの競技でより多く勝った方が滞在中の浜辺の権利を得る。

「…激しくめんどくせェ」

漏らしたのは銀時だ。

暑さに加え面倒くさがが拍車をかけ、その目はいつも以上に死んでいる。

「そんなことなんでかぶき町の女王の私がしなきゃいけないアル！お前らがさっさと出ていけばいい話ネ！！」

「アンタの頭はそんなことしか詰め込まれてないんですか」

「俺もそんなことやってられるか」

「おお、総悟お前相変わらずいいこと思いつくな！」

と乗り気な近藤ともう諦めている新八と山崎以外一斉に反対意見を述べ始める。

そのことを予想してたかのように沖田は表情を変えない。

「じゃあ勝った方にはスイカもつけまさア」

沖田のひと言に

「マジでかアアア！！　フン、しょうがないからやってやるネ」

「スイカ！？　ホントか沖田君！！　よっしゃ銀さんも喜んでエエー！！」

神楽と銀時、KO負け。

「さあ、雨宮も参加してくれるよなア？」

「断じて拒否します」

「ふーん、そんなこと言っているのかイ？　じゃあ万事屋のみんなにお前が幽霊苦手なことバラしちまおうかなア」

「なっ」

真選組幹部にはもう志保の幽霊嫌いは知れ渡っているが、なるべく広まってほしくない。

「みんなアア、実は志保は幽霊が…」
「だあアア、分かりましたよ！　参加します！！」

志保も呆気なく2ラウンド負け。

「ケツ、俺はぜってーやんねエぞ」

「あらら、みんながやる気になってんだからそこに水を差さないのが大人ですぜ、土方さん」

「お前が無理やりやらせんだろ」

あくまでも志保と同じで首を縦に振らない土方。

「ヘエ、土方さんがそんな器の小さい男だとは思いやせんでした」

「何言つてんだ。俺はお前らの日頃の行いに我慢強く耐えてる方だぞ」

「じゃあ今回も我慢してくだせーよ。それとも我慢できやせんか？」

ニヤリと笑う沖田にいけないと思っても挑発されてしまう。

「上等じゃねーか。俺が我慢の達人だつてことを教えてやるよ」

よく分からないやり取りのうちに、土方も参加決定。

いつまでも学習出来ない土方だった。

「お前もいいよな？」

沖田が白い巨大犬を振り返る。

なかなか頭がよく沖田に懷いていないこともない（頭には噛みつくが）。

「ワン！」

かくして浜辺を賭けた侍たちの熱き戦いの火ぶたが切って落とされのだった。

「暑いのは気温だけだな」

銀時の呟きに、4人分のため息が重なった。

第14話 水平線のかなた？

結局沖田案「万事屋VS真選組 浜辺を賭けた夏のスポーツ大会！」を実行することになってしまった一行。

ここで分からない読者のために（この話読者なんているんですか？

by志保）ビーチバレーのルールを軽く説明しよう！

・ビーチバレーは「バレー」とつくようにいわゆるラリーポイント・システム。

・相手コートへスパイクやサーブを決めた場合は自分たちに点が入り、返球ミスまたは反則をした時は相手チームに点が入る。

・2対2で、コート内でのポジションは自由。

「まあ、こんなところですかね」

実は今のルール説明を読みあげていたのはジミー山崎だった。

「山崎さん、ビーチバレーも出来たんですか」

「うん、まあね」

そんなどうでもいい会話をしながら、いつの間にか浜辺の真ん中あたりにセットが用意されていた。

「そっちは誰が出るんですかい？　ちなみにこっちは土方さんと雨宮が出まさら」

「「はア？」」

土方と志保の声が同時に上がる。

この2人よくハモるな。

1度は抗議をしようとした志保だったが、諦めて土方に向き直る。

「あきらめましょう、副長。このサディスティック星の王子様には何を言っても無駄です」

「分かってんじゃないかい」

「そっちがマヨ方君なら俺が出なきゃなア」

「あのクソ女をブツ潰してやるアルヨ！」

万事屋サイドは銀時と神楽が出る模様だ。

「えーと、じゃあ公平に俺と新八君が審判を務めます」

山崎と新八がいるコートネットの部分を挟んで、それぞれの陣地からお互いが睨み合っている。

「やるからには本気出してやるっじゃねェか」

「上等だコラ」

「銀さんが相手でも手加減しませんよ」

「何言ってるアルかガキア、お前なんか銀ちゃんに手も足も出せないに決まってるネ」

最初のサービスは万事屋チームから。

「よし、俺がやってやるよ」

ビーチボールを手にするのは銀時。

「うおりゃあああああ!!」

銀時の手から放たれたボールはネットギリギリ上を通過しものすごいスピードで真選組チームのコートへ落ちる。

銀時のスーパーボールに志保と土方は手も足も出ない。

「ふっはっは、見たか銀さんの華麗なサービス!!」

高笑いする銀時に向かって、山崎がどこから用意したのかホイッスルを鳴らす。

「万事屋チーム、反則で真選組チームに1ポイント」

「なんでだよ!!」

「サービスはコート・エンドラインの後方のフリーゾーンで打つのが決まりです」

「知らねエよそんなこと!! 始まる前に言えや!!」

「こんなの常識ですよ」

「ぎゃははは、カッコつけといて点失ってやがんの!」

最後までわめいていた銀時だったが、ルールはルールなので0-1。

銀時がミスしたためサービス権は真選組チームに移る。

今度のサービスは志保だ。

銀時の二の舞を踏まないようにキッチンとフリーゾーンに移動した。

「じゃあ、いきますね」

銀時のよりかはいくらか緩やかにサービスを打つ。

すかさず銀時が拾い、神楽が「うらあアアアー!!」という掛け声と共にスパイクを放った。

その球は白いラインの外側に大きな音をたてて落ちた。

「へっへーんだ、残念、惜しかったですね」

志保が鼻で笑いながら言うと、またもや山崎のホイッスル。

「万事屋チームに1ポイント」

「なっ……」

「どういうことだ山崎イイイイ!!」

土方が山崎の胸倉を掴みグイグイ絞める。

山崎は白目をむいて今にも気絶しそうだ。

「ちよっ、土方さん山崎さん死にますよコレ!!」

久しぶりにセリフを貰えた新八の制止によりひとまず落ち着く土方。

「ゴホゴホ…ボールがちょっとでもラインに触れていればインボールなんです！」

「そんな細かいルールしらねーんだよオオオ!!」

土方が再びキレて山崎の顔面を飛び蹴りした。

「だから常識ですって!!」

「そんなのが常識なのはお前の頭の中だけだわアアア!!」

志保のグーパンチも決まった。

結局山崎の傷が増えただけで、点数は1―1。

再びサービス権は万事屋に。

神楽がボールを見えない速さで土方に投げつける。

ほぼ真正面に来たボールを土方は受け止めた。

グシャッ

普通ならビーチバレーの試合中にはあり得ない音に当人の土方も志保も首をかしげる。

土方の腕で破裂したものの正体…それはボールではなくスイカだった。

「なんでだよオオオ!?　なんでスイカ投げんだこの小娘は!　スイカに恨みでもあんのか!!」

「なんかマヨネーズの顔見てるとイライラして、ついやってしまったアル」

ケロリと言い放つ神楽。

「ボールをスイカにすり替えるってつい域越えてるだろーが!!」

「まあ、その気持ちは分からないでもないですけどね」

「雨宮テメーはどっちの味方なんだアアア!!」

結局スポーツマンシップにのっとりたはずの試合はただの殴り合いへ。

面白そうに見ていた沖田も参戦し、近藤も山崎も巻き込まれ、ハイバトルロワイヤルの完成!

そんな中、それを傍観していた新八の口からお決まりのひと言が漏れた。

「君らとはやっとなんわ」

第14話 水平線のかなた？（後書き）

今回はいつになくグダグダ感満載ですね。

そういえば今日「コクリコ坂から」を見してきました！

最近のジブリは前に比べて面白くなってきているし息子のだといふのであんまり期待はしていなかったのですが、結構面白かったですよ！

映画館で見る価値アリです♪

第15話 水平線のかなた？

ビーチバレー対決は不毛なやり取りのうちに結果はつかなかったの
で、もうひとつの「水泳リレー」というもので決着をつけることにな
ってしまふ。必然的に。

こちらのルールは、なんやかんやで沖田が独自に考えたものらしい。

・浜辺から各チーム代表がスタートし、海に突き出している岩にタ
ツチして浜辺に戻ってきたら次の人に交代。
・泳ぎの方法は自由。相手チームの妨害も可能。

「オイ、沖田君、ウチの神楽ちゃん泳げねーんだけど」

銀時がさもダルそうに言う。

「え、おたくのチャイナさん泳げないんですか？ ププッ」

「違ーよ。コイツは夜兔族だから日の光が苦手なんだよ」

「夜兔って？」

新八の説明によると、夜兔というのは宇宙最強の戦闘部族で、日の

光を苦手とするらしい。

だからあのボロい傘をさしてたのか。

「っ！か天人だったのか。

「……へエ」

「いや、反応薄いな！」

「いや、もう設定とかめんどくさいんで」

「一応夜兔って神楽の重要な設定なんだけど！ 丸投げしちゃったよこの子！！」

「まあとにかくそっちは2人しか出せないということですね」

山崎が言う。

ちなみに山崎のセリフはこういうところではしか出せない。タルい。

「ちょっと作者アアア！？ そっいう感想とかいららないから、なにタルいって！？」

とにかく万事屋チームは銀時、新八で決定。

「ちょっと隊長。もともとこの対決は隊長が言いだしっぺなんだからアンタが参加しなきゃマズイでしょう」

志保は珍しくもつともなことを言った。

「ま、それもそうさねィ」

沖田も珍しく従い、羽織っていたパーカーを脱いだ。

「よし、じゃあ俺が行くぞ！ この海のシリーズで？ 除いたら1個しかセリフ言っただけーんだから！」

近藤が出番を増やしたいばかりに名乗りを上げた。

「それって山崎より少ないじゃねエか」

ちなみに山崎は？ だけで9個もセリフを言っている。

「なんだとオオオザキのくせに！！」

「審判とルールの説明してましたもんね。たぶん隊長より多いですよ」

「オイオイ、もうめんどくせーからちゃっちゃとやろうや。この俺のセリフまでも空白と改行抜いて文字数832来てんぞ」

「いや、そーいう余計なことはいいいから！」

新八のセリフも前話の「君らとはやつとれんわ」以来である。

「「「しつけーんだよ!」「「「

なんやかんやで先に泳ぐ新八、近藤が定位置についた。

「では行きます! 位置について、よい…スタート!」

再び登場した山崎のホイッスルによって新八と近藤が泳ぎ出した。

「うおおおお!」

なんと、何の取り柄もないと思われていた志村新八16歳が近藤を
一気に突き放し並みならぬスピードで泳いでいる。

ちなみにクロールだ。

「なんだあのメガネ！　アイツに特技なんかあったのか！！」

驚いて土方が叫ぶ。

もうツツコミも反射的になってきているが。

「ハン、みんな知らないだろーがなア新八は泳ぐのが得意だったんだよ！　いやーホントに意外」

「お前も驚いてんじゃないかーか！」

「クソォ！」

近藤は距離を離されすぎて妨害すら出来なくなっている。

「ゴリラざまーみるアル！」

傘をさし浜辺で応援する神楽も嬉しそうに、というか皮肉っぽく叫ぶ。

このまま新八の大量リードで銀時につなぐのかと誰もが思った。

だが次の瞬間――

グワッシャン

派手な音をたてて、新八の顔面はタッチするだけのはずだった岩に強打していた。

新八は額から血を流して水面にぶかぶか浮かぶ。

「なにやってんだ新ハイイイだからお前はダメガネなんだよオオオ
！！」

そうこうする間に近藤はその距離をどんどん詰める。

「行けエエエ局長オオオ！！」

志保も叫んだ。

「何言ってるんだこのクソ女アア！！　ゴリラも顔ぶつけて海に沈むアル！！」

「チャイナ娘は引っこんでいてくださいイイイ！！　局長はバナナがないと顔面なんか強打しません！！」

「いや、それ近藤さんのこと保護してんの？」

やっと新八が意識を取り戻したのはちょうど近藤が岩に手を触れた時だった。

新八も痛む頭を庇いながら懸命に泳ぎ始める。

その速度は近藤といい勝負で、2人は同時に浜についた。

「「「「「行けエエエ！！ 銀さん／銀ちゃん／総悟／隊長！！」
「「「「「」

やっぱりこのメンバーだ。勝負事となると熱くなってしまう。
そっという性なのだ、奴らは。

銀時と沖田はほぼ互角のスピードで泳いでいる。

追い抜いたり、追いつかれたりの繰り返しだ。

「旦那ア！」

「ああ、なんだよ！？」

全力で泳いでいるのでつい大声になってしまふ。

「旦那の泳いでる後を首のない子供がついてきてますぜ！！」

「ぎゃひィィ」

沖田の作戦だと気付いたのは2mほど差をつけられてからだった。

「クソオオ、オイ総一郎君ンンン！！ 銀さんお前の弱点知ってんだからなァー！！」

「総悟でさァ！！ 旦那、俺には弱点なんてありませんぜ！」

沖田は止まりもせずには答える。その言葉に絶対の自信があるからだろう。

「確かにこの間まではそーだったけどお前の弱点は志保だよ！」

「！！！」

銀時の言葉に、一瞬沖田の動きが止まる。

2人はほとんど折り返し地点のところにいる。

だから会話は浜辺にいるみんなには聞こえない。

沖田の動きを止めた銀時の作戦とはどんなものだったのだろうか。

誰もがそう思い、話の当人の志保は自分の名前が会話に出てきていることなど知る由もなかった。

やはりこの2人も岩に触るタイミングは1秒たりとも変わらなかった。

「オイ、沖田君スピードが落ちてるぜ？」

「Sは打たれ弱いんでイ、旦那。そういうアンタこそ顔が青いんですぜ？」

「Sは打たれ弱いんだよ！」

泳ぎながらもギャーギャーわめく2人に、浜辺の一同は皆呆れの表情を浮かべた。

「なんか…もう浜辺の権利とかどうでもよくなってきました」

ポツリと出てきた志保の言葉に、他5人が一斉に頷いた。

第15話 水平線のかなた？（後書き）

本当はこの海シリーズ？までで終わらすつもりだったんですが、やっぱり書くのが私なので案の定伸びてしまいました。すみません。

でも予定では次話で終わらせるつもりなので！ では。

第16話 水平線のかなた？（前書き）

「水平線」シリーズこれにて完結です！

ギャグですが、締めはちょっぴりシリアスでどうぞ

第16話 水平線のかなた？

『確かにこの間まではそーだった！けどお前の弱点は志保だよ！』

沖田はずっと、銀時の言った言葉の意味を考えていた。

沖田提案の「万事屋VS真選組 浜辺を賭けた夏のスポーツ大会！」は決着がつかず、結局双方交ってスイカ割りをしたりスイカの早食い対決をしたりした（スイカばっかじゃないですか by 志保）。

志保が弱点とは、どういうことだろう。

別に沖田は銀時が幽霊を苦手としているように、志保を恐がっていることなどまづない。

ということは、銀時が言う「弱点」とは別の意味なのだ。

万事屋一行は、江戸からいくらか離れているこの海に無一文で来たという。

仕方ないので、真選組が予約しておいた旅館に3人＋1匹も泊ることになった。

もともと女の志保のために部屋を2つとっておいたので、男6人と志保＆神楽＆定春に分かれることになった。

志保も神楽も不満タラタラだったが、結局は上記に落ち着いた。

部屋で夕食を取る時間も、その後の普段ならゆっくりするはずの間も枕投げをしたりしてギヤーギヤー騒いでいた。

沖田も枕投げに参加し土方のわき腹に枕を2度ヒットさせてやったが、その間上の空だった。

そのことに銀時が気付いていたことを、沖田は気付かなかった。

みんな夜遅くまで枕投げをして騒いでいたが、12時を回るとぐっすりと眠りこんだ。

沖田にこんなに考えさせるひと言を放った白髪の侍も例外ではない。出会ったときから、この男は沖田にとって敵わない唯一の人だった。よだれをたらしながら眠りこける姿を見ているとそんなことは微塵も感じないのだけれど。

やっぱり眠れなくて、昼間の海に出かけた。

旅館は海のすぐそばに建っていたので、数分とかからず辿り着いた。だが海には、先客がいた。

「雨宮…」

砂浜に腰掛けた志保が振り返った。

「隊長。眠れないんですか？」

「…お前は？」

「私も、ちょっと」

志保が海の方に向き直り、沖田もその隣りに座る。

太陽が姿を隠した海は、昼間と違って静かで、幻想的だ。

新月なのだろう。月は見えないが、満点の星が漆黒の空で瞬いている。

「お前は、自分の弱点って何か分かるかい？」

そんな世界の中で、自分でも思わなかったことが口から飛び出た。

「弱点、ですか？」

志保が眉を寄せてこっちを見る。

「そうですね…」

沈黙が、訪れる。

「記憶、でしょうか」

しばらくして、志保がポツリと言った。

「記憶…？」

「はい」

沖田は志保の顔を見る。

その表情は、ずいぶん前に志保の入隊歓迎会をして志保が酔っ払った時に見せた表情を思い起こさせた。

夢げで、哀しげで、今にも消えてしまいそうで――。

でも、ちよっぴり晴れやかだった。

「私が記憶喪失ってことは知ってますよね。だから生まれてからそれまでの、嬉しかったこと、悲しかったこと、幸せだったこと、乗り越えたこと――全部、分からないんです」

そうだった。

でも志保がいるのがいつの間にか当たり前になってて、昔から知っているようで、忘れていた。

それを認めるのが、志保に申し訳なかった。

「だから人より人より分からないことが多かったり、何でもないことが強い感情に現れたりして…ちょっと不安なんです。眠れなかったのも、今日のことで胸がいっぱいになっちゃったからかもしれないです」

そう言って、ちょっと笑った。

『確かにこの間まではそーだった…けどお前の弱点は志保だよ！』

確かにそうかもしれない。

だって、沖田は志保の表情や言葉にこんなに胸が苦しくなったり、泣きそうな気持ちになったりしてしまうから――。

「海を見ると、水平線のかなたまで行ってしまいたくなるのは、私だけでしょーか…？」

水平線のかなたか……。

「お前はただ人より感情が豊かで、ただそれが顔に出ないだけでさア」

沖田の言葉を聞いて、志保はさっきより深く微笑んだ。

星だけが、2人を見ていた。

第16話 水平線のかなた？（後書き）

ほんの少し恋愛の兆しが見えてきましたか？

第17話 雨がもたらすものは

夏の雨は、しつとりと全てを包み込む。

午前中は晴れていたのに12時を回ると雲がだんだん空を覆い始めてきた。

どんよりとした雲で空がいつぱいになって、おかしいと思った時には雨が降り出していた。

「クソ」隊長、雨が降るの知って帰りやがった」

ビニール傘を1本残してひとりで帰ってしまったのを、いぶかしんでおくべきだった。

後悔先に立たず。

いまさら文句を言っても仕方がないので雨で濡れた道を急ぐ。

綺麗な着物を着た女の子たちが傘を忘れたのかキヤアキヤア言いながら志保とすれ違う。

立ち止まって振り返る。

目の端でチラリと捉えた少女たちは曲がり角の陰に消えていく。

「……………」

できるなら、自分もあんな風になりたかった。

着物のこととか男の子のこととか、普通のことを悩んでいる普通の町娘になりたかった。

そんなの、いまさら叶うわけないのだけれど。

真選組への道すがらにある大きな橋に通りかかると、真ん中にひとりずぶぬれになりながら佇んでいる人がいた。

紫の布地に大きな柄の蝶が飛んでいる女物の着物を着ている。

ますます雨足が激しくなってきたて周りには誰も見当たらないのに、その人は傘もささないでいた。

本当だったら、よけて通ることもできたはずだった。

けれど、ほっとけなかった。

何故か、自分を見ているようで――。

雨は昔から自分の気持ちに反映するようによく降った。

今もそうだ。

アイツを思い出していたら、降り出してきた。

『晋ちゃん』

その呼び方はやめると何度も言ったのに、それは結局変わることはなかった。

『私…必ず生きて帰ってきます。それまで、少しの間だけ…さよなら』

お前だけは……そばにいてほしかったのに。

結局あのまま…帰ってこなかった。

いつの日のアイツを思い出しても、やっぱりアイツはアイツで、何も変わらなかった。

その時、ふと雨がやんだ。

上を見ると、半透明のビニール傘。

そのまま目線を横にずらすと、真選組の隊服を着た人間が自分に傘を差し出していた。

顔は暗くてよく見えない。

「何のつもりだ。真選組が指名手配犯に情でも芽生えたか」

「傘…あげます」

続いて、そいつの隊服がスカートなことにも気づいた。

「ほオ、お前が最近巷で噂になってる真選組の女隊士か」

もっとゴツい感じの奴かと思っていたが、力を入れたらすぐに折れてしまいそうに細い体だった。

「そんな傘なんかいらねエ。失せろ」

女はずっと黙っている。

「聞こえなかったのか。早く俺の前から消えろ」

低い声音でそう続けると、女はプルプル震えだした。

――泣きだしたら、斬ってやろうか。

そう思い刀に手をかける。

「だからっ…傘やるって言ってんだろーがアアア!!」

「なッ…」

女は泣くどころか差し出していた傘をいきなり振り下ろしてきた。

すんでのところで避ける。

傘は橋にあたりボキッというおとがしてあっけなく折れた。

「なにすんだデメー」

「なにすんだはこっちのセリフですよ」

「……」

「人が親切に傘あげるって言ってんのに何ですか？ 失せる？ どこのシャイボーイですかあなたは」

口調や言葉が、どこかの白髪天パを連想させる。

「こっちはもうずぶ濡れですよ。傘壊れちゃったじゃないですかどう責任取ってくれんですかコノヤロー」

「…傘壊したのはテメーじゃねエか」

「壊すきつかけをつくったのはそっちでしょう」

女にこんなに罵声を浴びせられたのは初めてだ。

いや、初めてじゃねエか。アイツがいた。

「お前、名はなんだ」

ただ、興味本位だった。

自分にここまでつつかかってくる奴が真選組唯一の女隊士なのだから、名前ぐらい知っておいた方がいいだろうという、軽い気持ちから。

「…真選組1番隊副隊長、雨宮志保です」

その時雨が降っているのに、厚く覆われた雲の間から一筋の光が差し込んだ。

それが、目の前の奴の顔を照らした。

「……な」

美しい蒼い目を見た時
な気がした。

時が、止まったよう

急に、目の前の人から殺意が消えた。

さっきまでずぶ濡れで失せるとか言って傘壊して（実質壊したのは志保だが）志保のことを斬り殺したそうな目で見ていたのに、名前を聞かれて名乗ったとたん、おだやかな、哀しそうな右目で志保を見つめた。

なんで、そんな目で私を見る？

なんで、そんな泣きそうな顔をする？

包帯に隠された左目も、こんな表情を出しているのだろうか。

「…お前、本当に志保なのか」

「そうですが」

しかも、自分を知っているような口ぶりだ。

確かめるように言う。

「嘘じゃねエだろうな」

「なんで私があなたに嘘をつかなきゃならないんですか」

「クククッ…そりゃそうだな」

笑った。

本当に、少し前とは別人のようだ。

「俺のこと、覚えてねエのか」

「…知りませんけど」

「そうか」

「知ってるか」じゃなくて「覚えてるか」だった。

志保の知らない過去の中にこの片目の男も登場人物として出てきて

るのだろうか。

そんなことを志保が考えていると、いきなり笑みが引っこみ表情が鋭くなった。

「なんでだ…」

肩をいきなり掴まれた。

「なんでお前が…幕府を人一倍憎んでいるはずのお前が…」

「え…?」

「お前がッ…真選組そうちにいるんだ…!」

掴まれた肩が、ギリギリと痛い。

「ッ…何するんですか」

「どつやらお前は過去のことを覚えてないようだが」

「……」

「なんでッ……お前なんだ……!!」

雨がまた強く降りだした。

目の前の人は顔に雫が伝っていて、泣いているように見えた。

すると、次の瞬間にはその腕の中に抱きしめられていた。

包まれた時のあたかさは誰かに似ていた。

誰かは分からなかったが。でも懐かしさは感じられた。

『晋ちゃん』

『だからその呼び方やめろつつってんだろーがクソガキ』

『誰がクソガキだコノヤロ。先生にいつもひっついてるアンタの
ほうがクソガキじゃい!』

『先生ー、2人がまた喧嘩してますー』

映像が頭に流れた。

肩の力は消えたが、まだ志保は抱きしめられたままだった。

しかしそれを振り払うことは出来なかった。

「…俺と一緒に、来い」

「!?!」

「お前はそっちにいていい人間じゃねエ。銀時と同じになるな」

え、銀さん―――?

その言葉をすぐさま否定できないのは、記憶がないから?

この人が自分の過去にいるのを、否定できないから？

分からない。

分かりたくない！

知らない。

知りたくない。

必死に頭の中で繰り返した。

「……ッ」

震える手で、男を突き飛ばした。

男が目を見開く。

「私は……はっきり言って何のことなのかさっぱり分かりません」

「……」

「あなたが誰なのかも知りませんし」

志保はいったん目を閉じて、また開いてから言う。

「確かに私には記憶がありませんが、あなたの言うことは信じられません」

今は分からない。

でもこの人は私の知らない過去を知っている。

そのことを聞きたいのに、聞けない。

聞いてしまったら、今私の中にある何かを失ってしまいそうだから――。

「…今はその時じゃないのかもしれないねエナ」

「……」

「だが、覚悟しておけ」

男はそれを言い残し、背を向けて去っていった。

志保はそこから、男の姿が消えるまで動けなかった。

そのすぐそばに壊れた傘が転がっている。

雨は、今もまだ激しく志保の体に振り続けている。

第17話 雨がもたらすものは（後書き）

高杉の登場です。

高杉は難しいですねー。

第18話 あの子の胸の内

「ねえ、志保ちゃん」

「……」

「志保ちゃんってば」

「……」

「聞いてる？　ねえ……」

「そんなに耳元で言わなくても聞こえますよジミー」

志保は山崎と一緒に書類整理のため土方に閉じ込められている。

土方の部屋なのは土方曰く「サボりをやめさせるため」で山崎は「見張り役」なのだった。

「それならちゃんと返事すればいいじゃないか！」

「うるさいですね……あ、地味ん党代表取締役の山崎退さん、そろそろ会議のお時間じゃないですか？」

「地味ん党ってなんだよ！　っていつか君また逃げ出そうとしてるね！？」

山崎の声は無視して資料をめくる。

このファイルは過激派の攘夷志士が大勢載っているものだ。

ふと、ページをめくる手が止まる。

山崎の声も、周りの景色も全て遠くなった。

そこには、女物の派手な着物を着た不気味な目の男が写真越しにこっちを見ている。

高杉晋介――。

それがこの前雨の中橋の上で出会った男の名前だった。

『真選組が指名手配犯に情でも芽生えたか』

あの時はその言葉をぼんやりとしか聞いてなかった。

危なそうな人だな、とは思ったが、まさかあんな会話をしてはいけない攘夷志士だとは思いつかなかった。

写真を無意識に見つめながら、志保はおとこのことを思い出す。

「今までどこほつつき歩いてたんだ」

あの後屯所に帰ると、土方と沖田が門で待ち構えていた。

ずぶ濡れの志保を見て、ちょっと驚いたように口を開く。

「なんでイ、そのなりは。俺がやった傘はどこにやったんでさア」

志保は濡れた髪に触りながら答えた。

「すみません、いきなり強風が吹いてきて傘ごと川に落ちたんです」

「そんな強い風吹いてねエよ!!」

「俺ア雨宮が『トイレ行つてきます』って言いながら甘味処に入るのを見ましたぜ」

「オイ貴様―何自分の日常風景を他人になすりつけてんだ―」

「え、土方を殺してくれって？ 仕方ね―な」

「どんな聞き間違いだ!」

こないいつものような会話をしながらも、志保は普通を装うのに必死だった。

ちよつと気を緩めれば足が勝手に動いて逃げ出してしまいそうになる。

私は――弱い。

「すみません、説教なら明日聞くのでお風呂入ってきていいですか。風邪引きそうなんです」

「じゃあ風呂終わったら俺の部屋来い」

「嫌ですよ。夜に部屋に呼んで何するつもりですか」

そう言いながら土方の脇をすり抜けようとする。

だが、腕を掴まれた。

「オイコラ、何勝手に話終わらせようとしてんだ」

あたたかい手が志保の冷え切った体に触れて…

あの男に——高杉に肩を強く掴まれたことが頭によみがえる。

パンツ

「…あ……」

気が付いたら、無意識に土方の手を払いのけていた。

「…お前」

「……」

土方も沖田も目を見開く。

「す、みません。土方さんの手、ネチヨネチヨしてて気持ち悪かったです」

「どういう意味だアアア!!」

「土方さん、まさか昨日の夜部屋でコシヨコシヨしてたのが…」

「何お前はありもしないこと言ってたア!! しかもなんだコシヨコシヨって、嫌な表現すんじゃないよ!」

「別にいまさら隠さなくてもいいですぜ。俺ア全部知ってやすから」

「お前は俺の何を知ってた?」

いつもなら見逃してしまうほどの、ささいなやり取り。

何故か喉の奥がツン、とした。

「…じゃあ私、風呂行ってきますから」

志保はいたたまれなくなつてその場に背を向けた。

「…総悟」

「分かってまさア」

志保が去った後も、沖田と土方はまだその場に残っていた。

アイツ…

「何かあったんだな」

「腕が…震えてやしたね」

ああ、と土方も頷く。

「アイツが傘を無くすなんて初めてですねイ」

志保は、傘を誰より大事にしていた。

綺麗な模様の傘はもちろん、気に入らないはずの神楽の番傘やそこからへんに転がっているビニール傘までも。

確実に、何かあったのにそれを自分達には話してくれない。

本当に…お前はどれだけいろんなことを抱え込んでんデイ。

なんで頼ってくんねエんだ。

なんで何も言わねエんだ。

俺達が、俺が…

「そんなに小っせえ存在か」

「俺はもう食堂に行くぞ」

もう辺りはすっかり暗くなっていた。

そんなに長い時間土方と一緒に志保のことを待ち続けていたんだ。

「ああ、そのまま逝ってくださいエ」

「お前は年中そのパターンだな」

そのまま土方は屯所の中に消えていつてしまった。

沖田は空を見上げる。

黒く染まった広い天井から、透明な雨が次々と零れ落ちてくる。

夜に雨が降ると、志保を見つけた時のことを思い出す。

冷え切った体で屯所の門の前に横たわる志保を。

沖田は志保が倒れていた辺りを見つめた。

「……ふざけた女でイ」

——俺の心を、こんなに掻き乱すなんて。

沖田も門のそばから離れていった。

傘もささずに、屯所の外に向かって。

第18話 あの子の胸の内（後書き）

海のギャグ篇から打って変ってシリアスモードですね。

夏休みはたくさん投稿出来てうれしいです。

第19話 心地よい手

この前の大雨と打って変って、空は青く澄んでいた。

それでも、何故か妙な胸騒ぎがする。

心配するようなことは、何も無いはずなのに――。

銀時は今日も暇そうにジャンプの今週号をソファで読んでいた。

神楽と新八はお妙と一緒に買い物に出ている。

ひとりになるのは、久しぶりのような気がする。

最近は…アイツが現れたから。

（こんなこと考えるなんて…今日はなんか落ち着かねーな）

そんなことをぼんやりとっていると、インターホンが鳴る音が聞こえてきた。

「まったくこちら今は依頼を受ける気はねーのによオ……」

そんなことを呟きながら銀時は玄関へ向かう。

「ハイハイ、万事屋銀ちゃんですけどオ……アレ？」

そこには隊服姿の志保が無言で立っていた。

うつむいているので、前髪が顔にかかり一瞬誰だか分からなかった。

志保は大体万事屋に来る時は隊服姿だ。

あのサド少年に似ておおかた巡回中のサボりだろう。

「オイオイ志保ちゃん、俺を驚かすのも大概にしてくんない？」

「……………」

「で、何か用か？　言っとくが毒舌は受付ねーぞ」

銀時がおどけて言っても志保は口を開かない。

いつもはうんざりするくらい嫌味を言われるのに。

「オイ？ 放置プレーですかコノヤロー」

銀時が不審に思い志保の肩を掴んだ。

「……………」

すると突然、銀時に向かって倒れてきた。

「はア！？」

…え、何この展開。

ど、どうしたんだコイツはアアアア！？
いつもならあり得ない光景なのに。

『銀さんってなんでそんなに頭がクルクルパーなんですか？ あ、
頭つてのは髪の毛はもちろんそうですが脳みそも当てはまりますか
らね』

とか真顔で言ってきたのに！ めっちゃ冷たい目で見られたのに！

俺の心ハート一瞬で粉々にしたのに！！

そんなことを心の中でつぶやいていると、志保の苦しそうな声が聞
こえた。

「…ハアッ……」

「お前…熱あんじゃねエか」

志保のおでこと自分のおでこに手を当てながら銀時は言った。

その間も志保は銀時に寄りかかっている。

銀時は志保の息遣いを聞きながら、10年以上前のある冬の日のことを思い出した。

『オイッ、お前熱あんじゃねーか!! 雪中遊びまくるからだぞ。つたくコレだからガキは…』

『なによ、兄ちゃんだってガキじゃない!』

『うるせーな、とにかく安静にして寝てろ』

『はい…ふふっ、兄ちゃんの手冷たくて気持ちいい、です』

布団の中で鼻を赤くして笑う、まだちっちゃな女の子。

「ったく、しょーがねエな…」

銀時はため息をつきながら志保を持ち上げて居間へ向かった。

年頃の女の子なのに、驚くほど軽かった。

志保の苦しそうな表情を横目に見ながら、そんなことをふと思った。

数日前の大雨の日に出会った——いや、出会ってしまった男が「高杉晋介」だと知ってから、何をしててもすっきりしなくなった。

何も考えたくなくて、土方に無理を言ってひとりの巡回を回してもらった。

土方は何も言わなかった。

かぶき町を巡回している途中で、ダルくてしんどくて、気分が悪くなった。

その時、「万事屋銀ちゃん」の看板を見つけた。

なんとなく、無性に銀時に会いたくなって、気が付いたらインターホンを押していた。

「オイオイ志保ちゃん、俺を驚かすのも大概にしてくんない？」

ちよつとして出てきた銀時になんとか安心感があって、

「で、何か用か？　言つとくが毒舌は受付ねーぞ」

久しぶりに、心が軽くなって嬉しくなった。

口を開いていつもみたいに言い返そうとしたら、頭がぼーっとして意識が遠のいた。

最後に感じたのは、懐かしい銀時の冷たい大きい手だった。

それは雨みたいで…だけどそれが熱で浮いた体に心地よかった。

第19話 心地よい手（後書き）

ご拝読ありがとうございました！

夏真っ盛りです…。

台風がまた来るっばいですね。

私雨とか雷とか台風とか好きなんです！
なんだか楽しくなりませんか？

まあさておき「銀魂 Lonely rainy day」では
もうすぐ秋に季節が変わります。

夏休み中には秋半ばくらいまで話を進めたいです♪

第20話 温もり（前書き）

第20話 温もり

ふとおでこに冷たい感触がきて、志保はゆっくりと目を開けた。

ぼんやりとした茶色い天井が映っている。

「お、目が覚めたか」

そう声が聞こえた方向を見上げると、銀時がこっちをいつもの半眼で見下ろしていた。

起き上がろうとすると、

「まだ熱あんだから寝てろ」

と、止められた。

「私…熱あつたんですか」

「お前なー、自分の体調ぐらい自分で管理しろよな。具合が悪いことにも気付かないなんてとんだ大バカヤローだよ、お前は」

散々な言われようだが、心配してくれるのが伝わってきて、何も言

わなかった。

「……この布団、銀さんのですか」

「そーだよ」

「だから匂いがオヤジ臭いんですね」

「お前熱はあっても口は冷めてんのな。万年冷徹なのな」

「……でも、懐かしい匂いですね」

——最近、銀時に関わるたびに「懐かしい」が増えていく。

「……ふーん」

銀時は目を見開いたが、その後そっぽを向いて興味なさそうに呟いた。

「……………」

「……………」

しばらくの沈黙の後、銀時が口を開く。

「で、何かあったのか？」

「…へ？」

いきなり話を振られたので、変な声が出た。

銀時を見ると何食わぬ顔でジャンプを読んでいる。

「…なんでそんなこと言うんですか」

「お前ってさ、隠し事へタクソだよな」

そうなのだろうか。

沖田には「感情が顔に出にくい」のようなことを言われたが、この人にはそれが分かってしまうのだろうか。

「私、そんなに分かりやすいですか？」

「んー、そんなに分かりやすいってほどでもねーけど…」

銀時がジャンプからちよこつと目を上げる。

「俺には分かるんだよ、なんとなく」

「……………」

銀時がこつちを見てニツと笑った。

「あ、でも沖田君とか土方君も意外とお前のこと分かってるかもしれないよ?」

「隊長と、副長?」

確かに副長はあの瞳孔開きまくりの目で何でも見れそうだし…隊長もああ見えて洞察力とかあるかも。

「ま、確かに鬼の副長さんはそーだろうけど、沖田君はそーいう意味で言ったんじゃないよ」

またもや感情を読まれた。

「じゃ、どついう意味ですか?」

眉根を寄せて銀時を見ると、呆れたようにふうっとため息をついた。

「お前なー、沖田君がかわいそーだよ」

「？」

志保の頭にはてなマークがたくさん浮かんだが、唐突に銀時は真顔に戻る。

「何か…あつたんだろ？」

「……」

志保は起き上がっていた力を抜いて布団に倒れこむ。

「この人生のエキスパート銀さんに何でも話してごらんなさい！」

「なんでそんな口調が上品なおばあさん風なんですか。エキスパートどころか人生の最下位じゃないですか」

「志保ちゃん、素直になりなさい」

「しつこいですから」

布団の中で銀時に背を向ける。

「まあまあ、ホラ言ってみ胸の内をババーンと」

そう言っ腕を広げる銀時はなんだか大きかった。

「銀さんって、何にも考えてなさそうですね」

「アレ？ 今スルーした？」

「でも、本当はいちばんみんなのこと考えてますよね」

「……………」

静かな部屋で銀時は頭をガシガシ掻いた。

「別に俺アそんな大層なことばっか考えてるわけじゃねエよ」

「…周りの人のことばっか考えてるから、話聞いたりしてるから、銀さんのことって意外と誰も知りませんよね」

「聞かれてもいねエのに話さねエよ」

「じゃあ、聞いたら教えてくれますか？」

銀時の紅い目が見開かれる。

「私が聞いたら…銀さんの子どもの頃のこととか、桂との関係や、あの攘夷志士の高杉晋介のこととか——教えてくれますか？」

何も考えられない頭の中で、ひとつだけ分かったことがあった。

あの時、高杉に抱きしめられた時のあたたかさ
あれは、銀時と同じだった。

銀時の手や、目や、言葉の温もりと、同じだった。

「志保…」

たぶん、私の過去に高杉晋介はいる。

そして、高杉と銀さんはお互い顔を知っているはずだ。

だから、きっと――銀さんの過去にも、私がいる。

「まあ、無理にとは言いませんけど」

「はア？」

でも、それを誰からかの口から聞いてはいけないのだと思う。

自分で、思いださなきゃならないのだと思う。

銀時が呆けている間に志保は布団から出て、上着をはおった。

「もう、帰るのか？」

「まだいて欲しいんですか？」

「いや、どうぞお帰り下さい」

「どういつ意味だコノヤロー」

志保はそばに置いてあつた自分の刀を腰につけ、振り返らないで言った。

「今日はありがとうございました。認めたくないですけど銀さんのおかげで少しは楽になりました」

「何そのちょっと上から目線…ま、それなら良かったんじゃないの？」

「また何かあつたら、よろしくお願いします。銀さんも——」

「あ？」

「いえ、何でもないです」

銀さんも——辛いことがあつたら、私に話して下さい。

その言葉は、のみ込んだ。

その言葉を自分が言うのは、なんだか違うような気がしたから。

「おう、気をつけてな」

銀時の大きい手が志保の頭を撫でた。

他の人にやられるとガキ扱いされてるようで嫌なのに、銀時のだけは悪い気分じゃない。

志保は銀時の温もりを感じながら、黙って万事屋を出た。

いつかのような、優しいオレンジ色の空が広がっていた。

第21話 仲間なんだから（前書き）

最近ちょっと短めですね。

…頑張ります！

第21話 仲間なんだから

万事屋を出てしばらく歩くと、おさまっていた頭痛やダルさがまた
ぶり返してきた。

「やっぱりちょっと寝ただけで治るってのは甘かったか…」

志保は少しため息をついた。

今攘夷浪士に襲われたらヤバイ、かも。

「オイ」

こんな私ってバカだったっけ？ 銀さんのことバカに出来ねーよ。

「聞いてんのか？」

いや、まだ私はマシな方か。

あの頭笑いの要素100パーだからな。

あ、今気付いたけど100パーの「パー」とクルクルパーの「パー」
ってマツチしてない（笑）？

「テメー俺を無視するとはいい度胸だなア」

「や、やだなア隊長。ほんの軽いジョークじゃないですか」

沖田に首に刀を突き付けられた志保は青くなって言った。

「お前さっきからブツブツひとりで呟いて不気味だったぜイ？」

「何言ってるんですか。読者様に私の考えたすばらしいネタを披露してたんですよ」

「全然面白くねーですぜ」

沖田はため息をついて刀をしまった。

「で、隊長何してるんですか？」

「巡回でイ」

「確か隊長、夜の担当でしたよね今日は」

「団子食べに来たんでさア」

「今前の件丸々なかったことにしようとしませんでしたか？ それにこっちの方には甘味処ないですけど」

「……………」

沖田はそれには答えずに黙って志保に背を向けてしゃがんだ。

「私にケツ向けて何ですか？ 大便ならそっちの茂みでやってください」

「誰がテメーの目の前ですかイ」

じゃあ何？ と首をかしげると沖田は小さく「乗れ」と言った。

ちょっと頬が赤く染まっている。

「なんで隊長の背中に私が乗らないといけないんですか。その背中に温もりが欲しいんですか」

温もりが欲しいのは私の方かもしれないけど。

「お前調子乗ると土方並みにうぜーな」

沖田はめんどくせエ、と呟くと志保の腕を引っ張った。

「わっ」

気が付くと志保は沖田の背中におぶわれていた。

なおも志保は降りようとしたがクラツとして結局沖田の肩に頭を乗せた。

「ホラ見ろ、言わんこっちゃねエ」

「私が具合悪いって知ってたんですか」

「お前、朝からフラフラしてただろイ」

お見通しってわけか。

「…ちょっとは旦那のところに行ってすっきりしたのかイ」

なんで頭がぐちゃぐちゃだったことも銀さんのところに行ったこともわれてんだ。

「まあ、はい」

ちゃんと答えたのに、沖田は少し不機嫌そうだった。

まるで拗ねた子供のようだ。

「お前がいつも頼るのは旦那だ」

「……………」

「俺達にも…俺にも、ちったア頼れよ。——仲間なんだから」

『沖田君とか土方君も意外とお前のこと分かってるかもしれないよ？』

『沖田君はそーいう意味で言ったんじゃないよ』

「……………」

自分の頬も赤くなっていたのは、夕陽のせいだろう。

屯所の志保の部屋に着くと、沖田は足で襖を開け放った。

沖田の肩越しに部屋の中を見ると、そこには清潔そうな布団が敷いてあった。

「あれ？ 誰がいつの間に…」

「たぶん土方の野郎でさア。アイツは素直じゃねーから」

苦々しそつに言う沖田。

素直じゃないのはあなたも同じだと思いますけど――。

そう言うのはやめておいた。

だって何より沖田はサディスティック星の王子様で、ここまで志保をおぶってきてくれたのだし、それに志保も自分が少なからず素直な性格じゃないと分かっていたからだ。

布団に入ると、ひんやりしていて気持ち良かった。

「ま、晩飯の時間になったら土方のクソヤローが起こしに来ると思

うんで、それまでゆっくり寝てなせイ」

「寝込み襲わないでくださいね」

「被害妄想も大概にしろイ」

まぶたを閉じようと思ったら、沖田がまだ部屋の入口に立っていた。

「…何ですか？」

沖田は何か言いたそうな目でこちらを見続けていたけれど、「いや、なんでもねエ」と言って今度こそ出て行ってしまった。

よく分からなかったが、今はとにかく眠りたい。

あの人がよく分からない性格なのはもともとだし。

第22話 記憶への架け橋

「お腹すいた〜」

そう呟きながら夜のかぶき町を歩くのはおなじみ志保だ。

沖田におぶわれて帰った日ぐっすり寝たおかげですっかり回復した。

銀時のおかげもあるだろう。

「お礼とかしとかないと何言われるか分かったもんじゃないな…」

グワッシャン

突然ガラスが割れるような音がし、その方向を振り向くと、背の高い男が自分の方に向かって投げだされてきている。

「へぶしっ!」

その男は志保に激突した。

よく見ると、「スナックすまいる」という店のドアが割れていた。

そこにショートカットの女の人が仁王立ちしていた。

「二度と来るなよ」

「そんな、おりょうちゃん」

———
「なんだか局長と妙さんみたいだな。」

そんな風にのんきに考えていると、ショートカットの女性の後ろから見覚えのある人が出てきた。

「……………妙さん？」

以前知り合った新八の姉、お妙はスナックで働いているのだという。始めて入ったスナックはきらびやかで自分の普段いる世界とはかけ離れているように感じた。

「アレ、妙さん何歳でしたっけ？」

「18よ」

「え、私と（たぶん）同じ年じゃないですか！」

沖田や自分がお妙と同年だなんて信じられない。

「大人っぽいですねー」

「うふふ、ありがとう」

「そういえば、今日局長は来ていないようですね」

「ああ、あのゴリラなら昨日かなりボコボコにしたから今日明日はもう来れないと思うわよ」

「……………（やっぱりこの人は敵に回しちゃダメだ）」

「ちょっと、おんしゃ」

「スナックすまいる」を出ると、さっきの男に呼び止められた。

「あ、さっきはどうも」

男は銀時とはまた違った風の茶色いもじやもじや頭に、サングラスをかけていた。

しかしその下の顔は人懐っこそうな笑顔だった。

「アッハッハ、さっきは悪かったのう…なんだか知らんうちにおんしにぶつかっただようじゃ…ん？」

べらべらしゃべっていた男の口が止まる。

「志保…志保じゃなかか！」

「え？」

どうやらこの笑顔の男も、自分を知っているらしい。

だが、桂や高杉が自分を信じられないというような目で見たのに対し、この男はなんだか普通に昔馴染みとの再会を喜んでいるような感じがした。

ちよつとホツとした志保だったが、次にこの男から飛び出た言葉によつて志保の希望は打ち砕かれた。

「え？」

「生きちよつたのか！ てつきりあの時死んだと思っていたぜよ」

死んだ――？

「いやいやいや、ちょっと待て。私記憶喪失にはなりましたけど死んではいませんよ。たぶん」

「記憶喪失？　じゃあわしのことも覚えてないかのう？」

「はい。そんな奇怪な頭はあの白髪天然パーマしか知りませんよ」

「おお、金時は知っちよるか！」

「金時い？」

銀さんのことか？

なんだこの人は。バカな感じなのか？

「おお、わしのこと覚えてないんだったら改めて自己紹介じゃき」

男はサングラスを取って志保に向き直る。

「わしゃ坂本辰馬。「快援隊」つちゅー会社を^{カンパニー}経営しちよる。船で宇宙飛び回っているんな星で商売してるんじゃ」

なんだかスケールの大きい話だ。

宇宙とか星とか——夜空の向こうの話だと思っていた。

「へえ、坂本さんって見かけによらずすごいんですね」

「アッハッハ」志保もその感じ相変わらずじゃのう。戦争に出てたあの頃と何も変わらんぜよ！」

本日2回目の衝撃だった。

「は？ 私が、戦争——？」

坂本は志保の格好を見てハッとしたようだった。

初めてそんな表情を見せた。

「そうかおんし……警察に今いるんじゃないのう。悪いことを言ってしまったぜよ。」

「……………」

「おんしゃ昔から苦労ばつかじゃのう。運命は…残酷じゃき」

「わしゃそろそろ船の時間があるから行かんと」

「…そうですか」

「本当なら…一緒にわしの船に来んか、と誘いたいところじゃ。でも、逃げてはいかんじゃろうから」

坂本は最後にも、やっぱり笑った。

ちよっと、切なそうな笑顔だったけれど。

「銀時も…ツラも高杉も、みんな何かと戦ってる。おんしも大丈夫じゃ、頑張れ」

今日出会った不思議な男も、きっとどこかで戦っているのだろう。

志保は坂本の言葉を思い出す。

坂本には、悪気はなかったのだろう。

坂本に今日会って、また自分を知っている人間に出会えて、戸惑いもあつたけれど嬉しかった。

でも、手放しでは喜べない。

『てつきりあの時死んだと思っていたぜよ』

『戦争に出てたあの頃と何も変わらんぜよ！』

このふたつを結びつけると、答えはひとつしかない。

でもこの時志保には、まっすぐにそれを見ることが出来なかった。

第22話 記憶への架け橋（後書き）

辰馬さん、重要なことベラベラしゃべっちゃってますね。

結構好きなキャラですが登場させるのが難しい…。

第23話 朝を待つ

『えー、現在台風11号は京に到達し、明日の午前3時頃には江戸に到達する模様です。以上、現場の結野がお伝えしました』

暗い部屋にぽつんとひとつだけ置かれた赤いラジオから、雑音混じりにアナウンサーの声が聞こえる。

8月ももうすぐおしまいだ。

夏の影の風物詩、台風が江戸にやってくる。

今はもう夜中の12時過ぎだ。

いろんな種類の警報が出され、雨や雷が激しく続いている。

停電によって部屋を照らすものはロウソクの灯りしかない。

隊士たちが集まる部屋の中心あたりに膝小僧を抱えた志保がうつくまっている。

「台風なんてこない……うつ…ピギアッ!」

雷がゴロゴロ鳴って志保は顔を膝にうずめた。

「なんでイ…雨宮、お前雷も苦手なのかイ。土方さん並みにヘタレじゃねーですかイ」

「俺はヘタレじゃねエ」

「黙っといってください……ふぎゃん!」

「ふぎゃんって何だ、ふぎゃんって」

ますます雷の音が大きくなり、障子の隙間から白い光が漏れる。

「ガハハ、志保ちゃんも可愛いなあ! まあでも台風が来るのは3時くらいだし、みんな寝てる頃だろう」

「明日も台風が来るからって仕事はなくなったりしねエぞ! さっさと寝ろ」

土方の声により皆各々の部屋へ戻っていく。

土方と近藤も去り、沖田と志保だけが残った。

「別に落ちてくるってわけじゃねーんだから」

「ダメなものはダメなんです…」

沖田はため息をついた。

「俺ももう寝ますア。お前もここでひとりでいるよりは部屋に戻った方がいいと思うけど」

沖田はラジオとロウソクの灯を消してあくびをしながら部屋を出た。

「うつ…」

どうせ戻ってもひとりだがここで朝を迎えるのも嫌なので、志保は恐る恐る自分の部屋へ向かった。

部屋もやはり暗かった。

口ウソクに灯をつけ、布団の上に座る。

障子をそつと開けると、ザアツという音が部屋に入り込んできて、激しい雨の感覚が伝わってくる。

志保はふう、とため息をついた。

最近、何かと自分の生い立ちについて考えなければならなくなる出来事が多い。

幕府から最も嫌われている攘夷志士の高杉晋介に出会ったり。

宇宙を旅している坂本辰馬から「自分の過去」についてのことを垣間見せられたり。

自分の中で、何かが思いだせそうな気がする。

たぶん…記憶を取り戻す日はそう遠くないのかもしれない。

そしたら、私は――。

「やっぱり寝れねーのかイ」

襖が開いて、パタンと閉まる音がした。

「隊長…」

沖田は志保に背中合わせになるような形で座った。

なんだか、みんなで行った海のことを思い出す。

あの時も夜の海で眠れなくて、2人で星空の下にずっといた。

『お前は、自分の弱点って何か分かるかイ？』

自分の、弱いところ――。

私の弱いところなんて、脆いところなんて、たくさんある。

『記憶、でしょうか』

志保にとっていちばん分らないことは、自分のことだ。

雨が降った日――よく見る夢がある。

雨空の下に、志保はひとりきりで、ずぶ濡れで立っていて。

傘がない。

雨をふさぐものが、ない。

ずっと、雨は止まないのだ。

ずっと、ずっと……永遠に。

目が覚めると、いつも雨にぬれたように汗をびっしょりとかいてい
る。

「隊長……」

「ん、なんでイ？」

「いえ、なんでもないです」

——私が、攘夷戦争に参加していたら……それでも私のこと
を、仲間だといってくれますか？

それを言ってしまったら、私はここにいらなくなってしまうだろ
う。

『俺達にも…俺にも、ちったア頼れよ。――仲間な
んだから』

そう言ってくれたのに…。

今の関係が崩れるのが恐くて、志保は前に進めないでいる。

「お前…雨が恐いかイ？」

「なん…で？」

「なんで分かるのかって？ 見てれば分かりまさア。雨の日はあんまりしゃべらなかつたり、次の日辛そうだつたり、異様に傘を大事にしたり」

「……………」

すべて、その通りだった。

「お前にとって…今は曇っていても、雨が降っていても、いつかきつと太陽が出る時が来る」

そうなの——だろうか。

「誰かが、お前の太陽になる」

太陽——。

志保には、少しその言葉と沖田が眩しかった。

合わせた沖田の背中から、かすかな温もりが伝わってきて心がほんのりあたたまる。

——俺が、お前の太陽になるから。

その言葉は沖田の口の中で消えてしまって、志保には届かなかったけれど。

沖田は黙って夜が明けるまでそばにいてくれた。

夏が、静かに過ぎてゆく――。

第23話 朝を待つ（後書き）

台風「11」号っていう数字は適當です。

台風が来るのがものすごく楽しみなのは私だけでしょうか？

第24話 秋の空は何よりも穏やかで

季節は、秋を迎えた。

澄みきった青空に、ところどころブラシで掃いたようなちぎれ雲が浮かんでいる。

絶好のお出かけ日和だ。

過ごしやすい秋の風が、志保の右の耳の横で結ばれた髪の毛を巻き上げる。

「いい天気だなー」

真選組はかぶき町から少し離れたところにある街の大きな公園に来ていた。

9月半ばに開催される「紅葉の秋祭り」の警備に真選組総出で駆り出されているのだった。

小さな遊園地のような施設がある公園で、年に一度の秋祭りということ人で混雑している。

焼きイモの屋台なども出ていて、外気に当たっていると少し肌寒いくらいだ。

「1番隊は中央の広場。2番隊から下はそれぞれ周りを固める！」
土方の指示によって隊士たちがチリチリになっていく。

中央の広場にはメリーゴーランドと屋敷のような立派な3階建ての休憩所があった。

「雨宮ー、俺ア屋台の方の警備をしてきまさア。なんで指揮とおいてくだせい」

「思いつきりサボリに向かおうとしてんじゃないですか！」
捕まえようとするが、案の定スルリと人混みの中に消えていつてしまった。

「————ったく！」

志保は隊士にその場を任せ広場の周辺を回り始めた。

普段のこういふ様子を見ると、戦っている時の沖田とは別人のように見える。

志保はたびたび沖田と刀を交わえる機会があつたが、勝てることは3回に1回ほどしかない。

（でも、叶わないんだよな…）

そう。

沖田には、叶わないのだ。

いつも、なんやかんやで志保のことを助けてくれる。

雨の夜――寂しい夜には、朝まで隣りにずっといてくれたこともあった。

「いつか弱みを見つけないと…」

「誰のだ？」

「沖田隊長ですよ。でもあの人に弱みなんて…ん？」

私誰と話してるんだ？

恐る恐る振り返る。

「ぎ…銀さん」

「よオ。また会ったな」

そこには銀時、新八、定春に乗った神楽の万事屋メンバーがこちらに歩いてきていた。

「あれ、志保さんも祭りにきたんですか？」

「またお前アルか！」

3人+1匹の姿はかすんだ空と紅い紅葉の秋の風景に馴染んでいる。

「私は仕事で来てるんです。無職同然のあなた達と一緒にしないでください」

「真選組が働いてるのも珍しいですね」

「まあ、俺達からふんだくった税金の分しっかり働いてくれよ」

志保を無表情で見つめる目の中に優しさを見つけて、志保はフンと顔をそむけた。

「フン、あなたに言われなくてもそうしますから」

神楽が「何様のつもりアル！」と飛びかかってきたのをひょいと避けた。

神楽の攻撃を受け止めていると、後ろに気配を感じた。

回し蹴りをして一瞬神楽の動きを止めると、そのまま気配の方へ振り返った。

怪しい奴だったらすぐさま対応できるようにと身構えていたが、そこにいたのは先ほど勤務から逃げた沖田だった。

「隊長……」

「お見事」

志保は足を降ろした。

先ほど銀時の前で沖田の弱点がどうとか言ってしまったので、チラッと銀時の方を見る。

「あれ、旦那方もいたんですかい」

「おー」

「この間はウチのもんがお世話になりやした」

かすかに「ウチのもん」を強調しているようにも聞こえた。

「別に、どーってことねーよ」

銀時はニヤニヤして沖田と志保を交互に見た。

「？」

「沖田君、頑張れよ」

「は？ 何をですかイ」

志保は何の事だかさっぱり分からなかった。

沖田もよく分かってないようだった。

「で、隊長。なんで戻ってきたんですか？」

こういう言い方は少しアレだが、沖田は大体サボリに行ってしまうとその日の仕事が終わるまで帰ってこない。

こういつぶつにすぐに戻ってくることはごくまれなのだ。

「ああ、なんだか不審な輩が多数目撃されてるらしい。一応気をつけるようにと土方さんからのお達しでさア」

「不審な輩……」

「俺達は誰も見てないんだが、みんな刀を帯刀していて…あと何故かクラリネットを持ち歩いているらしい」

真面目に沖田の話を聞いていたのだが、クラリネットのところはずっこけた。

「はあ？　なんでクラリネット？」

「知るか。俺に聞くんじゃないー」

「まあでも、分かりやすい目印にはなるかも……」

ドガアアアアン

「「「！！」」」

広場の方から、爆発音が聞こえた。

志保と沖田はとっさに走り出す。

まだその場にいた万事屋もついてきた。

広場から逃げ惑う人々を掻き分け騒ぎの中心部に辿り着くと、すでに多くの隊士たちがその場にいた。

「隊長、副隊長！」

「何があつた！？」

「それが……」

『フハハハハ！』

隊士のひとりが説明しようとした声をスピーカーで拡大された声が遮る。

その声は休憩所となっている屋敷の3階部分から聞こえてきた。ベランダのようなところに覆面をかぶった男が数人立っている。

『我々はすでにこの公園を包囲した！　ここにいる全員が人質だ。人質の命が惜しければ要求を聞いてもらおうか！』

数人の隊士が避難させようと動き出すが、その次の言葉によって動きを止められてしまう。

『おっと、ちなみにこの公園の数ヶ所に爆弾を仕掛けてある』

「爆弾！？」

『ひとつひとつが公園を吹き飛ばすほどの威力だぞ』

「……………」

「何が目的でイ」

沖田が冷静に聞くと、リーダーらしき男がニヤリと笑った。

『今捕まっている我らの仲間の解放と…真選組局長近藤勲の命だ！』

「「「！」「」」

第24話 秋の空は何よりも穏やかで（後書き）

なんだかシリアスモードは続いているのに戦闘シーンはたぶん土方との試合から書いていないと思うので…。

でもこういう緊迫した場面は苦手なんですよね。

第25話 折れない魂

「何が目的でイ」

『今捕まっている我らの仲間の解放と…真選組局長近藤勲の命だ！』

「なっ……」

「ふざけるなア!!」

隊士たちが一斉に叫び出す。

覆面男たちは顔色一つ変えず志保達を見下ろしている。

『我らは蔵利熱湯。クフリネット 腐った世の中に天誅を下さん!』

その言葉に触発されて、さらに隊士たちは怒りを爆発させる。

「みなさん、落ち着いてください! あなたたちがそんな風に騒ぎ立てると相手の思うつぼです」

志保の声にハッとしていったんは鎮まる隊士達。

志保は覆面男たちに向き直った。

「あなたたちの要件は容易に判断できるものではないので、これから上に掛け合う。しばしの時間を!」

志保が叫ぶと、背後で人が駆けてくる気配がした。

「何事だ！」

「副長！」

ツンと――――煙草の匂いに鼻がついた。

『クク… 鬼の副長さんのお出ましか』

沖田が簡単に事情を説明する。

「とつつあんにはもう俺が連絡つけときやした」

「そういうことか… 近藤さんにはまだ言っていないだろうな」

「ええ。それは土方さんの役目だと思いやして」

目を見開いた後、土方がチツと舌打ちをした。

そして携帯電話を取り出し、番号を押す。

誰かに電話をかけるようだ。

「あー、近藤さん。俺だ」

いつものんきな近藤の声が電話越しに聞こえてきた。

『オートシか！ どうだ、秋祭りは』

「なんも異常ねエよ。そっちは何してんだ今？」

——副長、アンタまさか。

『え？ お、俺はお妙さんの護身中で……』

「……そーか。まあ今日くらいは目をつぶってやるよ。今日めいっぱいやって明日から勤務に励むこった」

『え？ トシなんかあつ——……』

土方は通話を切ってしまった。

「土方さん……」

「オイ、お前ら！」

土方は真上にいる覆面男たちに向かって声を張り上げた。

「仲間釈放の件はまだ話し合い中だ。もう少し待ってほしい。だが局長の首の件——俺に変えてほしい」

「「「！」「」」」

その時、この場にいる全員が分かってしまった。

近藤にテレビを見るなど言った理由。

たぶんかなり大きな事件だから、当然テレビでも報道されているはずだ。

だがお妙のところに行っている近藤なら早く帰らないかぎり見ることはないだろう。

『フン、自分の命より大将の命が大事だと？ 大層立派なお考えだ

な
』

「てめーらも侍なら分かるだろう。己の信念を曲げて助かってても、魂が折れちまうことに」

自分の命に変えても――近藤を、自分たちの大将を
護る。

それが、この男の信念、魂なのだろう。

それは、ここにいる全ての隊士たちが――仲間
が、思っていることだ。

『良からう。貴様も頭の切れる男だからな。損することはあるまい』

「…銀さん。覚えてますか？ 鬼道丸さんの時のこと」

「あの言葉、銀ちゃんの言葉ネ」

「…ああ」

「え？ 何ですかソレ」

聞き捨てならない会話に志保は振り返って聞いた。

「そうか、志保さんは知らないんですよ。前にお上が絡んだ事件があつたんです。それで銀さんは自分の利益にならないのに行こうとしたんです。それを土方さんに指摘されたら…」

「ま、土方さんは旦那に教えてもらったなんて絶対認めないでしょうが」

沖田も屋敷から目を離さずに言う。

「土方さんは意外と、旦那のこと信頼してるんですかねィ」

『魂が、折れちまうんだよ』

「…副長と銀さんって、仲悪かったですよね」

「税金泥棒の奴らはどいつも嫌いアルネ」

「どーもアイツとはウマが合わねエからな」

「でも、なんか似てますよね」

銀時も新八も神楽も、志保を見る。

「どっちもクルクルパーだったり瞳孔ガン開きだったり気分悪いですけど…中身は一緒です」

「志保さん…」

志保は刀を抜いた。

「どつちも……バカですよ」

「お前も充分バカだと思うけどね」

「そーいう隊長ですよ」

同じく刀を手にした沖田と隣りに並ぶ。

『フハハハハ！　こんな大勢の人質がいる中で暴れようというのか。貴様らは警察ではないのか！』

「そこなんだよなア」

「オイお前ら、勝手な真似はやめろ。アイツらの狙いは俺の首と仲間間の釈放だけだ」

「それは分かっています。でも……」

土方の顔を見ずに志保は呟いた。

「私たちは、まだあなたを失うわけにはいかないんです」

「ま、いつか俺が殺してやりやすけどね」

「お前ら…」

土方がもともと開いた目をさらに見開く。

「勘違いしないでください。真選組のためだけですから」

「土方さんは上に連絡しといてくださいエ。釈放の件は了解しなくていいって」

志保と沖田が戦闘の態勢をとった、その時。

「ちょーっと待ったアアア!!」
「ご用改めである!!」

第25話 折れない魂（後書き）

ちよつと原作風味ですね。

銀さんの「魂が、折れちまうんだよ」「っていう台詞、ものすごく好きです！

第26話 受け止めてくれる仲間（前書き）

ヤバイ…！

今回いつもの倍くらいある！

忍耐力のある方だけお読みください。

第26話 受け止めてくれる仲間

「ちょーっと待ったアアアア!! 〴〵用改めである!!」

その声は、その姿は、この場にいちばんあってはならないものなのに、ひどく安心するものだった。

「「「「局長オオオ!!」」」」

誰もが今日思っていた人物——真選組局長、近藤勲が
たくさん隊士たちを従え、広場の入口に立っていた。

市中の見回り担当だった原田もいる。

そして、その後ろから出てきたのは——。

「万事屋！」

「銀さん！」

やり遂げたような顔をするふたりの子供と、相変わらずダルそうな
表情の銀髪だった。

「な…どうやって外に出れたんですか？」

「いなくなってたのにも気づきませんでしたぜ」

「おーよ、実はなートイレに行きたくなっちまって探してたらさ、見つけたんだけどそのトイレ、2つ出口があって外に出れたのよ」

「強行突破しようとしたら丁度近藤さん達と会ったんです」

「入口にいた奴らはみんな倒したアル!!」

「いつ行動したんだ？」

「んー、『どっちも……バカですよ』って志保が言った直後」

土方の言葉に銀時が冷静に返す。

「そこは聞いてたんですか」

グダグダな会話をそれまで大人しく聞いていた近藤が叫び出す。

「トシ、総悟、志保!! 俺にこんな一大事を黙ってるなんて水臭エじゃねーか!!」

「何バカなこと言ってるんですか。たった今あなたの命が狙われてるんですよ」

「まあ、来ちまったら仕方ねエ。土方さん…指揮をお願いしまさア」

土方は、刀を握る手にぎゅっと力を込め、周りを囲む隊士たちに鋭

く言い放った。

「1番隊、2番隊は浪士たちの対応に当たれ！ 3番隊から10番隊は人々の避難に尽くせ！！」

土方の掛け声にみんな一気に動き出す。

志保と沖田は攘夷浪士逮捕を担った1番隊、2番隊の先頭に立った。

周りを見張っていた奴らを、次々と斬っていく。

逃げ出そうとした奴も、立ち向かってきた奴も、みな同じ運命を辿った。

命の終わりを迎えるかもしれないと怯えていた人々も、隊士たちに誘導されて無事に公園の外に避難した。

「土方さん、全員斬りましたぜ——屋敷にいる男たち以外は」

「そうか。人質の避難も完了した」

てんやわんやの中でどうにか切り抜けたようだ。

「キヤアアア！！」

女性の悲鳴が聞こえた。

広場の隅に集まっていた土方と沖田、志保は聞こえた方向に振りかえる。

そこにはまだ若い女性が真っ青な顔で地面にへたり込んでいた。

「どうしたんだ！」

土方が駆け寄ると、女性は震える手である一点を指さした。

「私の……息子が……！」

「お母さんー!!」

ベランダに立つ覆面男たちの間に――まだ幼い黄土色の綺麗な髪の子が、捕えられていた。

『さすが真選組、外から侵入し我らの仲間を全て捕え人質を逃がすとは…。しかし、貴様らはその代償にこの少年の命を払うのだ!』

そう言うと言葉の中に男の子を引きずり消えた。

最後まで男の子の母親を求める声が聞こえ続けた。

「クソッ…1番隊は俺が合図したら突入しろ! それ以外の隊は動くな!」

「いや、トシ…待て！」

近藤がすぐにでも入口に向かおうとする沖田達を止めた。

「屋敷から…火が出てるぞ！」

屋敷の3階部分から――秋の空にそぐわない赤い炎が燃え上がっていた。

「翼――！！」

「翼」それがあの男の子の名前なのだろう。

早くしないと、男の子が――。

火はもう1階にも2階にも広がってしまった。

「おい、テメーらどけエエエ！！」

ふいに、大量の水が屋敷に振りかかった。

「火事の際はこの火消しの辰巳に任せなァ!!」

万事屋3人組と、「め組」と書かれた法被を着た背の高い女の人
大きなホースを持って水をぶちまけている。

「旦那ァ!」

「火の方は俺たちに任せろ!!」

その瞬間――銀時と目があつた。

紅い目が、大丈夫だというように優しく笑ったのを見て、志保は頷いた。

男の子の母親に駆け寄る。

「お母さん、翼君は私たちが絶対に助けます」

それだけ言つて、走り出す。

「オイッ…雨宮!」

土方の声が背に聞こえたが、駆けだした志保はもう振り返らなかった。

入口をくぐると、火は銀時達のおかげでいくらか消えていたが、煙が充満していた。

「ゴホッ…ゴホッ、結構火の回りが早いな…」

階段を2階、3階へと駆け上がる。

3階の入り口には椅子や机などが行く手を塞いでいた。

おそらく覆面男たちがやったのだろう。

「こんなもので…私の足を止められますか!」

一太刀で―――障害物を真っ二つに斬った。

「翼君!! 翼君!!」

口を開くと、煙が口の中に入ってくる。

咳をして涙目になりながらも、必死に名前を呼び続けた。

「……ここ……だよ！」

奥の方でか細い、しかしはっきりとした声が志保の耳に飛び込んできた。

「翼君……！」

駆け寄ると、もう翼はぐったりとしていた。

柱に縄で縛りつけられ、煙をだいぶ吸ってしまったようだ。

覆面男たちはいない。

翼を縛り付けた後逃げたのだろう。

「お姉ちゃん……僕は死ぬ、の？」

涙が伝う頬をぬぐって、志保は力強く叫んだ。

「大丈夫……私が絶対に、君を死なせたりしないから！」

複雑に結びつけられた縄を何とか解き、翼を抱きかかえる。

まだほんの小さな男の子の体は、驚くほどに軽かった。

「階段は……もう使えないな」

もうすぐそこまで、火が迫っていた。

なんとか脱出するところはないかと探していると、たったひとつ空気が流れ込んでくるところがあった。

——
ベランダ!!

急いでそこに出ると、下には隊士たちがたくさんいた。

「志保!!」

「雨宮!!」

「副隊長オ！！」

「ここから飛び降りたら…まず助からないかもしれないな」

だが、火はもう後ろまで来ていた。

もう戻ることは出来ない。

「志保——！！ 飛び下りてこい！！」

必死に叫ぶ、銀時の声がした。

「志保、大丈夫だ！！」

「さっさと帰ってこい！！」

「てめーは簡単に死ぬタマじゃありやせんぜ！」

志保はベランダから身を乗り出した。

銀時が、近藤が、土方が、沖田が—— 必死に志保を見上げて声を限りにして叫んでいる。

志保は、抱きかかえた翼に向き直って静かに言う。

「翼君、今から私は君を抱えて下に飛び下りる」

「お姉ちゃん…僕、恐いよ！」

「私も本当のこというと、少し恐い。だけど、仲間が下で受け止めてくれるから。だから…」

——私を、みんなを信じてくれる？

翼は、浮かんでいた涙を拭きとって、うなずいた。

「じゃあ、行くよ…！！」

翼を支える手に力を込めベランダを飛び立った瞬間、火の粉が志保達に降りかかってきた。

志保は左手で翼を抱え空いた右手で上着を脱ぎ、火の粉に投げつけた。

火の粉は上着をすぐさま飲み込んで燃えた。

その炎の塊も、いましがた飛び立ったベランダも遠くなっていく。

そして地面が眼下に迫り――志保はぎゅっと目をつぶった。

志保と翼は、4人の腕の中に落ちた。

力強い腕達に受け止められる。

「翼!!」

「お母さんー!!」

母親と息子が、涙で濡れた顔を押し付けながら抱きしめあった。

志保は、ちょっぴり家族がうらやましくなった。

優しい表情で親子を見つめていると、ふたりが振り返った。

「お姉ちゃん…ありがとうございます」

「ありがとうございます。みなさんも…ありがとうございます」

「いいえ、あなたから息子さんを奪うことにならなくて、良かったです」

真選組に入隊して、批判も後を絶たないけど同じ数だけ「ありがとう」と言われた。

最初は暮らしを営むただけだった。

しかし今は胸を張って、誇りを持って言える。

真選組に、仲間に出会えて————本当に良かった、と。

「翼君は煙を多く吸っているでしょう。救急車を手配しているので念のため病院にお行き下さい」

「本当に、ありがとうございます」

「いえいえ、とんでもない！」

母親に何度も頭を下げられ、近藤は困ったように笑って手を振った。

親子が救急車に乗っていつてしまうと、ホーツと安心した志保に土方が声をかけた。

「これから俺達は事態の收拾にかかるが、お前はもう帰って休め」

「え？ 大丈夫です。普段からニコチン吸ってる副長に比べたらマシです」

「何言ってるんだ！ 万事屋、コイツを頼んでいいか」

まだその場にいた銀時達に向かって土方が頭だけ向けて言う。

「報酬は弾んでくれよな」

「俺が連れて帰りまさら」

ふいに隣りに沖田が現れた。

土方も銀時も目を丸くする。

「お前はまだ仕事があるんだよ！」

「隊長、私は大丈夫…」

志保がそこまで言いかけた時、急に目眩がして、沖田の方に倒れかけた。

「言わんこつちやねエ」

そついつものポーカーフェイスで呟くと、起きお田は志保を抱きあげた。

俗に言う――「お姫様だっこ」という奴だ。

「なっ…隊長、降ろしてください！」

「こついう時は黙って大人しくしてればいいんでイ。お前の悪いところはすぐに無理をすることでさア」

志保はまだ反論しようとしたが、体が重くてそのまま力を抜いた。

「青春だねエ」

残された銀時と土方達はふたりの後ろ姿を見送った。

「フン、仕方ねエ。総悟の分お前らにも働いてもらっぞ」

「はア！？俺達はもう重労働してクタクタなんだよ！」

「報酬のことも忘れるなヨ！」

「そーですよ！今回は久しぶりに僕らともに働きましたもん」

火が消えて黒い煙が秋空に上がる屋敷をバックに、いつまでもギャーギャー騒いでいた。

第26話 受け止めてくれる仲間（後書き）

この秋祭りの事件のテーマは「絆」ですね。

あと影で「銀さんと土方の関係」と「土方の近藤への思い」です。
主に土方ですね。

後の方はうやむやになっちゃいましたけど。

第27話 リアル猫耳

秋雨がしとしと降り続ける日の午後。

志保の隣りには積み上げられた書類の山が。

「ハァー… ホントなんで私がこんなことしなきゃならないんですか」

昨日、攘夷党「蔵利熱湯」クラブネットのテロ事件によって煙を多く吸ってしまった志保は結局あの後3日間寝込んでしまったのだ。

その間にたまりにたまった書類のしわ寄せがきているのだ。

—— 半分以上が隊長のものなんですけどね。

実際3分の2枚くらいが沖田のものだ。

しかも何故かたまに土方のものが混ざっている。

なんとかフルスピードでさばいていると、ふと一枚の書類が目にとまった。

「あ、これ……」

「蔵利熱湯」の機密情報だった。

「蔵利熱湯」の攘夷浪士達は全員クラリネットを持ち歩いているらしい。

その理由は定かではないが、それを吹いているところをみたものはだれひとりいない。

そして幹部の3人は、覆面を常にかぶっている。

「なんか微妙に気の入らない攘夷党だな」

クラリネットとか吹奏楽器の中でもマヌケな感じじゃないですか。

「書類はかどつてやすかー」

「……………」

元凶がきた。

「ええ、あなたの無責任極まりない思想のおかげですよ」

「良かったじゃねーかい」

「どこにそう言える要素が入ってんですか」

もうしゃべってる時間がもったいないと沖田に背を向け書類に向き直ると、後ろでドカツと座る音がした。

「何座ってんですか」

「大丈夫でさア。邪魔はしやせん」

「あなたがこの空間にただで充分邪魔だと思っんですけど」

沖田は志保の言葉を見殺し、どこからかビンとコップを取り出し中

の飲み物をコップに注いだ。

またこの男は私の目の前で見せびらかしながら飲むつもりか。

しかし意外にも志保の予想は外れた。

「やる。サイダー」

「……へ？」

「疲れには炭酸と聞いたからねイ」

いやいや、疲れの元凶に言われたくないんですけど。

そういう言葉が出ないほど志保は沖田の行動に驚いた。

「結構です。隊長のことだからどーせろくでもないものが入ってるに違いありません」

「人の親切は素直に受け取ってかないとバチがあたりますぜ」

「常日頃からバチ当たりなことしかしてない人に言われたくないんですけど」

「早く飲みなせイ」

「わあ、この人の耳はただの飾り？」

これ以上やり取りを続けても不毛な会話にしかないし、この男は無理やりにも飲ませそうだったので志保はビンの中身を飲んだ。

仕方なしに――飲んだ。

「サイダーってこんな味でしたっけ？」

なんだかデパートで買ったサイダーとかなり違う味のような…。

ピョコッ

「ん？」

なんだか、頭に違和感が……。

「ぷはッ…クククッ……」

いきなり吹き出した沖田。

「隊長、何笑ってるニャン」

「……………え？」

頭を触ってみると動物の耳のような生あたたかくて毛深いものがふたつ生えていた。

視界の端には猫のしっぽのようなものも見える。

志保は鏡の前に瞬時に移動した。

中を覗き込むと、そこには猫耳と猫のしっぽが生えた自分がいた。

「…………ニャンじゃコレエエー!!」

「プククッ…………よく似合ってるじゃねーかい」

「デメエ沖田アア!! サイダーに何を入れたアアア!?!」

「別に俺のせいじゃねーでさア。昨日猫の天人から回収した薬を入れただけでさア」

「完全無欠お前のせいじゃねーかアアア！！ 100パーセント純度でお前のせいだろ！！」

「うるせーな。メス猫はニャンニャン鳴いてろ」

「誰がメス猫だニャン！……ん？」

「ブワツハツハ！！」

「なんだよこの語尾ニャン攻撃はアアア！！」

もう何なんだこの格好は！！

穴があつたら入りたい…アリの巣でも入りたい。

「いやーしつぽまでご丁寧に生えてらア」

「何携帯で写真撮ってんだアアア！！」

携帯を構える沖田に志保がピンを投げるがあっさりかわされた。

「ドS心をくすぐる姿ですぜ。土方さんや近藤さんにばらまいてあげまッア」

「ふざけんニヤアアア!!」

「ププッ…ふざけんニヤって……」

「私のバカアアア!!」

「お前ら一体何騒いでやがんだ？」

そこに今来てほしくない人物ナンバーワンの土方の声がした。

ゆっくりと襖が開く。

志保はとっさに押入れの中に隠れた。

「何ですかイ」

「総悟、お前だけか？ 今雨宮の叫んでる声が聞こえてきたんだが…。アイツ書類たまってるのにどこ行きやがったんだ」

土方が部屋を見回す気配がする。

どうかこのまま出ていってくれ、と志保は祈る。

「雨宮なら押入れの中に隠れてますぜ」

何アイツ教えちゃってんのオオオ！？ 何軽いノリでしゃべってんの！？

お前の辞書にフォローという言葉はないのか！

「あ？ 何やってんだアイツ」

土方が近づいてくる。

押入れが開くのを腕の力でなんとか押さえる。

「オイテメーは何遊んでんだ？」

「たっ…体調が悪いんです…ニヤン」

「ニヤン？」

やべエエエ！！ 抑えられなくてつい言っちゃったアアア！！

は？ 何コイツって顔してるよ。横目で見たけどすんげエ顔してるよ副長。

「お前今なんつった？」

「何も言っていない、ですよ。とりあえずこの部屋から出ていってくださいニヤ」

「今完全に言ったよな。完璧に「ニヤ」って言ったよな。え、ふざけてんの？ ふざけてんのお前？」

「ニヤに言ってるんですか。鬼の副長ニヤンともあろう方が聞き間違えですか」

「副長ニヤンンンンン！？ しかも2回言っただし！！」

自分でもびっくりなんですけどオオオ！！

なんか急激に猫語のシンクロ率上がったんですけど！！

「ちょっと土方さん、邪魔でさア」

「あ？」

急に沖田が土方を掻き分け押入れの前にしゃがんだ。

「煮干しやるからいったん出てきなせエ」

その煮干しを見た瞬間志保の頭の中で何かが切れた。

「総悟、お前なにやって……」

「ニヤンツ!!」

「……は？」

「……あ」

やってしまった。

シーンとした部屋に沖田の笑い声だけが響いた。

「ぶあっははは!!」

事情を聞いた土方は緑茶片手に爆笑した。

その目の前で志保は頭を垂れて座っている。

「あー、こりゃ傑作だな」

「いつか絶対仕返ししてやつからニヤ！」

「ぶっ、ニヤって…く、くくッ…」

「ああアアの口めエエエ!!」

沖田と土方の笑う姿を横目に見ながら志保はギリギリと歯ぎしりする。

「あーもうこんな耳ヤダアア…ん？」

志保は叫びながら頭の猫耳に手をやり思いつきり引っ張った。

そうしたら――拍子抜けするほど、あっさりとれた。

「あれ…とれたんですけど」

しっぽも消えていた。

「あーあ、もう終わりかい」

「……え？」

「実はこれ引っ張ったらすぐ取れるんですよ」

「…こんなオチかよコノヤロー」

（この薬は面白いが回収するぞ）

（どこにも面白い要素ありませんから！）

（ちなみにあれは女にしか効かないらしいですぜ）

（ハタ迷惑なもの作るバカがいるんですね）

第27話 リアル猫耳（後書き）

ここ数日びっくりするくらい寒いですね…！

8月なのにありえないです。

第28話 家出少女（前書き）

久しぶりの更新です…。

長い間更新できなくてすみません！

第28話 家出少女

「オイ…なんなんだヨ」

「僕だって知りませんよ。銀さん何か知らないんですか？」

「俺だって知らねーよ…」

肩を寄せ合ってひそひそ話すのは万事屋の3人。

万事屋のふたつあるソファアのひとつに3人そろって腰かけている。

そしてその反対側には……

「あの、…志保さん？ 今日はい体どうしたんですか？」

風呂敷に包まれた小さな荷物を傍らにおいてお茶をすすする志保がいる。

ただ遊びに来たという感じではなさそうだ。

それに普段は何の気づかいもなく隊服で来る志保が珍しく私服だ。

一同が見つめる中志保は静かに言った。

「真選組出てきたのでここにしばらく置いてください」

「「「はああああ？」「」「」

時をさかのぼること1時間前。

「あれっ、志保ちゃん。なんだかご機嫌だね」

志保は屯所の廊下で山崎に声をかけられた。

「地味のくせにそういうことだけはよく観察してるんですね」

「ひとこと多いよ!」

「副隊長、なんか嬉しそうだな!　なんかいいことあったのか?」

「原田さん私は将来ハゲになりたくないので話しかけないでください」

「ハゲうつんねーよ!」

いつものようにそこらじゅうに毒舌を撒き散らしながらも今日の志保は本当に機嫌が良さそうだった。

「雨宮、今日までの書類仕上げておいたか?」

と聞いた土方だったが、どうせ出来ていないだろうと踏んでいた。

ところが。

「ハイ」

確かに今日までの書類すべてが土方の手に乗せられる。

「あ？ めずらしいな……」

それでも疑ってパラパラとめくってみると、すべての書類が完璧に完成されているではないか。

「実はですね、副長。昨日私の行きつけのケーキ屋さんで新発売のチーズケーキが出たんです」

「ああ」

志保は大の甘い物好きだ。

どこかの白髪天パを思い出させる。

「ま、なんにしてもちゃんと仕事をしてくれたら何も言うことはねエがな」

食堂に向かって嬉しそうにひょこひょこ歩いていく志保の後ろ姿を見送りながら土方は呟いた。

志保が食堂に入ると、そこには沖田の姿があった。

「おう、雨宮。お前もサボリかい？」

「お前もつてことは隊長はサボりなんですね。見れば分かりますけど」

志保は沖田が座るイスの後ろを通り過ぎながら冷やかに言う。

「残念ですけど、私はちゃんと仕事を終わらせてきました。大好きなチーズケーキが待ってるので」

「…ふーん」

そして冷蔵庫を開ける。そこには念願のチーズケーキが…

「アレ？」

……なかった。

「え、え？　なんでエエエ！？　絶対ここに入れたはずなのに！？」

何度も冷蔵庫の中を見回し台所の方まで見に行ったが、ない。

大騒ぎする志保の脳裏にひとつの思いが浮かんた。

――まさか。

そして思い当った場所へ行くと。

「やっぱりお前かアアアア！！」

沖田はいつものポーカーフェイスで、志保のチーズケーキを食べていた。

そして志保の見ている前で最後のひとかけらを口に入れた。

「何お前は人のチーズケーキ勝手に食ってんだアア！！」

「なんでイ、お前のか。それなら名前書いとけよ」

「てめー今朝この話したよな？ 絶対わざとだよな？」

志保がこめかみをピキピキいわせているのにひょうひょうと「前科がある俺の目につくところにおいておくのが悪いんでさア」とか言う沖田について志保はキレた。

「もーいいです！ こんなとこ出ていきますから！！」

「という訳です」

「ただのお菓子とらただけじゃねーかアアア！！」

新八が立ち上がったって全身全霊でツッコんだ。

「何？ ただアンタのおやつ沖田さんに食べられただけじゃん！！
それで家出！？」

「ただのお菓子じゃねーんだよ腐れメガネ！」

志保は飲んでいたお茶を新八にぶっかけた。

「あづツツ！！」

「アレはなァ、人気の甘味処の新発売のチーズケーキでなァ、3時間並んで買ったんだよ！！」

「怒りで口調が壊れてるヨ」

「それを…あのクソ野郎の汚い胃袋に…」

志保の言葉に銀時も同意する。

「何イ！？ あそこの新発売の品だとオ！！ それは家出もする！」

「銀さん…分かってくれますか」

「いや、そんなことで家出すのはアンタただだからね」

新八が志保にお茶をかけられた顔を拭きながら冷静にツツく。

「それにそろそろ沖田さんも反省してるかもしれませんよ」

「あのサドが反省なんて太陽が西からのぼることはあってもありえないアル」

そこは誰もが大いに同意するところだ。

「でもうちに泊まるってのは…」

志保も万事屋といるとボケに回ることが多い。

このボケの量を新八だけでさばくのは無理があるというものだ。

それに神楽と志保は敬遠の中だし、なにより万事屋にこれ以上の人数は入りきらない。

「じゃあこれでどうですか」

志保が懷から出したのは封筒に入った札束。

「秋祭りのときの謝礼も兼ねてどうぞです」

「「「どうぞ泊まっていてください」」」

定春が嬉しそうにクウーンと鳴いた。

第28話 家出少女（後書き）

前書きで久しぶりの更新と書いたんですが…旅行に行ってきま
すのでまた3日ほど更新できません。

もう夏休みも終わりですが楽しんできたいと思います。

第29話 朝日が降りそそぐ（前書き）

私、ここ「にじファン」で二次小説を書いていることを誰にも内緒にしていたんですが、この前ついに部活の友達にバレました…！！

いやゝ秘密つてのはいつかはバレるもんですね。

第29話 朝日が降りそそぐ

結局万事屋に居候することになった志保。

新八のメガネを奪って追いかけまわされたり、神楽と本気のバトルをしたりしていたらいつの間にかもうとっぷりと日が暮れていた。

最近涼しくなってきたて日が短くなったのもある。

銀時がボロボロになるまで読みこんだ今週号のジャンプをソファ―に寝っころがりながら読んでいると、台所の方からいいにおいがしてきた。

においを辿っていくと、エプロンに三角巾という家庭的な格好をした銀時がめずらしく台所に立って料理をしていた。

何をつくっているかは煙で見えなかったが、口を開く前に追い払われた。

そしてソファ―で待っているといいにおいの煙をまといながら銀時

が居間に現れた。

「おーい、メシだぞー」

その言葉に新八と神楽も駆け寄ってきた。

おぼんにごはんとはんバーグのお皿が4セットのっている。

「うわあー銀さんのつくったごはんなんて久しぶりですね！」

「銀ちゃん、おいしそうアル！」

みんなで机の四方を囲って座る。

「いただきますーすー!!」

新八と神楽が箸と茶碗に手を伸ばす。

「銀さんって料理出来たんですね。何も出来ないプー太郎かと思ってました。ていうか肉を買う余裕どこにあったんですか？」

「んなこと言っているとハンバーグ食べさせねエぞ。黙ってさっさと食えや」

銀時に睨まれてハンバーグを口に運ぶ。

あたたかい味がいっぱいに広がった。

ふと顔を上げると銀時と目があつた。

銀時はちよつと嬉しそうにニヤツと笑つた。

志保はなんだか少し恥ずかしくなつて、うつむいて黙々とごはんを食べた。

「ねえ…銀ちゃん。クソ女はどこで寝るアルか？」

夜も更けた頃。

相変わらずのチャイナ服の寝巻に身を包んだ神楽がふと純粋な疑問をぶつけた。

「……………」

「……………」

「……………」

沈黙が流れる。

御察しの通り誰もそのことを考えていなかったのだ。

「銀さんの布団でいいんじゃないですか？ アンタいつもソファで寝てるでしょ」

「やだよ。志保がソファで寝ればいいだろ」

「断固拒否します。チャイナさんと押し入れて仲良くシコシコやればいいじゃないですか？」

「なんだと居候女アアア！！ シコシコって何アルか！ 銀ちゃんと私は至ってまともな関係ネ！」

いつもの通り不毛なやり取りが続く。

「フワァ〜」

定春が窓から綺麗に欠けた月を見上げながらあくびを大きくした。

「銀さん…やっぱりこれしか手はありません。銀さんの和室で寝ましょう」

いろいろ言い争いすつたもんだの後、新八が言った。

メガネがずれ袴もよれよれだ。

時計の針はもう真夜中を指している。

銀時はため息をひとつついた。

「仕方ねエ。新八も今日は泊まっていけ」

銀時は頭をボリボリ掻きながら和室の襖を開けた。

「銀さん——結局、結論は？」

銀時はちよこつと振り返ってあくびをした。

「決まってるだろ。寝るぞ」

定春も含めた4人＋1匹で小鳥の鳴き声が聞こえてくるまでぐっすりと眠った。

志保は日の光によって目が覚めた。

秋の日差しに目をしばたかせると、視界がはっきりとしてくる。

4つある布団のうち、ひとつだけが空になっていた。

新八と神楽と定春はまだいびきをかいている。

「ふわあ〜」

目をゴシゴシこすりながら居間に行くと、銀時はもういつもの格好に着替えソファーに座っていた。

その手にはいちご牛乳のパックが握られている。

「…珍しいですね。普段はまだしまりのない顔していびきかいてる時間じゃないんですか？」

「うん、よく分かった。お前の毒舌は寝起きでも健在なのな」

会話が途切れる。

小鳥の鳴き声が青い空に響く音だけが部屋にこだました。

志保は窓の外を見ているが、銀時の視線を感じていた。

「……帰りたくなったんじゃねーか？」

銀時に言われて気付いた。

志保は朝起きた時から何か違和感を感じていた。

それは――あのいつもの屯所ではないからだった。

朝起きて、隊服に着替えて、あのバカ騒ぎの中で過ごして――。

それがここにはなかったからだ。

万事屋だって決して嫌いなわけじゃない。

だけど、やっぱり――。

「ホームシックって奴かな」

「それに気付いてんのは俺とお前だけじゃねエよ。オラ、お迎えだぞ」

その言葉を見計らったかのように、万事屋の戸が開いて複数の人間が入ってきた。

1日ぶりに見る――あの人たちの顔だ。

「みなさん……」

先頭に土方、沖田、そして近藤もいる。

「どうしたんですか。今日は迷子になんかなくてませんよ」

志保が照れ隠しにそっけなく言うと、近藤が大声で笑った。

「志保、総悟とケンカしたらしいなあ」

「つたく、お前らはホントに世話が焼けるな」

土方も煙草の煙をふかしながら言った。

「すいませ〜ん。ここは禁煙なんでニコ中の人を出てってもらえま
すか〜」

「なんだと、テメエ。せつかくおもりを解放してやるつてのに」

「そんなこと言ってホントは志保がいなくて寂しかったんじゃない
ですか〜」

銀時と土方がギャーギャー騒ぎ、近藤が相変わらず大きな口で笑う横で、沖田がこつちを志保のチーズケーキを盗み食いした時と同じポーカーフェイスで見ていた。

「何ガンつけてんですか」

「お前、ホント可愛げがねーんだなア」

「ほっといってください」

沖田が黙って手を突き出した。

志保はそっぽを見ていた顔を沖田の方に向けると、そこには志保の行きつけの店の新発売のチーズケーキがあった。

「……………」

「オラ、代わりの奴買ってきたから、帰るぞ」

本当に人気の店だから、買うのは大変だったろうに…。

沖田が何時間も列に並ぶ姿を想像して、おかしくなった。

その顔はいつものポーカーフェイスだったけれど、ほんの少し申し訳なさのような表情が浮かんでいた。

今思うと、そんなに怒るようなことではなかっただろう。

現に沖田がまた柄じゃないことをして志保のために買ってきてくれたのだから。

素直に謝れない沖田を、いつもとは少し違う角度で見れた。

「はい」

銀時の背中から差し込む光を一身に浴びながら、志保は家へと足を踏み出した。

第29話 朝日が降りそそぐ（後書き）

まずみなさんに懺悔しなきゃならんことが…。

8月末頃に、私は3日間旅行に行くので投稿できないと言いましたが、約半月も怠ってしまいました。

本当にごめんなさい！

一応言い訳をさせてもらいますと、旅行に行く直前にパソコンがぶっ壊れたんです…。

この時期は文化祭や体育祭で忙しくなるので何週間か投稿出来ない期間が続くかもしれませんが、どうかよろしくお願いいたします。

第30話 普通の町娘のように

「あら？ 志保ちゃんじゃない」

その声に振りかえると、そこには黒髪の弟とは似ても似つかない美人
——新八の姉、志村妙がいた。

「妙さん…」

以前近藤のストーカー被害に遭っている女性として志保と知り合った。

笑顔を絶やさない清楚な美人だが、その笑顔のバックには鬼が見える…というのを口に出したら殺されるだろう。

「今日も仕事なの？ あのゴリラにこき使われてない？ もしそうなら私がゴリラを殺しにいくから遠慮なく言ってね」

「あはは…まあ、はい。妙さんは買い物ですか？」

笑顔のまま飛び出てきた恐ろしい言葉は軽くスルーして話の流れを変える。

「ええ。夕飯の買い出しだけだ」

そう言うお妙の腕にはスーパーのレジ袋からよく見るような細長いネギが飛び出ている。

「あ、そうだ志保ちゃん。私明日着物とか着物に行くんだけど、志保ちゃんも一緒にどう？」

「買い物…ですか？」

そういえば明日は非番だった。

それに1日くらい普通の女の子のように買い物などをしてみたい。

「私でよければ一緒に一緒にします」

「そう、嬉しいわ」

明日の待ち合わせの場所と時間を決めて別れようとしたら、お妙がにこやかに付け加えた。

「あ、そうそう。明日はもうひとり私の友達が来るから」

「志保ちゃん。この子が私の親友の…」

「柳生九兵衛だ」

翌日、お妙が連れてきたのは志保とあまり背の変わらない眼帯をつけた凜々しい瞳をもつ子だった。

「真選組1番隊副隊長、雨宮志保です」

ぺこりと頭を軽く下げながら志保も自己紹介をする。

九兵衛が少し目を見開く。

「そうか、じゃあ君が巷で噂の真選組唯一の女隊士か」

「え？ 私、そんな有名なんですか？」

志保は驚いて聞き返した。

真選組始まって以来始めての女だというから多少なりとも攘夷浪士の中で話題にのぼっているとは予想していたが、市井でも同じだとは思ひもなかった。

「ああ。柳生家にもその实力は風の便りで届いている」

「九ちゃんの家、柳生家はとても大きな剣の名家なの。九ちゃんは

そこの次期当主なのよ」

「へえ、女の子なのにすごいんですね」

「え……」

志保の言葉に九兵衛もお妙も息をのんで志保を見た。

志保は肩をすくめる。

「最初に見た時から分かりましたよ。直感っつーやつです」

「……やはり君はただ者ではないな」

九兵衛はフツと笑って言った。

この子もきつといままで苦労してきたのだろう。

九兵衛が過ごしてきた日々のことは何も知らないが、なんとなく悟ることは出来た。

同じ、女を捨てた身として――。

場所を変えて、かぶき町の街を並んで歩く。

お妙が志保を見ながら唐突に口を開いた。

「そついえば志保ちゃん、私服で会うのは初めてだけどいつもそんな格好なの？」

「え？」

志保の今日の服装は白と黒の一般的な袴だ。

そんな格好と言われても志保にとっては慣れた普段着だ。

「もう、志保ちゃんたら女の子なんだから休日くらい綺麗な着物を着なきゃ」

確かに言われてみれば女の子の普段着として袴というのはいかなものだろう。

お妙の言う通りかもしれない。

「いやー、連載開始当初は普通の着物着てる設定だったんですけど、こっちの方が『らしい』だろっていう作者の都合で描写変更いたしました」

「志保ちゃん、物語が破綻するような台詞は控えましょうよ。言わなきゃ最初のことなんて忘れられてるんだから」

「妙ちゃん…その発言もどうかと思うが」

そうこうしているうちに大きなショッピングモールに着いた。

「そうだわ！ 今日はずっと九ちゃんの可愛い服を買いに来ただけど、志保ちゃんの服も私たちが見繕ってあげるわ！」

「え？」

「私…たち？」

お妙が目輝かせながら言った言葉に志保も九兵衛も苦い顔をする。

「妙ちゃん、僕は…」

「私は結構ですよ。もしものことがあったときにこっちのほう動きやすいですし…」

ダン

「私が見繕ってあげるって言ってるんだから大人しく受け入れなさい」

一瞬にして破壊されたコンクリートの壁とお妙の黒い笑顔を見て志保は即座に答えた。

「は、はい……」

「九ちゃんも、いいわよね？」

「……………」

九兵衛も一瞬間をおいた後諦めて頷いた。

「分かった…妙ちゃんがそこまで言うなら仕方がない」

3人はお妙を先頭に、いかにも女の子らしい着物屋に来た。

「ここは安いし可愛いし居間若い女の子に人気の店なのよ」

お妙が店の中に入りながら志保と九兵衛に説明する。

「九ちゃんにはもう決めてあるのよ。ハイ、コレ」

そう言ってお妙が持ってきたのは、紫と白の蝶が飛んだ太ももまでしかない丈の短い着物だった。

確かに九兵衛の雰囲気によく似合っている。

「普段とは違う感じでいいでしょう?」

お妙は九兵衛に有無を言わず着物と一緒に更衣室に押し込んだ。

「さてと、次は志保ちゃんね」

お妙がにっこりと笑って言った。

「志保ちゃん、普段はどんな感じの服を着てるの?」

「そうですね…寒色系の色の着物が多かったです。といってもだいぶ前ですけど」

「そう。じゃあ今日は明るい色を選びましょうか」

お妙は志保を店の真ん中ほどまで引つ張っていった。

そこにはピンクや黄色の女の子らしい着物がたくさん並んでいた。

「志保ちゃんの目の色には…これがいんじゃないかしら」

そう言ってお妙が手に取ったのは目がさめるような明るい水色の着物だった。

小ぶりの白い花が舞っている。

お妙に強く勧められて袖を通すと、すっとひんやりした心地よさがある。

志保に丁度良い大きさだった。

「いいじゃない。よく似合ってるわ」

お妙が試着室から出てきた志保を見て軽やかに言った。

お妙に押しつけられた着物を着た九兵衛も大きく頷く。

「せっかくだから着て帰って、あのゴリラたちをびっくりさせてあげるといいわ」

もう買うことは決まってるんだな… またもやお妙の強引さを垣間見たが、綺麗な着物を着れたことがちょっぴり嬉しくて、何も言わなかった。

「只今戻りました」

報告のために局長室に顔を出すと、近藤は志保の格好を見てお、という顔をした。

「志保、可愛いなあ！ どうしたんだ？」

「妙さんと一緒に買い物してきたんです」

「お妙さんと！？ いやー、やっぱり志保も年頃の女の子だからこ
ういう格好も良く似合うなあ。いやでも、さすがお妙さん。志保の
ために一緒に買い物なんかしてくれるなんてお妙さんは……アレ？
志保？」

自室に戻ろうと廊下を歩いていると、角を曲がったところで山崎と
10番隊隊長の原田右之助にぶつかった。

「あれっ？ 志保ちゃん。その服どうしたの？」

「おーっ、珍しいな！ やっぱり副隊長も女子ってことか」

「原田さん、あなた局長みたいなこと言いますね」

「バカなこと言うなよ志保ちゃん。局長はゴリラだからフサフサじ
ゃん。だけどコイツはハゲだからさー」

「そーいうことじゃねーよ！」

「まあ、そうですね」

志保も原田の頭を見やりながら言う。

「あれ、副隊長？　それどこ見てんの、ねえ？」

「話がそれてるってば…あ、沖田さん！」

山崎が志保の背後に呼びかけた。

目だけ後ろに向けると、相変わらずけだるそうに歩く沖田がいる。

「アレ、雨宮？　お前今日非番だったらしいなア」

「そうですけど」

それどころかなんだかいつにもまして機嫌が悪そうに見える。

「隊長。副隊長の格好どー思う？」

「あ？」

沖田が志保の格好をじろじろ眺めまわしてぼそつと呟いた。

「そこらへんの町娘みてえだなア。不細工な」

そのまま歩いて志保たちの脇を通り過ぎた。

山崎と原田は沖田の言動にぷりぷり怒っていたが、志保は嬉しかった。

もちろん褒められるのだって悪い気はしないが、志保がなにより欲しかったのは――志保だって、普通の女の子という事実だったから。

「さ、てと」

志保は土方に今日ぐらいいは怒られる前に済ませようと、部屋に向かいながらうんと伸びをした。

今日の空も、志保の着物と心のように晴れ渡っていた。

第30話 普通の町娘のように（後書き）

ご拝読ありがとうございました！

今回は九兵衛が新しく登場しましたが、もう登場させたいキャラが多すぎて…。

こつこつと書いていたらいいなと思います。

第31話 紅葉

秋もだいぶ深くなった。

夜が来るのが早くなり、外に出るとひんやり外気が体を包む。

秋雨がしとしと、しとしと……。

そんな、ある日の出来事。

「ああ」

志保は書類の山を前にうめき声をあげて机に突っ伏す。

隊長格ともなると目を通さなければならぬ書類も多い。

だが1番隊の隊長である沖田は書類なんか見ないと誰もが知っているのだ、最初から全部志保のところに回ってくるのだ。

目を通していない書類とすでに目を通した書類と分けておいてある

のだが、前者のほうがはるかに高く積み上げられている。

「女心と秋の空…？ 隊長の気分と秋の空でしょ」

今日は珍しく「書類手伝つてやる」と言っけて持っけていったのだが（もともとこの3分の2が沖田がやらかしたことの後始末）、雨が降っけてきて眠いなどと言いだして結局全部志保のところに戻っけてきたのだ。

「もーいいや。仕事やめ！」

後で土方にどやされるだろうが、今はただ寝っけて転がりたかつた。

昼寝モードに入ろうとした、その時。

ニャーア。

「ん？」

なんだかねコのような鳴き声が聞こえた気がしたが…。

耳を澄ませてみても、雨が降る小刻みな音しか聞こえない。

「気のせいかな…」

再び目を閉じた。

ニャーア…

やっぱり気のせいじゃない。

志保は障子を開けて縁側に出ると、きょろきょろ辺りを見回す。

そこには何もいない。

雨に濡れるをためらっていると、軒下からひとつの顔が出てきた。

「ニャア」

あどけない紅い目をした、白い毛並みの1匹のネコだった。

「はあ？ ネコを拾ったただあ？」

土方が素っ頓狂な声をあげる。

そこには会議室になんとか集まっているいつもの顔馴染みメンバーがそろっている。

「ダメだ。元あった場所に捨ててこい」

「アンタはお母さんですかコノヤロー。つか生き物を捨てろだなんてひどい人間ですね」

「何言つてんだ。お前がそもそも拾ってこなかったら捨てる手間もかからなかったんだよ」

「まアマトシ。いいじゃないかネコの一匹ぐらい」

「そうですねトシ。それにこのネコ、ネコ耳生やした時の雨宮に似てますぜ」

ごく最近、志保が沖田の策略でネコの耳としっぽが生えてしまった時があった（第27話）。

「お前にトシとか言われたくねーよ！ ……まあ、でも確かに…ププッ」

「何笑ってんですか！！ 何納得してんですかアア！！」

「仕方ねエ。お前が自分で責任もって飼えよ」

「何か全然嬉しくないのはなんでかなアアア！！」

叫ぶ志保の膝の上で、白いネコがすまし顔でニヤアと鳴いた。

「よし。このネコを飼うことは俺もちろん賛成だ。だがひとつ大きな問題がある」

近藤が志保達に向き直って重々しく言う。

「問題？」

「それは…」

「『それは？』」

「それは……名前だアアアア！！」

「「……………え？」」

土方と志保の声が重なる。

近藤が深刻そうに言うからよほど大事なことなのかと思いきや……
名前？

「ゴリ…局長…ちょっと動物病院で精密検査してきたほうがいいんじゃないですか？ 頭の」

「今完全にゴリラって言おうとしてたよね。それに言い直しても動物病院って言っちゃってるからあ！！」

思い切りわめいてからゴホンと近藤が咳払いをする。

「まあ、とにかく名前ってのは大事なもんだ」

「俺は近藤さんに賛成ですぜ」

沖田もチューインガムを膨らませながらもごもご言う。

「じゃあ…仕方ありません。『第1回チキチキネコの名前を決めましょうかね大会』開催決定です」

「お前らってホントそーいうの好きだよな」

志保の拾ったネコの名前を考えることにした4人。

まず口火を切ったのは名前決めを提案した近藤。

「そうだな…秋だし、『星。あき』ってどうだ？」

「いや、それアンタが星。あき好きなかっただけでしょ。つかネコの名前に。入れるなよ」

志保が冷静にツツこむ。

「じゃあサド丸15号ってのは？」

「コレアンタのペットじゃないですから！ ていうかこの子女の子ですよ！」

志保がネコを持ち上げながら怒鳴った。

「あれ、みなさんおそろいで何やってんですか？」

そこに隠密活動の報告書を手に持った山崎が現れた。

「おお、いいところに！ ジミー山崎さん！」

「え？ 地味ネタ久々に登場？ てつきり影薄すぎて忘れられてると思ったのに…」

「ネコの名前？」

「はい。でも真選組ってバカの宝庫じゃないですか。だからまともな名前を考えてくれる人がいなくて」

「今さりげにもものすごい辛辣な言葉吐いたよね」

近藤が涙目になりながら呟く。

「そこでジミ崎さんの登場です」

「いや、何種類も駆使して地味表現しなくていいから」

そう言いながらも山崎はその場に座ってネコを抱え上げる。

「うーん、そうだな…ネコだけにタマとかミケとか？」

「山崎さんありがとうございます。地味過ぎてもダメということが分かりました」

「あれ？ 気に入らなかった？」

山崎は頭を掻いたが冷たい空気にすごすごと退散した。

「結局決まりませんねエ」

志保がため息とともに言う。

「――仕方ねエな」

今までずっと黙っていた土方が口を開いた。

「土方さん、もしや何かいい案があるんですかい？」

「まあな。聞きたいか？」

「もったいぶらねーでさっさと言っちゃってくださいエよ」

「フン……マヨ」「何キメた顔してんだアア！」「」

カッコつけた土方の頭に志保、沖田、近藤の足が華麗にクリーンヒットした。

「ハア…やっぱりポケ合戦になっちゃうんですね。少しは予想してましたけど」

「こんなもんだろイ」

お茶をすすりながら沖田がしたり顔で言う。

「でもやっぱり決めなきゃいけねーよな」

「ていうかもともと近藤さんが変なこと言いだすからこんな風になっただろーが」

「だって決めなきゃいけねーじゃん！」

「じゃあ…秋なんで『紅葉^{もみじ}』とかどうですか？」

「ニヤア！」

「……え？」

志保の膝の上に乗っていたネコが大きく鳴いた。

「この名前が、いいの？」

ネコは——紅葉は、もう一度鳴いた。

大きく、嬉しそうに。

「……こんなオチ？」

「そういえばこのネコ……旦那に似てますねィ」

局長室を出て廊下を歩きながら、紅葉を抱える志保に沖田がふと思いついたように言った。

万事屋の旦那に、と沖田は繰り返す言う。

「……銀さんに？」

そんなこと、誰かに言われるまでは少しも気に掛けなかったが、確かにそうかもしれない。

くせつ毛でこそないものの、真っ白な毛並みと鮮やかな紅い双眸。

「お前には銀さんのようにグータラにはなってほしくないけどね」

紅葉は志保の胸に顔を寄せてぐっすりと眠っていた。

第31話 紅葉（後書き）

今回のネコの名前、本当は募集しようかとも思ってたんです。

でも全然応募が集まらなかったら悲しいじゃないですか…！！
ひとりでそんなことやってイタイ奴じゃないですか！

そんなこんなで私も「秋だし紅葉でよくね？」というノリで「紅葉」
に決まったわけです。

第32話 「幸せだった」(前書き)

ミツバは好きなキャラのうちのひとりです。

ここから2話分、名付けて「ミツバ命日篇」です。

それではどうぞ！

第32話 「幸せだった」

「ふわぁ、涼しいと寝やすいなあ」

志保は欠伸をしながら誰に言うともなく言った。

いつもは沖田の次に寝坊する確率が高い志保だが、今日は珍しく早起きだ。

目を追うにつれ世界が秋に染まっていく。

山々は赤や黄色に色づき、江戸の町にも時折紅葉の葉が舞い落ちる。

せっかく早起きしたんだから散歩でもと玄関に向かうと、沖田が前を歩いているのが見えた。

こんな朝早くからどこへ行くんだろうか？

声をかけようとしたが――出来なかった。

なんだか、沖田のその背中がいつもより翳りを帯びているような気がしたから。

「隊長…？」

昼過ぎになっても、沖田は帰ってこなかった。

土方の目をかいくぐって巡回をサボり、屯所でずっと待っていたがその姿は一向に現れない。

さすがに不思議に思っ^て近藤に沖田の行方を訊ねようと局長室に向かう。

近藤の笑い声が聞こえ、いるのを確認してから声をかけようと襖に手をあてがう。

しかし、中からふたり分の声がしてきた。

「トシ、最近働き過ぎじゃないか？　ちょっとは休め」

「俺のことは気にすんな」

今ここで土方に会ってしまったら、せっかくバレずにいたのがおじやんになってしまう。

また時間を改めようとその場を去ろうとすると、近藤が志保が今いちばん気になっていることを神妙な、優しい口調で言った。

「総悟は出かけたのか」

「ああ、朝一番にな」

志保は襖にぴったりと耳をくつつける。

もしかしたら沖田が出かけた理由を話すかもしれない。

「また1年か…時間つてのは意外と早く経つもんだ……。でも総悟は忘れることなんざ出来ないだろうな。」

唯一の肉親だった姉を亡くしちまったんだから」

え―――？

「トシ、お前も命日くらい会いに行つてやれよ。総悟だつて本当は……」

「俺はアイツに会いに行く資格なんざねエよ」

土方が聞き取れないくらい低い声で呟いた。

「……………」

志保は黙つてその場を離れた。

自分は何も知らなかったのだ。

沖田に姉がいたこと。

そしてその大好きだった姉を亡くしていたこと。

出会って数ヶ月しか経っていないのだから、それは当り前のことなのかもしれない。

しかしそのことが、すごくショックだった。

胸にぽっかり穴が開いてしまったようだ。

「隊長…辛かっただろうな…」

たった今このことを知った私なんかよりずっと辛くて苦しいだろう。

「雨宮？」

声をかけられても、数秒の間反応することが出来なかった。

のろのろと顔を上げると、そこには朝より少し明るい顔をした沖田が不思議そうな表情で立っていた。

しかし、その直後ギョツとした顔になる。

「雨宮…!？」

どうしたんだろう……？

ぼんやりとそう思った時、自分の頬に涙が伝っているのに気がついた。

「隊長…お姉さんがいなくて、寂しいですか？」

沖田の目が見開かれた後、静かな表情になり志保の涙をそっとぬぐった。

志保は近藤達の話盗み聞いたこと、その内容をすべて沖田に話した。

「そうか、近藤さんと土方アンチキショーに聞いたのかイ…」

「…すみません」

沖田は首を振った。

「別にお前を責めてるわけじゃねーよ。まアいつかはバレることだしな」

そう言つて沖田はすべてを話してくれた。

沖田の大好きだった姉、ミツバは、早くに亡くなった両親の代わりに沖田を女手ひとつで育てた。

優しくて可憐な大和撫子だったが、肺を患っていて、病気がちだった。

なのに辛いものが異常なほど好きで、よく周りに怒られていたらしい。

そして、ミツバは――――土方に惚れていた。

「俺はよく野郎に嫉妬してやした。野郎がきてから、近藤さんも姉上も俺に構ってくれなくなっちゃったから……」

単に俺は子供だったんでさア、と沖田は自嘲じみた笑顔で言った。

「結局姉上の幸せを邪魔してきたのは、俺。人並みの幸せを味わえないいま、天国に逝っちゃった」

頭に、沖田とよく似ている優しい表情の美しい女性が浮かんた。

「…そうでしょうか？」

沖田が、うつむいていた顔を上げこちらをじっと見つめる。

「私は何も知りません。でも…ミツバさんは、あなた達のこと好きだったから、あなたたちと一緒にいれて幸せだったと思います」

たとえば、それがどんなに短い間だったとしても。

沖田は目の前の少女を声も無く見つめた。

『ぶっきらぼうでふてぶてしくて、不器用で……でも優しいあなた達が大好きだった』

『私……とっても…幸せだった。あなた達のような素敵な人たちと出会えて』

姉が最期に残していった言葉――。

忘れもしないあの言葉が、刹那に頭によみがえった。

自分が姉にしてやれたことは少なすぎた。

姉が自分にくれたたくさんの幸せを、ぜんぶ返すことは到底できなかった。

けれど、幸せだった。

そう言ってくれるなら、俺は――。

「俺が、姉上のことをお前に言わなかったのは……お前には、姉上みたいになってほしくなかったから」

そう。

姉上のように、俺から離れて行ってほしくなかったから。

俺じゃなくて、土方の方に行ってしまうのではないかと恐かったから。

自分のために泣いてくれた、初めての志保の涙はあたたかかった――

次の日、志保は供える花とミツバの好物だと聞いた激辛せんべいを持ってミツバの墓を訪れた。

沖田に教えてもらった墓は、電車で1時間ほど揺られた先にあった。

墓地の坂を登りきった先の墓には、先客がいた。

「副長……」

ミツバの想い人、土方その人だった。

第32話 「幸せだった」(後書き)

本当にミツバ篇は銀魂の中でも好きな話なんです。

沖田と銀さんの絡みも好きだし、沖田や土方の想いが切なすぎます……。

ミツバが亡くなってから何回も命日がきてるんですけど、でもそこはサザエさん方式というご都合主義でスルーしてください。

第33話 今も「幸せです」（前書き）

今回の話を書いたことで全国のミツバ・土方ファンの皆さまの中で不快に思った方がいらっしゃったらお詫び申し上げます。

自分の土方とミツバを汚さないで！ という方は閲覧をお控えください。

第33話 今も「幸せです」

志保は持つてきた激辛せんべいと供えの花を「沖田家之墓」と記された墓の前にそつと置いた。

「雨宮…お前なんでここに…」

「沖田さんに聞きました」

キツカケはあなた達の会話ですけど、と心の中で付け足す。

「そうか…」

「ここに眠っていらっしやるんですね…ミツバさん」

「……………」

「土方さん…あなた本当は会いに行く資格がないと思いつつも、毎年来ていたんでしょう？」 沖田さんに氣を使って命日の次の日に「

志保はいたわるような、しかしそれでいて有無を言わさない視線で言った。

「そんな大層なもんじゃねエよ、俺ア」

志保を見ずに土方は言う。

「俺はアイツのためと言ってずっとアイツに向き合わずにきた。それがアイツの幸せにつながると思っていた。だが……」

低い声で語りながらそこでじつと墓を見つめる人物は、普段攘夷志士から恐れられている鬼の副長なんかではなくただのひとりの人間のように思えた。

「それは結局俺の自惚れだったんじゃないか、アイツの…幸せを願いながらも向き合つのが怖くて逃げてきたんじゃないかと」

アイツが——ミツバが死んでからそう思うようになった。

「……………」

「ざまアねエよな。鬼の副長たる俺がこんなこというたア」

土方は嘲笑を浮かべる。

その表情は、昨日沖田が姉のことを語る時に見せたそれとそっくりだった。

「お前の言うとおり、ずっとその日は避けてきた。…どっちにしろ、総悟は気に入らねエと思うがな」

「あなた達は……似た者同士ですね」

「総悟と俺が…？」

土方が志保に目を向ける。

比べられることなら多々あった沖田と土方だが、似ていると言われたのは初めてなのだろう。

「土方さんも沖田さんも、本当はミツバさんと互いの幸せを願っているのに空回りして…でもミツバさんはそのことを分かっている、

ふたりの幸せを何より望んでいて」

「……総悟は俺の不幸は望んでも幸せなんて……」

「そんなことはありません。だって沖田さんは本当は土方さんのことを――」

「おっと、余計なことベラベラしゃべってんじゃねーよ」

また、志保達が背を向けていた坂道から見慣れた隊服姿の男が現れた。

「沖田さん」

「総悟……お前今日は仕事だよな？」

「見ての通りでさア」

沖田が肩をすくめてみせた。

沖田は志保と土方の間をすり抜けて、墓に手を合わせた。

長いこと——そうしていた。

ただ、動かずにずっと。

しばらくして沖田は閉じていた目を開けると、志保達に向き直った。

「土方さん…俺ア知ってましたぜ。アンタが毎年来てたこと。無関心を装いながらも、ずっと姉上のことを考えていたこと」

土方は微動だにしない。

そのことには志保も気付いていた。

墓に供えられた左右の花の種類が、全然違うものであったこと、激辛せんべいが2個あったこと…などから。

「土方さん……俺はアンタが心底嫌いだった。今でもそうでイ。けど俺は姉上にただ幸せになってほしかった」

「アンタにも——素直になってほしかった。土方さん」

「……それをお前が言うかよ」

土方の口からはかすれ声しか出てこなかった。

志保は志保で胸がいっぱいになって何も言えなかった。

普段不器用でいじっぱりで、素直じゃないこのふたりの本音を聞ける機会なんてなかなかない。

でも今日は、ふたりの気持ちをたくさん聞けた。

それをきくと天国のミツバさんも——喜んでいく
れるはずだ。

「来年からは…アンタが命日に来てくだせエ。俺はもう来ないことに決めやした。姉上が振り返っちゃダメだって、言ってたんで」

そう言う沖田の顔は晴れ晴れとしていた。

紅葉が一枚、澄んだ青い空のどこからかひらりとミツバの眠る墓へ
舞い落ちた。

第34話 マジカルバナナ

真選組の隊長格の隊服をキチンと身にまとった3人が夜の闇の中でネオンを放つ高層ビル――もとい「警察庁」の最上階に立った。

廊下を進んでいくと、いちばん奥の部屋の前にはいかにもボディーガードという感じのスーツ姿の男がふたり。

3人はそれぞれ懷から警察手帳を取り出し、男に見せる。

『武装警察真選組局長 近藤勲』

『武装警察真選組副長 土方十四郎』

『武装警察真選組1番隊副隊長 雨宮志保』

男はそれらを見るとすぐさま部屋に通した。

中には足を机に投げ出した男が葉巻をふかしていた。

サングラスをかけ、いかにもヤクザという感じの中年男だ。

「オイ、とつつあん。いきなり呼び出して何の用だ」

とつつあんと呼ばれたその男は、松平片栗虎――

――真選

「しかも雨宮を連れてこいつて？ 言つとくがコイツは無愛想すぎてキヤバクラ勤めなんか出来ねーぞ」

「アンタに言われたくありませんよ」

志保が横目で土方を睨みながら言った。

その時、志保に向かって松平のサングラスの奥の鋭い目が輝いた。

「アンタが志保ちゃんか」

「え？ そうですけど…」

「近藤―、なんでこの子が入った時報告しなかったんだ」

「えっ？ 何言ってんだよつつぁん。俺ちゃんと直接報告したぞ」

「嘘つけ、おじさんそんなことひと言も聞いてねエぞ。もー中崎からから聞いてびつくりしちゃったよー巷で真選組唯一の女隊士が噂になってるってよオ」

松平はそう低いボイスで軽く言いながら近藤に向かって銃弾を放った。

「ぎよわアアア！！ あばば、何すんだよつつぁん！」

「お前らみたいな飢えた狼どもの中にひとりか弱い志保ちゃんがいると思うとなア、いやーやつぱきゃバクラに夢中になって報告ないがしろにするんじゃないかった」

「やつぱり報告してたじゃん！！」

近藤の命からがらのツッコミを無視して松平は志保に向き直った。

「まあ、とにかくだ。おじさん応援してるからテキトーに頑張れや」

志保は黙って頭を下げた。

「見かけほど悪そうじゃないですね、あの人」

部屋を出てエレベーターを待ちながら志保が言った。

「いや、あのおっさんの中身は見かけそのものだからね」

危うく殺されそうだった近藤が慌てて訂正する。

「ほぼマフィアみたいなもんだぜ。本人も言ってたしな」

左右から松平のことを言われそれを軽く受け流しているうちにエレベーターがきた。

乗り込み、エレベーターが閉まる。

「局長、私腹減りました」

「そうだな、俺もだ！」

「何か食ってくか」

急に呼ばれたので夕飯を食べる時間がなかったのだ。

「お前ら、何がいい？　今日は俺のおごりだ」

近藤が威勢よく言う。

「私パフェがいいです！」

「何言っただこのガキ。晩メシだぞ。俺はカツ丼がいい」

「アンタカツ丼頼んだらマヨかけて犬の餌にしちゃうじゃないですか」

「なんだとゴラァ、マヨネーズなめんなよ！！」

「オイ、お前らちょっと待て……」

「「ああ！？」」

ギヤーギヤー騒ぎ始めたふたりは近藤の制止にメンチを切る。

だが近藤はそれに気付かないほどなんだか動揺している。

「このエレベーター……止まってないか？」

「……………」

「……………」

確かにエレベーターの上の階を表示する数字は9から光が動かない。

「……………9階から8階の間が長いんじゃないですか？」

「そんなビルねえだろ。来た時は普通だったぞ」

「やっぱり……………動いてない？」

「……………」

次の瞬間近藤が金属のドアをガンガン叩き始める。

「誰か助けてくれエエエ！！ 俺は死ぬならお妙さんの膝もとで死にたいイイイ！！」

「仮にも局長なんだから取り乱さないでください。誰かまだひとがいるでしょ」

志保が落ちついて言った。

「今日はなんかとつつあんがキャバクラ記念日とか言ってみんな9時にはいないらしいぞ」

「警察庁が何やってんの！？ …じゃあ長官がエレベーターを使うでしょう」

「あの人、最近血圧がヤバいとかで階段使うことにしたらしいぜ」

「…つまり何ですか。私達は閉じこめられたと？」

「ああ」

「助けも来れないから明日の朝まで待てと？」

「そついうこつた」

「……ふざけんじゃねエぞオオオ！！」

「ゴフオツ！！」

志保のアップパーカットによって土方は思いっきり頭を硬い壁に打ち付けた。

「私はなア、隊長の書類のせいで昼飯も抜きだつたんだよオオオオ！！ もつ腹と背中がメンチ切り合ってますよコノヤローオオオ！！」

「それ完全に総悟のせいだろ！！ だあーっ、落ちつけよ！！」

「……………」

「……………」

「……………」

3人は膝をかかえて地べたに座り込んでいる。

(…………ヤベエ、空気が重くて仕方ねエ)

さっきから全員黙りこんで何分も会話がない。

志保と近藤に至っては負のどす黒いオーラがにじみ出ている。

ここは俺がなんとかしなければ……！！

「なア……なんかしねエか？」

「…は？」

ふたりがボォーッと頭を上げる。

もう目が死んでる。

「……首つりゲームとか？」

「違エよ！ そっじゃなくてだな…そっだ、マジカルバナナなんかどーだ？」

マジカルバナナとは…

説明するのが面倒臭いので分からない方はニコニコで検索！

「じゃあ行くぞ…」

「なんであのニコチンバカあんなにテンション高いんですか局長」

「さあ…」

「マジカルバナナ、『バナナ』と言ったら『黄色』！ ハイ！」

「『黄色』と言ったら『光』」

「ハイ」

「『光』と言ったら『永久』に戻らない」

「…ハイ」

「と、『永久に戻らない』と言ったら『時間』！ ハイ！」

「『時間』と言ったら『もう振り返ることはできない』」

「ハイ」

「『もう振り返ることはできない』と言ったら『あの時のチーズケーキ』」

「ってオイ、お前らネガティブ思考もいい加減にしろよオオオ！！」
土方がたまりかねて叫ぶ。

「どんだけだよ！！ つーか雨宮『あの時のチーズケーキ』って完全に総悟に食べられちゃった時のこと引きずってんだろーが！！」

「実はアレ完全生産限定盤でもう売ってないんですよ…」

「過去のことは振り返るなアアア！！ じゃあチーズケーキで行くぞ！」

土方がまた手を叩きだした。

「『チーズケーキ』と言ったら『甘い』！ハイ」

「『甘い』と言ったら『俺達の無謀さ』」

「ハイ」

「『俺達の無謀さ』と言ったら『助かること』」

「オイイイ！！ お前らほんとに、……！！」

その時土方の瞳孔がさらに見開かれ、次の瞬間ぐらりと横向きに倒れた。

「トシ！！」

「副長、酸素が薄い中であんなに騒ぐから……！！」

「へへっ……やっといつものテメーらに戻ったな」

「「！！」」

「落ち込んでるテメーらなんて……らしくねーよ」

「……」

ドガン

「「「！」「」」

狭いエレベーターの中の空間がシリアスモードになったその時、激しい破壊音によって硬い金属のドアが吹き飛んだ。

舞い立つ埃の中からバズーカを背負った男が現れた。

「みなさん生きてやすか」

「た、隊長！」

「総悟……！」

なんとそれはこの状況を心から楽しんでいる表情の沖田だった。

「なんでお前がここに？」

「とっつあんからアンタ達がエレベーターの中に閉じ込められてるかもって連絡貰ったんでさア」

「それならなんでもっと早く助けられなかったんだ。もう閉じ込められてからだいぶん経ってるぞ」

そう近藤が問うと沖田はニヤリと笑った。

「いやーどーせなら土方さんが酸素不足でへばってからにしようと思ったんですが、あとちょっとでしたねィ、残念でさァ」

「……なんだと総悟オオ俺が叩き斬ってやらァ!」

酸素不足もなんのその、土方が刀を抜いて沖田に斬りかかった。

「……お腹すいた」

ワーワー騒がしくなった中で、志保のお腹がぐつと鳴った。

第34話 マジカルバナナ（後書き）

1カ月近く投稿できなくてごめんなさい！

実は先日からテスト期間でして、普段まったく勉強をやらない私はそのせいで忙しかったのです…。

本当は今もまだテスト中なんですけどね。

このあとにも体育祭、部活の大会と忙しいので投稿できる機会が減るだろうと思いますが、よろしく願いします。

第35話 大人の空色（前書き）

もう3日も過ぎちゃいましたが、神楽ちゃん。
誕生日おめでとございます！

文化の日が誕生日なんて毎年休みでいいですねえ。

第35話 大人の空色

静かな秋の午後。

真選組副長土方十四郎は心おだやかに刀の手入れをする。

殺風景な部屋には大好きな煙草のにおいがつまっていて、とても落ち着く。

鬼の副長たる土方も静かで平穏な生活に憧れたりするものだ。

そんなことは望むだけ無駄だと思っているが、それだけにこの刹那のひとときを大切にする。

しかし……

「副長オオオオ！」

ピキピキッ

そんなものは儚く一瞬で壊されるものである。

山崎、原田を筆頭に隊士たちが部屋になだれ込んできた。

「副長、聞いてください！」

「実は……」

ドガン

「テメーら、人の部屋に入る時は合図くらいしろ。いきなりだと準備が出来ねーじゃねエか」

土方は煙草をふかしながら説教口調で言った。

（いきなりバズーカぶつ放す奴に言われたくねーよ！！　っーか何の準備だよ）

黒焦げになった隊士たちの心は皆同じだったが、そんなことは口にした瞬間に抹殺されるので誰も怖くて言えない。

「で、用件は何だ？」

「はい、実は雨宮副隊長に関することなんですけど……」

先ほどの爆発でアフロになった山崎が口火を切る。

「雨宮の？　つーか何でアフロなんだお前」

「……。副隊長、携帯電話持ってないですよ。だから連絡取りにくくて仕方ないんですよ」

山崎は理不尽な土方に顔をひきつらせたが、気持ちを静めてやんわりと言った。

「そんなのお前らの足で探せばいいじゃねーか。つーか何でホントにアフロなんだよ。お前の髪はアフロになりやすい髪質なのか」

「うるせエエエー！！　アフロにしたのはお前だろーが！！」とはいえず山崎はすごすごと引き下がってしまう。

土方に足蹴にされる山崎に代わって原田が応戦する。

「だけどよオ、副長。数分の差が戦いの明暗を分けるってアンタい
つも言ってるじゃねえか」

「うるせエ。つーかなんでお前はアフロじゃねーんだ。お前も爆発
したらハゲからアフロに変われや」

「どんなムチャブリ!？」

「まあまあ。アフロになるよかいじゃないか、ハゲ田」

「誰がハゲ田だ!！」

無茶な要求をしてくる上司^{土方}とフォローにならないフォローをしてく
る山崎に、原田のツッコミが炸裂する。

「副長だつてケータイ使ってるじゃないですか。あれでも年頃の女
の子ですよ、志保ちゃんは」

「……………」

土方が心を入れ替えたかに見えたその時。

ドガン

本日2発目の爆発音が響いた。

副長室の襖が吹っ飛ぶ。

どうやら此度の爆発は外で起きたものようだ。

灰色の煙の中から人影が現れる。

バズーカをよっころしよと担ぎ直す声が聞こえた。

なんかこの光景、前話でも見たような…。

土方の頭の中で誰かの声がぼんやり聞こえたが、土方はそれを振り払った。

「あ、すみません副長」

現れたのは、たった今話題にのぼっていた志保だった。

「副隊長… いったい何やってるんだ？」

原田がケホケホ咳をしながら聞くと、志保は二カッと笑って軽い調

子で説明し始めた。

「実はですね、みなさん御存じの万事屋坂田銀時さんにセ。ンイレ。ン限定発売のショートケーキ、最後のひとつタッチの差で買われちゃったんです。で、イライラしてたら副長室の前を通りかかって、つい手が滑っちゃったんですよ」

どうもご迷惑おかけしましたー、と志保はおなざりに頭を下げた。

もはや怒る気力もなくした土方がため息をつきながら言った。

「雨宮…お前、最近総悟に似てきたな」

「え、ケータイ？」

志保が局長室に呼ばれ向うと、嬉しそうに笑った近藤と苦々しい表情の土方が待っていた。

「おう、志保！」

「……………」

まだ数日前のことを怒っているのだろう。

だが土方がこんな表情なのはもはや慣れきっていて、何も気にならない。

逆に土方がにつこり笑っていたりしたら吐き気がするほど気持ち悪すぎる。

明日地球は滅びるだろう。

「で、何の用ですか？」

志保がそっけなく聞くと、近藤はさらに笑顔を深め、土方は逆にますます不機嫌になった。

「ん！」

「なんですか、これ？」

「ケータイだよ、ケータイ！」

土方がチツと舌打ちした後には叫んだ。

近藤が差し出したそれは、空色をした手のひらに収まりきるくらいの小さな携帯電話だった。

「そんなことは分かってますよ。なんで私にこれを渡すんですか？」

「隊士達からお前と連絡がとりにくくて仕方ねえと苦情が来た。不本意だがお前も携帯くらい使えるようにしとけ」

「……………」

初めて手にしたケータイは、ほんのちょっぴり重くて大人っぽい。

「隊長ー、ケータイの使い方教えて下さい」

志保がひよっこり沖田の部屋に顔を出すと、沖田は畳に例の趣味の悪いアイマスクをつけて寝っ転がっていた。

沖田はアイマスクをずり上げて欠伸交じりに言った。

「あ？ お前そんなことも知らねーのかイ」

「だって副長に説明もなしにいきなり渡されたんですもん」

沖田はぶつぶつ言いながらも基本の操作を志保に教えてくれた。

最後に沖田は志保のケータイを取り上げ、何かいじった。

「やっぱりあのムツツリ野郎、自分のメアドと番号登録済みでさあ。ま、は行よりあ行の俺の方が早く来るからいいけどね」

そうけだるげに言うと志保を自分の部屋に一人残して出て行ってしまった。

なれない手際で開いたアドレス帳には、沖田のメールアドレスと携帯番号が登録してあった。

志保は沖田のように寝っ転がってつぶやいた。

「……………今回私出番少ないですか」

後日、志保のケータイのアドレス帳は真選組隊士たちをはじめ、いろいろな人たちのアドレスが登録されたそうなの。

第35話 大人の空色（後書き）

ちなみに銀さん達は貧しすぎてケータイ持ってなかったんで、万事屋の電話番号を登録しました。笑

次章予告

地面に流れる真っ赤な血。

それに黒や茶色の美しい髪の毛の残骸。

そして、左目を失った少女達。

それが今江戸で多発している事件の現場に決まって残されているものだった。

「この事件の手口がな…酷いもんだよ。年頃の町娘達を誘拐して、髪をバッサリ切って左目をえぐりとっちまうんだ。でも、決して命は奪わないんだとよ」

街で噂にのぼるある怪しげな名前――。

「スノードロップ？」

少女は許せなかった。

何の罪のない市民を傷つける犯人を。

それを止めることのできない無力な自分を。

だから
.....

「潜入捜査の許可をお願いします」

「お前の好きにしたらいい。やってみろ」

しかし、その先で少女が見つけたものは――。

「俺は許せないんだよ…妹を苦しめた奴らを!!」

「あなたが流してきた血は、私が受け継ぎます…」

「お前を失いたくなんか、なかった……」

少女が見つけた真実とは？

「スノードロップ篇」次話より更新スタート

第36話 恐怖（前書き）

今回血などの痛々しい表現がございます。

苦手な方はご遠慮ください。

第36話 恐怖

「はつくしょん！」

特大のくしゃみがシンとした部屋に響いた。

11月に入って、めっきり寒さが増してきた。

真選組の隊服にもコートの用意がされ始めている。

チーンと鼻をかんでいると、正座した膝の上に何か軽くてふわふわしたものが飛びのってきた。

「紅葉」

真選組、もとい志保のペットの紅葉だ。

真っ白でふわふわな毛並みに、鮮やかな紅い目が特徴のネコ。

志保が書類整理などの机仕事に追われ疲れているとき、気まぐれにやってきて志保のことを癒してくれる。

「……………」

紅葉の手触りのよい毛並みを無意識に撫でながら、志保は物思いにふけっている。

「ニャーア…」

紅葉がひと鳴きしたが、志保は反応することなくただひたすらぼんやりとしているだけだった。

「これで6件目か」

土方が暗闇の中で苦々しげに舌打ちしながらつぶやいた。

最近江戸の街で若い町娘ばかりが襲われる事件が多数発生していた。

志保はたまたま事件が起るとき他の攘夷浪士のヤマの指揮をとっていてまだ実際の現場を見てはいなかったのだが、松平や近藤から聞くその有様は酷いものであった。

「この事件の手口だがな…酷いもんだよ。年頃の町娘達を誘拐して、髪をバツサリ切って、左目をえぐりとつちまうんだ。でも、決して命は奪わないんだとよ」

そして実際に――それはあまりにも残酷なものだった。

若い娘が目から大量に出血している――。

そのような通報を受けていちばん最初に駆け付けたのが沖田と志保の率いる1番隊だった。

連絡された場所に急ぐと、人だかりが出来ていた。

人垣を押しつけて真ん中に行くと、壁にもたれかかりぐったりした志保と同じ年ごろの少女がいた。

荒い息使いで、押さえた左目からは血が溢れ出しそれがどんどん流れて地面に血だまりをつくっていた。

そのすぐわきには、無残に切られた長く美しい髪――。

「！！」

志保はその瞬間、血だまりから目が離せなくなった。

全身から汗が噴き出す。

「雨宮、どいてろイ！」

沖田が志保を押しつけた。

少女に駆け寄って応急処置を施し、救急車の手配や土方への連絡などを指示した。

その間志保はずっと震えながらその場から動けなかった。

少女が1番隊の隊士に付き添われ救急車で去った後、沖田に声をかけられてやっと我に返った。

「雨宮、大丈夫かい？」

「…すみません」

その後駆け付けた土方と2番隊に任せて、志保は沖田に付き添われ

先に帰ることにした。

「副長、被害者の意識が回復したそうです」

志保達が帰ってすぐ、山崎が土方の元へやってきた。

「そうか」

「彼女は夜９時半ごろかぶき町をひとりで歩いていましたそうです。家に帰る近道として路地裏に入った直後何者かに襲われたと言っています。犯人の顔は見ていないそうです」

「そうか…、分かった」

「あと副長、もうひとつ気になる情報が」

「なんだ」

山崎が声をひそめてつぶやいた。

「救急隊員の話だと、ぶつぶつうわ言のように同じ言葉を繰り返していたそうです」

『スノードロップ』と」

「スノードロップ？」

剣のこと以外何も知らない土方はその単語自体聞いたことがなかった。

「分かった。その『スノードロップ』とやらについてももう少し詳しく調べておけ」

山崎も去ったあと、土方は煙草に火をつけながらため息をもらした。

—— 今回のヤマ、結構ヤバいな……。

志保は沖田の部屋で正座しちょこんと静かに待っていた。

部屋の主は今は志保をひとり残しどこかへ行ってしまった。

沖田はわざとひとりになる時間をくれたのかもしれない。

それは志保にとってとてもありがたかった。

（私…あのとき体が動かなかった）

真選組に入隊してから今まで、何度か命をかけた死闘を潜り抜けてきたこともあった。

血なんていくらでも見慣れているはずだった。

なのに――……。

あの何の罪のない傷つけられた少女から流れ出た目がくらむほどの

紅い血が、

怖くて。

怖くて。

普段虚勢を張っていても、やっぱり自覚してしまった。

私は弱い――。

そのとき、襖がガラリと開いてマグカップをふたつ持った沖田が現れた。

志保の正面に座り、マグカップを志保に手渡す。

「…これは？」

「ホットミルクでイ。体があつたまるゼイ」

マグカップの中身の湯気を出した白い飲み物は、ひと口ぐんと飲

むと体がすみずみまでぽかぽかあたたかくなった。

「一体どうしたってんでさア」

「……………」

志保はうすい桃色のマグカップをぎゅっと握りしめて、ぽつりと言った。

「分かりません…。体が痺れて動かなくて、ガタガタ震えて…」

怖かったです」

志保が誰かの前で「恐怖」という感情をあらわにしたのは初めてだったかもしれない。

「……………」

「人を斬ったことだって、数え切れないほどありました。だけど、生きながらに体にも心にもあんなに深い傷を負っていることが、どうしようもなく怖かったんです」

こんなに本音を言えるのは、なんでなんだろう。

私が少しは素直になれたからなのかな。

「土方さんに言って、捜査から外してもらえばいい。少しの間くらい休みをもらうことだって出来まさら」

沖田が気遣うように言った。

「ありがとうございます」

だが、志保の心は決まっていた。

沖田に話を聞いてもらって心が洗われ、本当の自分の気持ちを見ることが出来た。

「本当に怖いんです。でもそれと同じくらい、許せないんです」

沖田は何が、とは聞かなかった。

志保の真剣な目がすべてを語っていた。

沖田にはそれが読み取れた。

罪のない少女達を傷つける犯人。

それを止めることのできない自分。

「だから……」

「失礼します」

志保は静かに局長室の襖を開けた。

中にはあらかじめ訪問を伝えておいたので近藤と土方の姿もあった。

「なんだ、用ってのは」

土方がいくぶんか厳しくない声で聞いた。

「はい。今回の連続少女誘拐事件のことなんですけれど――

潜入捜査をお願いします」

第36話 恐怖（後書き）

なんだか最初予定していた話よりだいぶ違う感じになりました…。

第37話 女顔の隊士（前書き）

短い…！

2000文字切ったのは本当に久々です。
あんまり話が進んでないし…。

第37話 女顔の隊士

「潜入捜査をお願いします」

「そんな、無茶だ！」

近藤がバンと畳みに手を叩きつけながら叫んだ。

「……………」

そんな近藤と対照的に土方はこのことを予測していたかのように静かだった。

「被害者たちは私と同じ年頃です。私がおとりになれば上手くいくと思います」

「志保、そんな簡単に考えちゃいかん。お前が思ってるほどこの事件は甘くはないぞ」

近藤が厳しく諭す。

だが志保の決意は固かった。

「分かっています」

志保の真剣な瞳を見てそれまで黙っていた土方が口を開いた。

「本気か」

「はい」

少しの間、沈黙が続いた。

土方はふと鋭い眼差しをゆるめて、ほんの少しだけ普段の土方からは考えられないような笑みをのぞかせた。

「お前の好きにしたらいい。やってみろ」

「！」

「オイ、トシ……」

近藤はなおも反論を続けようとしたが、志保の決然とした表情を見てあきらめた。

「土方さんが許すなんざめずらしいですね。明日は雨かもしれねエや」

副長室に戻った土方をせんべいをバリバリむさぼる沖田が待ち受けていた。

ちやかしたような調子で話しかける。

「…今日も雨なんだけど。土方さんがめずらしいことしなくても明日も雨の予報なんだけど。つか勝手に人の部屋に入って人のせんべいを食うな」

実際縁側から広がる外の景色には雨が降りそそいでいた。

「細かいことは考えないようにしましょーや」

沖田は首をすくめながら言った。

「そついうお前はどつなんだ」

土方は沖田の向かい側に腰をおろしながら問い返した。

「何がです？」

「雨宮の潜入捜査のことだ。お前にも話したんだろう」

沖田はええ、と頷いた。

「今ところ真選組はこの事件を止められずにいる。けど被害者と同じ年頃のアイツなら――できるんじゃないかと、思ったんでイ」

「…お前にしたらちゃんと考えてたんだな」

土方は沖田をめずらしいものを見るかのような視線で見た。

「だがどちらにせよ雨宮ひとりで潜入捜査に行かせるのは無理がある」

「ああ、それは俺も思ってた。普段なら山崎あたりを適当に行かせればいいが今回はそうもいかねーからねイ」

「女装しておとりになるのが妥当だからな」

「女顔の隊士がいたらいいんですけどねイ」

沖田と一緒に一瞬考え込んだ土方だったが、直後ハッと意思つき顔を上げた。

「いるじゃねエか」

「？」

土方は沖田の顔をじーっと見つめながらつぶやいた。

――女顔の隊士……。

「いいか、雨宮。お前は普通の町娘として被害がよく起こるかぶき

町を歩いていたらいい。そのときは真選組1番隊副隊長ということ
は忘れるんだ」

「分かりました」

白地にピンクの小花が飛んだ可愛らしい着物を着た志保は土方のの
アドバイスに大きく頷いた。

着物を着たのは久しぶりなのでなんだか自分ではないようだ。

これから潜入捜査を実行する。

「志保、気をつけてなあ」

土方の隣りで取り乱して言う近藤は早くも半べそだ。

「局長、大丈夫ですから少し落ち着いてください」

志保は苦笑いで言った。

「それと、お前だけじゃ不安だからもうひとり同行させることにし
た」

土方が付け加えた。

「え？ 一体誰――」

そのとき、襖がガラツと開いてニヤニヤ顔の隊士達と、その中心に紫紺の綺麗な着物を着こなした美しい顔立ちの女の子がムツツリと立っていた。

「コイツだ」

土方が笑いをこらえながら言った。

「うるせー土方コノヤロー」

その可愛らしい顔立ちからは考えられないような言葉が飛び出た。

「隊長！？」

その美少女の正体はなんと沖田だった。

志保は沖田が女装するなんて微塵も考えていなかった。

まあ、確かにすごく似合うけど…。

沖田はぽそつとつぶやいた。

「お前だけじゃ心配だからねィ」

第37話 女顔の隊士（後書き）

なんだか最近私の書く近藤さんキメキメで、土方との台詞の区別が
ついてない気が…。

第38話 潜入≠成功（前書き）

今回の副題意味不明…！！

仕方ないんです、どうしても見つからなかったから…（＞O＜）

第38話 潜入≠成功

『いいか。志保、総悟。とにかく自分の身を最優先しろよ』

「はいはい、分かってますから」

潜入捜査にあたって、志保と沖田はそれぞれ同じ小型のトランシーバーを渡された。

これでいつでも近藤と会話ができる。

「ウザいんで1回切りまさア。必要になったらこっちから呼びかけるんで」

沖田は最後にそう言って本当に電源を切ってしまった。

志保と沖田はかぶき町の街をただひたすらに歩いていた。

沖田は先ほどの女の子の格好のままだ。

この美少女が沖田だと思つとつい噴き出しそうになるがその度にそれだけで殺しそうな視線をよこしてくるのでなんとかこらえた。

正直誰が見ても男の子だとは分からないだろう。

女の子同士が仲良く買い物でもしているように見えるのだろうか。

「オイ雨宮、お前ちよつくらコーヒー買ってこい。お前の金でな」

……やっぱり撤回する。

女の子同士だったらこんな主人と下僕のようなやりとりなんかするわけないだろう。

仕方なくふたり分のコーヒーを買ってこようと自動販売機へ歩み出した時、聞き慣れた声がふいに志保の耳に届いた。

「あ、あれ志保さんじゃないですか？」

「あ？」

「本当ネ！ 全速力でここからどっか行くヨロシ！」

……いいところで来たな。

万事屋トリオを見てそんな風に思ったのは初めてだろう。

逆に沖田があり得ないほどの速さでこっちに向かってきて、志保の腕を掴み銀時達の反対方向へ逃げようとした。

だが銀時がその行く手を阻んだ。

「よオ志保。そんな風に逃げなくてもいいじゃねーか」

「いや、逃げてるのは私じゃなくてこの人のほうなんですけどね」

志保はニヤニヤしながら言った。

なんとか話の矛先を沖田に向けたい。

「ん、この可愛い子志保の友達か？」

沖田は観念したようだ。

はあとため息をついていつものけだるげな表情に戻った。

「旦那ア、男に『可愛い子』なんざ野暮ですぜ」

「え、その口調…まさか沖田さん!？」

否定しなかったのを見て神楽がブーツと大げさに嘖き出した。

「ダーーツハツハツハ!! 何ネお前そのカッコは!」

「うるせエチャイナ。お前のその顔面に比べたらずいぶんマシなもんだぜ」

「なんだとコルア!」

またもや犬猿の中のふたりはケンカをし始めてしまった。

志保も銀時も新八ももう慣れたものでふたりのことは放っておく。

「ったくめんどくせーなア、俺達ア行くぜ。神楽にやいつものパチ

ンコ屋にいるって言っといてくれや」

「すみません志保さん、お願いします」

ふたりはそう言つと志保が返事をする間もなくすたこら行つてしまつた。

「ハア―」

志保はため息をつくと沖田と神楽のケン力を止めようとふたりのほうへ向かつた。

しかし。

いきなり布のようなもので口をふさがれた。

「――」

抵抗して刀に手を伸ばすがどんどん力が失われていく。

沖田と神楽はケンカに夢中になっていて志保が危ない状況にあるのに気が付いていない。

（しまった、眠り薬か……！）

そう思った次の瞬間、志保は気を失った。

「う……」

頭の片隅ににぶい痛みを感じて、志保は目を覚ました。

しばらく薄暗い部屋の中でぼんやりとしていたが、志保はふと自分が何者かに襲われたことを思い出した。

どうやら鉄の柱のようなものに縛り付けられている。

周りを見回すと、どうやら人気のない郊外のようなのだ。

部屋の中に明りはなく真っ暗だったが、だんだん目が慣れてくると平気になった。

この暗さからいって、もう夜だ。

あと、潮の香りと波の音から、海の近く。

それに風がサワサワと木を揺らす音も聞こえるから、森の近くか中だろうと推測できる。

「…やっと目が覚めたかい」

ハッとして声の方に目をやると、そこには志保と同じく身動きの取れない沖田の姿があった。

「隊長！」

「チャイナとケンカしていたらお前が怪しい奴に襲われているのが見えて…だがそのときには俺とチャイナも同じ目にあっていたんださア」

「え、チャイナ娘さんですか!？」

沖田の視線を辿ると神楽は志保と同じ柱に縛り付けられて眠っていた。

まだ睡眠薬の効果が切れていないのだろう。

無理もない。

神楽はあんなに強いように見えてもまだ幼い子供なのだ。

「私達、きつとあの一味に捕まったんでしょうね…」

「ああ、そーいう意味では作戦成功とも言えるが……」

俺達、結構ヤバいかもしれねエ」

そのとき、ひと組の足音が響いてきた。

暗闇の中から、ひとつの男が現れる。

「……！」

「こんばんは、哀れな少女たちよ」

整った顔立ち。

美しい黒髪。

同じく漆黒のような瞳。

その人物は、犯罪グループの長としてはあまりにも不似合いな男だった。

第38話 潜入≠成功（後書き）

ご感想、心からお待ちしております！

いや、ホントに。

第39話 怒り

「新ハイ、神楽はまだかア？」

「え？ そっいえば遅いですね…っっていうかもう夜の8時だろーが
アアア！！！」

志保達がかかなりヤバい状況にあるその頃――銀時達はパ
チンコ屋にいた。

銀時が玉をはじいて、その傍らで新八が雑用をこなす。

そんな万事屋にいる時と大して変わらないスタイルだ。

「何で僕らこんなにパチンコに夢中になって神楽ちゃんたちのこと
忘れてたんだアアア！？」

「新八、お前ちょっと見てこい」

「言ってる場合か！！ もうこんな時間なんだしふたりで行きますよ。今負け続けてるんだからちようどいいでしょ」

うなだれたまま新八に引つ張られていく銀時。

確かに新八の言うとおりだった。

「……やっぱり誰もいない」

ふたりは志保達と出会った場所に戻ってきたが、そこには人っ子一人いなかった。

こんな時間までほったらかしにしてたんだから当たり前と言ったら当たり前なのだが。

冬の夜なので暗くなるのが早い。

午後8時となればもう真っ暗。

雲に隠れた月の明りと街灯しか頼れる光はない。

「神楽ちゃん？ 志保さん、沖田さん？」

新八が大声で周りに呼びかけるが返事はない。

「どこ行っちゃったんでしょかね… 銀さん」

そのとき、銀時は地面に何か落ちているのに気がついた。

それは、めずらしく女らしい格好をしていた志保がつけていた簪だった。

「……………新八」

今も3人の名前を大声で呼び続けている新八に銀時は静かに告げた。

「真選組に行くぞ」

真選組の屯所に着くと、門番の制止も聞かず銀時はずんずんと中へ進んでいく。

あとから新八も小走りで続く。

「あれ、旦那!? 何してんですか!」

「山崎さん!」

なにやら書類をいっぱい持った山崎と出くわした。

「オイ、局長はどこだ」

「え、局長ですか? あの人は今ちよつと…」

躊躇って口を割らない山崎に、銀時が動いた。

ギシギシッ

「「！！」」

新八が驚いて見ると、銀時が書類を抱えた山崎の腕をキツく握りしめていた。

山崎の手から書類がバサバサと音をたててこぼれる。

「お前なんかに構ってる暇はねーんだよ。さっさと局長を出せつてんだ」

その目は、新八でさえもゾクツと悪寒を感じるほど鋭くつり上がっていた。

「は…はい」

すっかりビビった山崎は目の前の襖を指さした。

どうやら近藤は意外と近くにいたらしい。

銀時は山崎をぽいつと脇に放って襖を開け放った。

近藤は部屋の中をただただ行ったり来たりしていた。

沖田が電源を一回切ると言ってそれを実行してから早4時間半。

あまりにも時間が立ち過ぎていた。

これで心配しない方がおかしい。

「近藤さん、ちったア落ちつけ。もしかしたらあんまり犯人が現れないもんだからどっかで夕飯でも食ってるのかもしれない」

そう近藤をいさめる土方も目に見えてイライラしている。

今朝捨ててきたばかりなのに灰皿には吸い終わった煙草が溢れてい

る。

「遅い…遅すぎる！ やっぱり何か巻き込まれたんだよ！」

「巻き込まれたならいいことだ。それが狙いだっただんからな」

口ではそう言いながらも土方も心の中では不安でいっぱいだった。

やはりトランシーバーを使えないほどに危険な状況なのでは……。

パン！

静寂が広がっている部屋に乾いた音が響いた。

その方向を見ると、襖を両手で開け放った土方の天敵――万事屋、坂田銀時、それに志村新八がいた。

「万事屋！」

「なんだデメーら。こっちは忙しいんだよ、失せろ」

いつもならここで「あー？ 忙しいつたって来年のバカンスの打ち合わせとかだろコルア！」ととんでもない言いがかりをつけてメンチを切ってくるのだが、今回は無表情でじっと土方を見てくるだけだ。

いや、無表情の中に――不安、焦燥、そして怒りが含まれていた。

こんな銀時は、いまだかつて見たことが無かった。

長い沈黙の後に、銀時が低くつぶやいた。

「志保と、沖田がいなくなった」

「――」

近藤と土方の顔に衝撃が走る。

「うちの神楽もだ。お前ら、志保達を任務かなんかに出してたのか」

銀時が近藤に問いかけた。

近藤はいつもの勢いをすっかりなくした様子で答えた。

「最近少女連続誘拐事件があっただろう。その潜入捜査に——
志保と、女装させた総悟を出した」

ふたたび、沈黙。

「間違いねエな。3人は——捕えられてしまったんだ」

「土方さん、その事件って左目をえぐりとられ、髪を切られてしま
うっていう、あの事件でしょう?」

「そうだ」

「神楽ちゃんが——志保さんと沖田さんが、危ない!」

新八が叫んだ。

銀時は近藤と土方に向き直って沈痛な表情で語りだした。

「俺達は志保と沖田くんに会ったんだ。だが3人をほったらかしてさっさとパチンコに行っちゃった。今回のことは俺の責任でもある――すまなかった」

銀時がゆっくりと頭を下げた。

「……………」

土方は少し啞然としていた。

近藤もそうだった。

あの頑固で無愛想な万事屋が、人に頭を下げるなんて……。

今分かった。

銀時の表情に浮かんでいた怒りは、土方達に向けられたものじゃなく
て…

自分へのものだったのだ。

第40話 スノードロップの花言葉（前書き）

なんで無駄に文字数が多くて話が進まないんだろう…。

神楽に対する志保の言葉遣いが難しい！

第40話 スノードロップの花言葉

「初めてお目にかかる。私が『スノードロップ』のリーダー……あわゆき淡雪だ」

なめらかな口調では淡雪と名乗る男はつぶやいた。

「……あなたがこの一連の事件の犯人ですか」

志保は低い声でつぶやいた。

一瞬見惚れてしまった美しい黒い髪と瞳、微笑んだ表情――

だがそのようなものから今は妖しく輝くような殺気がにじみ出ていた。

沖田がギリギリと歯ぎしりしている音が聞こえた。

マズい、この人案外短気だから……。

犯人を前にして自分は身動きとれないなんて状況、この男沖田には到底我慢できないだろう。

「テメエ、一体なんでこんな真似をするんでイ!!」

「ちよっ…」

当たり前のように普段の口調が沖田の口から飛び出し志保は慌てて止めようとした。

「それはのちのち知ることになるだろう。真選組1番隊長長沖田総悟くん」

「!!」

すでに、気付かれていた。

この様子だと、もうずいぶん前から。

完璧に沖田を女の子に変装させたこともどうやら無意味だったらし

い。

「そしてそちらのお嬢さんは1番隊副隊長の雨宮志保さんだね」

「…名前を覚えて下さってるなんて光栄ですね」

「いやいや、君は有名だよ。真選組唯一の女隊士——
隊長さんに続いて先陣を走る剣豪。まったくもって残念だ。そんな
君が……」

剣を歩む道を失うことになるのだから」

銀時が頭を下げたまま、永遠の時間が流れたかのようにだった。

「万事屋……」

土方が何か言おうと口を開いた。

だが口がカラカラに乾いていて何も言えなかった。

だが言葉を発する必要はなかった。

「副長オオオオ!! 大変です!!」

山崎が開きっぱなしになっていた襖から敷居をまたいで転がり込んできた。

「なんだ、騒がしいな」

山崎は相当焦っているようだった。

どこからか全力疾走してきたのか、全身汗びっしょりで呼吸も荒い。

「山崎、一体どうした」

「局長、副長…『スノードロップ』に関する資料がいくつか見つかりました!!」

「「「!!」」」

「見せてみる!」

近藤が叫んだ。

山崎は即座に机の上に資料を広げた。

すぐさま土方と近藤が机を囲む。

銀時と同じことをしたが、土方はこの時ばかりは何も言わない。

「本当に少ないんですが、倉庫の奥底から『スノードロップ』を説明する資料が出てきたんです」

「『スノードロップ』とは攘夷戦争末期の頃に立ち上がった攘夷グループです。強い人材がいるわけでもなくその名はあまり知られていませんでした。どうやら自然消滅したようです。ただ…」

山崎は言葉を詰ませた。

土方が促す。

「…どんな情報でもいい。言え」

「ここ最近になってまた同じ名のグループが立ち上がりました。長

は当時のグループの長の息子のようです」

「親子2代か…厄介だな」

銀時が舌打ちしながらつぶやいた。

「あと、もうひとつ厄介そうなものが。スノードロップというのは実は花の名前だそうです。そして花言葉は

……

淡雪のさらりとした、けれど重い一言に沈黙が流れた。

「君達も、あそこの女の子達も、みんな同じようにしてあげよう。
どうなるかは、もう知っているだろうね」

そのとき、隅のほうからすすり泣きが聞こえてきた。

自分たち以外にも今夜犠牲になるかもしれない少女がいることを、
今知った。

志保と同じ、幾数もの犠牲者たちと同じ年頃の、可愛らしい顔が青
ざめた少女がふたりいた。

「うっ…」

志保の隣りからつめき声が小さく聞こえた。

「うーん、あれ？　ここどこアルネ？」

どうやらとうとう神楽が目覚めてしまったようだ。

「そのオレンジ色の髪少女にも状況を説明してあげるといい」

淡雪がそこに元から用意されていた椅子にゆったり腰掛けながら言った。

「チャイナさん」

志保が声をかけると神楽が眉をひそめてこつちを見た。

「お前…これは何ネ。サドも一緒になってグルアルか！」

「バカチャイナ。そんな甘ったれた状況に見えるかコレが！」

沖田が怒鳴った。

神楽は沖田を睨んでから志保にその視線を移した。

「もしかして…これ、あの女の子達が襲われてる事件アルか？」

この少女は何も分かってないようで意外と鋭い。

こんな年端もいかない少女に真実を言ってもよいものか…。

「雨宮」

沖田が落ちついた声音で言った。

「そいつはそんなにヤワでもねエ。大丈夫でさア」

いつもケンカしてるだけあって、結構この子のこと分かってるんだな、隊長。

志保はそう心の中でつぶやくと神楽の目を真正面からじっと見つめた。

「そう。このまま何もしなければ私達は髪の毛を切られ左目を失ってしまふ…。あなたも、協力してくれますか？」

神楽は静かな表情で、こくつと頷いた。

志保は相変わらず余裕の表情で構えている淡雪に向き直った。

「私達やこの少女達はあなたなんかには傷つけられない。――
――私達は必ず、無傷でここを出ます」

真剣な志保の声色と表情に、淡雪はニヤツと妖しい笑みを浮かべた。

スノードロップの花言葉。

『あなたの死が見たい』。

第40話 スノードロップの花言葉（後書き）

今日関ジャニ∞の番組で安田さんが銀さんのコスプレしました！

その番組のお題でタッチの「もしカッちゃんが生きてたら南はタッチちゃんとカッちゃんどっちを選ぶ？」というのがありました。

断然タッチちゃんでしょう！！

南にはタッチちゃんしかいません。（キッパリ）

第41話 オレンジの髪と紅い炎（前書き）

今回沖田がなんか変です。

キャラ違いすぎます。

第41話 オレンジの髪と紅い炎

「ほう、ここから無傷で出てみせると…捕えられた君たちに何が出るのかな？」

淡雪は天気を訊ねるような口調で問いかけた。

確かに、今のこの状態のままでは抜け出すことなんて、不可能だ。

実際、口では虚勢を張っていたが方法を思いついていたわけではないのだ。

それは反対側で縛り付けられている沖田も同じだった。

（何か方法は……）

そのとき、沖田にしか届かないくらいかすかなザーツという機械音が流れた。

「!?!」

トランシーバーがまだ、生きていた！

きつと何らかの拍子に電源が入ったのだろう。

沖田は驚きを思わず顔に出してしまっただが、志保のほうにずっと視線を向けていた淡雪には気付かれずにすんだ。

だが軽率に言葉を発すれば勘付かれてしまう。

とりあえず沖田はなんとかこのことを志保に伝えようと視線を送った。

（雨宮、こっち向けイ…！！）

その頃真選組の屯所でもトランシーバーが繋がったことに気付いていた。

「そ…！！」

大声をあげようとした近藤を土方はあわてて止めた。

「近藤さん、まだ何も言うな。コイツの存在を知られちゃったら今度こそオシマイだ。向こうが何か言うのを待て」

「あ、ああ…」

この時間が、何よりじれったかった。

そう感じているのは、なにも近藤だけではない。

「…あなたは臆病者です」

志保が静かにつぶやいた言葉を淡雪は聞き逃さなかった。

「なんだって？」

志保は淡雪を睨みながら今度はハッキリとした口調で言った。

「こんな人気のない森の付近の暗い建物まで連れてきて、密閉して

…街で堂々と何かをする勇気がないんです、あなたは」

「……………」

まったく荒立つことのない志保と淡雪のやりとりを見ながら沖田はハッと気付いた。

（…そうかい！ コイツはこの野郎に気付かれないように俺達の居場所を伝えようとしている）

森。

人気のない建物。

どちらも居場所のヒントになる。

志保は、トランシーバーがつかっていることに気づくことが出来ていたのだ。

『あなたなんかその海に沈んでしまえばいい』

志保の言葉は真選組屯所にも届いていた。

みんなが耳を澄ます中、土方の頭の中に何かがひらめいた。

「オイ山崎、今すぐ1番隊から5番隊まで引き連れてパトカー出せ」
土方がトランシーバーから身を離し山崎に命じた。

「副長、志保ちゃんと隊長の居場所が分かったんですか！」

「ああ、アイツ…上手くやりやがってくれたな。行くぞ」

山崎が駆けだし土方がよく事情を飲み込めていない近藤を連れて部屋を出ようとした時、今まで黙っていた銀時がその背中に声をかけた。

「オイ、当然俺達もついていくぞ」

その隣りで新八も力のこもった目で頷いている。

「一般市民は引つこんでろ…」と言ってエが、そんなこと言っただって
お前らは引かねエだろうな」

「当たり前だ」

本当に、そうだ。

なんたって、神楽もその中に捕えられているのだから。

「仕方ねエ、俺達と同じパトカーに乗れ」

「君に、何が分かるんだ」

「少なくとも、あなたのやってることは、ただ人を傷つけるだけということは分かってます」

思えば何も知らなかったのだ、志保は。

本当に、この男のことを何も。

だから、言えた。

それが良かったことなのかは、いくら時が立っても分からないまま。

「あなたには護りたいものは何もないんですか？」

そのとき、淡雪の手がピクツと震えた。

志保はそれに気付かず続けた。

「もしあつても、そんなんじゃ何も護れやしな——」

ドガアアアアン

突如破壊音が聞こえ、淡雪のいた場所に砂埃が立ち込める。

それが淡雪が起こしたものだとは理解するのに数秒かった。

「お前に…何が分かる」

今までとは言葉づかいも口調も違う声音が響いていた。

「お前らなんかに、俺の苦しみが分かるかアアア！！」

煙の中から現れた刀を握り締める彼は、先ほどの彼とは別人のように逆上してしまっていた。

「雨宮、チャイナ、気をつけろイ！」

すぐさま沖田の声が飛んできたが、気をつけるも何も動けないのだからどうしようもない。

「お前たちこそ無力だということを分からせてやる。お前達の目の前でこの少女を傷つけてな！！」

「キャアッ」

そう言う人質に取られていた少女のうちひとりを志保達の前まで引っ張ってきて、その顔に刀を近付けた。

少女は心底怯えていた。

全身がガタガタと震えている。

「う…た、助けて……」

「クツクツ……アーッハッハッハ！」

狂ったような笑い声を上げる淡雪の前に、志保達はただなす術もないままだった。

土方達はパトカーで江戸中を走り回っている最中だった。

志保のヒントを頼りに山崎がパソコンで場所を割り出そうとしているのだが、なかなか見つからない。

「オイまだ見つからねーのか山崎！」

「そんなこと言ったってこんな条件の場所そうそうありませんよ！」

「ごちゃごちゃ言ってるねーでさっさと探せ！」

「副長が話しかけてきたんじゃないですか！」

不毛なやりとりを聞きながら、運転をしていた原田が何気なく言った。

「こんなに探してるのにつつからねーのなら、江戸じゃないのかもしれねーなア……」

「……そう、それだ！」

「え？」

山崎がものすごい勢いでカタカタキーを叩き始めた。

「副長、見つけました！ 武蔵の月見公園です！」

「武蔵か、こっからそう遠くはねエ。原田、飛ばせ！……」

「あいよオ！」

パトカーは一段と速度を上げて夜の街を疾走した。

「ちょっと待つアル！」

緊張が張り詰めた中に神楽の声が響いた。

あと数センチで刃が少女の目に刺さるというところだった。

淡雪が視線をこちらに向けた。

少女はとりあえずホッと息をついた。

「その子を放すネ。私を代わりにやればいいアル」

「「!!」」

志保も沖田も仰天して神楽を見つめた。

「何言ってるんですかチャイナさん！」

「お前は黙ってるアル。大人しくしてればいいネ」

淡雪はニヤリと顔をゆがませた。

「お前はそこのふたりの仲間のような…いいだろう」

「仲間なんかじゃないネ。ただの腐れ縁アル」

淡雪が神楽を真ん中へ引っ張っていった。

そして頭のぼんぼりをむしり取り、髪の毛を躊躇なくバッサリと切った。

「…!!」

神楽のトレードマークだったオレンジの髪が…。

背中に少しかかるくらいの長さだった髪が、肩にかからないくらい短くなってしまった。

最初から目に行かなかったのは、じっくり志保たちを苦しませてからと思ったのだろう。

神楽は床にハラハラと落ちた自分の髪を見て、ギョツと目をつぶった。

そのとき、ミシミシという音が志保の耳に入ってきた。

その方向を見ると、沖田がいた。

全身に怒りをみなぎらせた、見るものを怯えさせる沖田の姿が。

「たい、ちょ…」

ミシミシという音は、沖田が自身につながっている仕掛けを引きち

ぎろつとしている音だった。

「そんな真似はやめたほうがいい。それは特殊な仕掛けでね。自分の腕や足に釘が埋まつてるのさ。解除しないはずそうとするともげるぞ」

「隊長、やめてください!!」

「サド…」

沖田の耳には、もう何も届いてはいなかった。

「うらああああ!!」

ブチブチッという音がして、沖田の体から仕掛けが外れた。

その瞬間煙が巻き起こった。

そして志保は自分の仕掛けが外れるのを感じた。

沖田がどさくさに紛れて外してくれたのだ。

煙が途切れて、沖田の姿がまた現れる。

その体からはいたるところから血が吹き出していた。

だが、沖田はそんなことを感じさせないほどの気迫を出し、わきに置かれていた刀を抜いた。

「さあ、俺を怒らせたからにはどうなるか分かってんだろーなア、淡雪さんよ」

その目には、赤い炎が宿っていた。

第41話 オレンジの髪と紅い炎（後書き）

ご拝読ありがとうございます。

とりあえず私は全国の神楽ファンの皆さまに土下座を。

申し訳ありませエエん！！

神楽ちゃんの髪を切っちゃってごめんなさアアアい！！

言い訳をさせてもらいますと、沖田の怒りに火をつけるきっかけがなかったんです。

いきなり目に行っても…と思ひまして。

本当に私のバカアアア！！

第42話 後悔（前書き）

どうしてこうも話がすすまないんだろう。

実は最初スノードロップ篇は5話の予定だったんですよ。
でも今は10話で収まりきるかどうか…。笑

第42話 後悔

「さあ、俺を怒らせたからにはどうなるか分かってんだろーなア、
淡雪さんよ」

沖田の何もかもを吹き飛ばしてしまうような気迫に、淡雪も刀を構えた。

淡雪と沖田の間に動くことを許されないような緊張が流れる。

ふたりは同時に足を踏み出した。

ガキイイイン

2本の刀が空中で音をたててぶつかった。

見えないほどの速さで沖田の手が、足が、刀が動いている。

沖田の手によって解放された志保は床に座り込んでいる神楽の元に駆け寄った。

「大丈夫ですか？ チャイナさん」

神楽は少しぼんやりとしていたが、すぐさま表情を引き締めた。

肩に置かれた志保の手を払いのけてしつかりとした口調で言った。

「フン、平気ネ」

こんな状況の中、望まないのに髪が短くなってしまったわりには、しゃんとしていた。

外傷も無いし、自分の身を護ることくらいなら最低限出来そうだ。

そのことを確認して、志保はすばやく沖田と淡雪の戦いに目を戻した。

ふたりはちょうどひと際強く刀を交えたあと、いったん距離を置いて呼吸を落ち着かせているところだった。

だが、淡雪の目的はそれだけではなかった。

彼はニヤリと妖しい笑みを浮かべると、空いている右手を口元に持っていた。

志保たちが何をするのだろうといぶかしんでいると、淡雪は力強く指笛を吹き鳴らした。

全身をゾクリと波立たせるような、不思議な音とメロディー。

その音は、天井や壁を伝ってずっと遠くまで響き渡った。

「何アルか、この音…」

神楽がつぶやいた直後、闇の中から数え切れないほどの足音が聞こえてきた。

敵だ。

「お前のような童と戦って負けることは絶対はない。だが今は時間が惜しいからな——紹介しよう。私の忠実な100人の部下だよ」

たちまち、淡雪の背後が幾数もの男たちで埋め尽くされた。

「そんなザコどもに、俺たちが倒せるかねィ」

その言葉とともに、志保と神楽は先頭の態勢を取りながら沖田の両脇に並んだ。

「あなたは意外と部下を信頼してるみたいですね。だけど忘れてもらっちゃこまります。私たちにも――」

そのとき、志保たちの後ろの壁が破壊音と共に吹き飛んだ。

「ご用改めである、真選組のお通りだアアア――！」

近藤を先頭に、土方が、山崎が、原田が――たくさんの隊士たちがいた。

銀時も、新八もいた。

「雨宮、総悟。テメーら帰ったら始末書じゃすまねエからなア!!」
土方が叫んだ。

「神楽アア、志保、無事かアア!?!」

「神楽ちゃアアアん!!」

銀時も、新八も叫んだ。

「頼れる仲間つてもんがあることを」

「どっからでもかかってくるアル」

たちまち人数は互角とはいかずとも、太刀打ちできるほどには増えた。

閉じられた空間の中に風が吹いたとき――誰もがいつ
せいに、刀を抜いた。

100人という人数はやっぱり多かった。

けれどそんなことを思わせないくらい、真選組の連中は団結していて、強さがあった。

「うらあああああー！」

次々と敵をなぎ倒していく。

だがやはり3ケタという人数は多くて、斬っても斬ってもなかなか人数は減らない。

志保がもう何人目か分からない敵を斬ったとき、後ろから女の子たちの悲鳴があがった。

人質となっていた少女に、1本の刃が向いていた。

志保はその男を後ろからぶつた斬った。

倒れ行く男の後ろから人質だった少女がゆっくり現れる。

「平気ですか？ もう大丈夫…」

志保は言葉につまった。

少女はきれいな顔を青ざめさせ、カタカタ細かく震えていた。

「いやっ」

差し出した手を振り払われた。

志保に、怯えていた。

「あ…」

志保のほうもとまどってしまった。

その隙を――つかれてしまったのだ。

殺意をみなぎらせた敵が後ろから斬りかかってきたのに気付いたのは、少女が目をさらに見開いてからだった。

「……!」

(斬られる…!)

――ザアアン

けれどその音が耳に飛び込んできたのに、痛みはどこにもなかった。

恐る恐る振り返る。

そこには、何よりいちばん見たくない光景があった。

「た…隊長…!!」

志保を護るように立った沖田の背中から、息をのむほどに鮮やかな血が吹き出ていた。

その血がどんどんあふれて、地面に血だまりが出来て、広がっていく。

「隊長!!　しっかりしてください、隊長!!」

志保が沖田に駆け寄って抱き起した。

手が血でぬるつとすべる。

まだかろうじて意識はあった。

「あ、まみ、や…」

沖田が痛みに顔をゆがめながら絞り出すようにつぶやいた。

「すみません、私のせいで…」

そう言いながら、志保の中でどんどん後悔がたまっていた。

視界が涙で揺らぐ。

あのときなんで、周囲に気を配らなかったんだろう。

あのときなんで、おびえてしまったのだろう。

なんで、なんで――。

「気に…すん、な。集中し…ろ」

そう息も絶え絶えに言って、沖田は意識を手放した。

その瞬間、志保の中で何かがプチンと切れた。

それを象徴するかのように、天井が爆発して、そこからうす黒い灰色の空が現れた。

第42話 後悔（後書き）

今日で悪しきテスト期間も終わりです♪

ヤッター！！

少しは更新できる回数も増えると思います！
早く冬休みにならないかな。

第43話 純真な白雪（前書き）

スノードロップ篇、クライマックスです！

それでは、どうぞ♪

第43話 純真な白雪

いつに間に降り出していたのだろう。

ただひたすらに目の前の敵を斬っていく土方の頬に水があたった。

さきほど爆発によってできた天井の穴から雨が注がれていた。

「……チッ」

アイツが土方の人生の登場人物になってから、雨は嫌な予感をさせるものになっていた。

ついさっきまで雲ひとつなかったのに……。

よりによって、今日か。

その土方の予感が、現実のものに反映されてしまった。

「隊長！！　しっかりしてください、隊長！！」

悲鳴に近いアイツの声が聞こえてきた。

バツと振り返ると、血だまりの中に倒れた沖田と、それを抱える志保が目に見え込んできた。

「オイッ……！！」

今すぐにも駆け寄り、救急車の手配をしてやりたかった。

だがさらに土方を囲んだ敵は数え切れないほどだ。

（仕方ねエ……総悟、それまで持つてくれ）

刀をグツと構えた。

だが、その必要はなかった。

「覚悟しろ、土方……っ！？」

目を血走らせた男はいきなり口から血を吐き出して、前のめりに倒れた。

その後ろから現れたのは――他でもない、アイツ。

でも、アイツであり、そうでなかった。

「雨宮…！？」

志保の表情は普通ではなかった。

ただただ無表情に、何の感情も無く斬っているように見えた。

普段なら、歯を食いしばって、それが嫌で仕方がないというふうに

刀を振るうのに――……。――。

目の前の敵を斬ることに、一切抵抗がない。

そしてその瞳^めは……。

暗闇の中で、蒼に染まっていた。

志保は狂ったように敵を斬り続けた。

その気迫は尋常ではなかった。

ついには100人いた部下を全員倒し、淡雪に斬りかかっていった。

志保の一突きを淡雪はすんでのところで避けた。

だが頬に熱い痛みが走り、そつと触れると切り傷が出来でき血が垂れていた。

（何だ、この女は……）

先ほどまで、この少女は冷静でいながらも、その背後に激しい感情が透けていた。

だが今は、それがひとかけらも見えない。

その静かな目に見られれば見られるほど淡雪は理性が吹き飛んで感情を抑えられなくなっていった。

——あなたには護りたいものは何もないんですか？

——もしあっても、そんなんじや何も護れやしない。

「黙れ……」

頭の中に流れた志保の言葉に淡雪は震えながらつぶやいた。

「黙れ黙れ黙れエエエ……」

向ってきた志保とほぼ同時に淡雪も力の限り剣をついた。

血でさびれた刀が淡雪の左肩を貫く。

「うがああああ……」

淡雪は断末魔の悲鳴をあげて床に崩れ落ちた。

「うがああああ!!」

その叫び声で、志保は我に返った。

意識はずっと保っていた。

だがずっと起きながらに深い眠りの中にいるような不思議な感覚だった。

目覚めた瞬間から、その間のことが一気に戻ってきた。

（私は、たくさんの人を殺した…）

何も考えないまま、機械的に。

これじゃただの、人殺しでしかない…。

「うつ…」

淡雪が小さく呻いた。

志保をうつろな目で見上げる。

「君は、女の身、ながら…刀を持つ道を、選んだ…。その…ことに、後悔は、ないの…か？」

志保は自分が殺めてきた人々の血で汚れた刀をぎゅっと握りしめた。

「私は、女だから、と決めつけるのは…嫌いです。この道を選んだことは、最初は自分の意思ではありませんでしたが、今は後悔は、していません」

食いしばった齒の間から必死に言葉を紡ぎ出した。

こうでもしないと、今にでも泣き出してしまいそうだったからだ。

「そうか…」

淡雪は深く息を吸ってから、淡々と話し始めた。

「俺の妹は、君のように、強くは…な、かった…。近所の裕福、な娘たちに、いじ…められて、自殺してしまった」

その告白は、志保に大きな衝撃を与えた。

「妹はなあ…兄のひ…いき目を抜きにして、本当に素直で、いい子…だったんだ。だが…俺の一家は天人に潰され、てなあ…両親が攘夷活動を、していた」

「そんな……」

「それだけ…じゃない。もともと、妹は目の病気を患っていて、左目…は一切、見えなかった。いつも目に…巻いた包帯、を取られて帰ってきた…ついには自、慢だった絹のよう…な髪の毛も切られてしまった。妹の苦しみに…両親が気付くことは、なかった」

一呼吸置いて、淡雪は言葉を絞り出した。

「俺は許せなかったんだよ…妹を苦しめた奴らを！！」

「あなたが、攘夷志士になったのはそのせいなんですか？ 何の罪のない町娘たちを傷つけたのは、そのせいなんですか？ そんなことをして…本当に、妹さんが喜ぶと思いますか！？」

最後は、涙声になった。

娘たちは本当に、何も悪くなんかない。

だが、今ここに血まみれで倒れているこの男も――心
から責める気には、なれなかった。

それがどうしようもなく、悲しかった。

「確かに、君の言うとおりだ…だが、俺はどうしても…自分が、許せなかった。だから…両親がやっていた攘夷活動、を継いだ。もっぱら、やっていたのは…この事件だけ、だったかな」

淡雪は浅い呼吸を繰り返していた。

それがもうすぐ終わりになってしまふということを、この場にいる誰もが分かっていた。

「だが、もうすぐ…雪のところ、に行ける…」

雪とは、妹のことだろう。

雪に溶け込んでしまふような…可憐で美しい少女が頭の中に浮かんだ。

儚く消えてしまいそうな、どこまでも純真な少女だ。

「あなたはまだ、妹さんのところには行けません」

気がついたら、その言葉が飛び出ていた。

「そんな血で汚れた体じゃ、妹さんのところなんかには行かせません」

志保はそう言うと、おもむろに淡雪の刀を抜きとり、自分の刀で斬った。

赤い刀が、小さく粉々になった。

「あなたが流してきた血は、私が受け継ぎます…。あなたは、きれいなまま雪さんのところに行ってください」

その言葉を聞くと、淡雪はふっと静かでおだやかな表情になった。

そしてそのまま目を閉じた。

第44話 感情（前書き）

クライマックスとかほざいていたくせに、これからもう2、3話投稿予定です。

もう少しお付き合いください。

第44話 感情

気がついたら、雨は止んでいた。

あとには、湿った雨のおいだけがほんのり残っている。

「隊長、隊長…」

志保は救急隊員たちに応急処置を施される沖田のすぐわきで弱々しく沖田の名前を繰り返し呼んだ。

だが沖田は目を開けないままだった。

死人のような青白い顔で浅い呼吸を続ける。

「患者は18歳、男性。意識不明の重体です！」

救急隊員がそう叫ぶのが志保の耳に届いた。

「隊長…」

隊長が死んだら、私のせいだ。

私のせいで……。

志保は今まで多くの命と、その家族の幸せを奪ってきた。

だが、それとはまた違う、全身を蝕むような絶望と恐怖…。

「大丈夫だ。総悟はあんぐらいで死ぬようなタマじゃねエ」

土方がほんの少しいたわるような表情で声をかけた。

「は、い…」

心ここにあらずの志保を見ながら、沖田のことを心配しながらも土方はずっと別のことを考えていた。

(さっきのコイツは…何だっただ)

無表情で、鬼のように人を斬っていた志保――。

恐ろしいほど蒼く澄んだ目。

苦しみを抱えながら人を斬るいつもの志保は、どこにもいなかった。

詳しいことはまだ何も分からない。

だが土方たちは志保の過去のことを一切知らない。

本当に、何も。

あの6月の、雨の日。

ひょいと子猫のように沖田が志保を拾ってきた、あの日。

あの日から、土方は志保に完全に気を許した訳ではなかった。

志保を疑う日が来るだろうと、覚悟していた――はずだった。

（俺も鬼の副長となんざ言われてるが、完全に人間の情を捨て切れ
ちやいねエな）

志保と過ごしてきた歲月。

乗り越えてきた事件。

志保を仲間だと信じるのには、それだけで充分だった。

——雨宮。お前は一体、何者なんだ。

「副長」

自分と呼ぶ山崎の声で物思いから覚めた。

「沖田隊長、いましがた病院に着いて緊急手術だそうです」

「…そうか、分かった」

「俺達も、病院に向かいましょう」

車の準備をしてきます、と踵を返した山崎を土方は呼びとめた。

「山崎」

「はい」

「雨宮のことを、調べる」

「!!」

山崎は驚いたように息をのんだ。

「お前も見ただろう、アイツの蒼い目を。それを探せ」

「でも……」

「これは命令だ。分かったら、さっさと行け」

出来れば——……

自分の思いすごしであってほしかった。

沖田は、運ばれた先の病院でただちに緊急手術を受けた。

直後に駆け付けた志保たちは、「手術中」の赤いランプが消えるそのときをただひたすらに待っていた。

手術を終えて出てきた医師は、落ちついた表情だった。

命にかかわるほどの怪我ではなかった。

しばらく安静に過ごせば充分平気だろうということだ。

そのとき、志保は膝が思わず崩れるほど安堵した。

手術室から運ばれてきた沖田を見て、また少し涙が出た。

その数日後。

屯所に再びいつもの騒がしさが戻ってきた。

「しっかしよくあんなに大きな事件で死人が出なかったよなあ」

新八と神楽を連れて屯所を訪れた銀時がいつもの死んだ魚のような目と言った。

正しくは、犯人側にはおびただしい死者を出した。

だが銀時が言っているのはそういうことではないのだろう。

「そうだよなあ。総悟も志保もチャイナ娘もよく頑張ってくれた」

近藤が噛みしめるようにウンウン、とうなずきながら言った。

「近藤さん、そんなこと言つとまたこのチャイナ娘がつけあがるぞ」

「真選組まへんぐみだけじゃこつはいかないネ。万事屋の力はやっぱりどこまでも偉大アル」

「ホラ見ろ」

髪が短くなつた神樂の自慢げな台詞に土方がツツこんだ。

本人はあまり気にしていないようで「ほつとけばまた伸びるアルネ。おしいのは髪が伸びるまでアホ作者が私たちを出さなくなることでけネ」などと小説が破綻するようなひと言をさらりと言つてのけていた。

「もうふたりとも、僕たち沖田さんの見舞いに來たんでしょ。あんまり騒がないでください」

新八がいさめるように言つた。

そうなのだ。

手術の後沖田は屯所に移り、ゆっくり療養中だった。

だが当の本人は、誰の言葉も耳に入ってなかった。

どうしてこんなにイライラするんだろう。

沖田はどうしようもなく気持ちが悪立っていた。

刀を振り回せない欲求不満でもない、体の痛みของせいでもない。

もっとちがう——どうしようもない感情だった。

小さく舌打ちして寝返りを打つと、小さな「失礼します」という声が聞こえた。

「あれ、みなさんいたんですか？」

志保だった。

包帯を腕いっぱい抱えて、部屋に入ってきた。

「おお、志保！ ご苦労さま」

近藤が笑って声をかけた。

「よう、せっかく神楽さまが来てやったんだから茶菓子くらい出すヨロシ」

「あなたに出すものではありません」

そう言いながらも後で持ってくるのだろう。

あの一件から神楽と志保は互いにほんの少しだけ優しくなっていた。

「オイ志保オ。当然俺たちへの報酬はあるんだよねー？」

「何言っただこの腐れ天パ！ テメエんとこのチャイナ娘が勝手に巻き込まれたんだ。俺たちは知らねエ」

部屋の中が、なごやかな空気だ。

それが何より、沖田の癪に障る。

「隊長、包帯変えますよ」

沖田が退院してから、志保が献身的に看病してくれた。

沖田の比較的早い回復はのおかげだろうと、近藤と土方が話していた。

沖田は、もう自分の気持ちを抑えられなかった。

「何世話してやってるみたいなツラしてんでイ」

志保の静かな表情が、ほんの少し揺れた。

普段なら冗談としてよく使われる言葉だったが、沖田の声音からそうでないことを感じ取ったのだろう。

「……………」

「オイ総悟、何言つてんだ。志保はお前のために――」

「それがウザいつつてんでさア」

どうしてだろう。

本当は、こんなことを言いたいんじゃないのに。

「別にこっちから頼んだ訳じゃありませんし」

言葉が止まらない。

「もとはと言えばお前のせいでこんな目に――」

その言葉は、言ってはいけなかった。

「総悟、何言つてんだ！！ 謝れ！！」

近藤が怒鳴った。

「沖田さん、何もそんな――」

カタン

ごく小さな音だったが、誰しもの耳に届いた。

志保が、包帯を落とした音だった。

「いいんです。本当に悪いのは私ですし……」

その表情は、笑っているのに全然笑顔に見えなかった。

「すみません、用事を思い出したのでちょっと失礼します」

背を向けたとき、志保の顔に雫がこぼれたのは沖田の見間違いではなかったはずだ。

「志保！！」

志保が出ていったあとを、こちらに睨みを利かせてから神楽が追った。

他のみんなもすぐに黙って部屋を出ていった。

土方だけは、一度だけ振り返ってつぶやいた。

「だからお前はガキなんだ」

沖田は布団の中にもぐった。

「言っちゃったなア、沖田君」

聞こえたのは、けだるそうなあの人の声だった。

第44話 感情（後書き）

中途半端でゴメンなさい…。

第45話 あふれる愛情（前書き）

「『銀魂 Lonely rainy day』の恋愛なんか見たくねー！」

「俺は沖神派なんだよ、カス作者！」

という方は閲覧をご控えになったほうがよろしいかと思えます…。
ちよつと沖田がヘンです。
ちよつとどころじゃないか…。

第45話 あふれる愛情

分かっていた。

自分のせいで、沖田は深い傷を負って死にかけたということ。

分かっていた。

すべて自分が悪いのであることを。

だが、どうしても涙をこらえることが出来なかった。

いつの間にか沖田や自分の部屋と反対側の縁側まで来ていた。

志保はそこにゆっくりと腰を下ろす。

「志保…」

振り向くと、追いかけて来てくれたのだろう。

息を少し切らした神楽が立っていた。

「チャイナさん…」

「となり、いいアルか？」

頷くと、神楽もストンと座った。

しばらくは、志保も神楽も何もしやべらなかった。

「…髪短くなっちゃって、ごめんなさい」

志保が小さくつぶやいた。

神楽は驚いて目を見開いた。

「何でそんなこと言うアルネ？ 悪いのはお前じゃないアル」

そうかもしれない。

ただ短くなってしまったオレンジ色の髪の毛を見て、謝らなければ
ならないと思った。

「さっきのことは気にすることないネ」

神楽が明るく言った。

「志保は何にも悪くないアルヨ。アイツもほんとは分かってるはず
ヨ」

「……………」

「まあなかなか謝るような奴じゃないけど、きつと——」

神楽の言葉は途中で途切れた。

志保が、その頭を神楽の肩に寄せてきたからだ。

「志保…」

「ごめんなさい…。でも今は…ちょっとだけ、こづさせて…」

ダークブラウンの髪の下で、小さく泣き出す声が聞こえた。

自分より幼い神楽に頼るなんてこと、本当はしたくなかった。

だが、今はただ…泣きたかった。

神楽はよしよしと頭を撫でた。

「いいアルヨ。いっぱい泣いて、いいアルヨ…」

「ほつといてくだせエ、…旦那」

沖田はくぐもった声で言った。

銀時はどっこいしょと親父臭い掛け声を発しながらあぐらをかいだ。

ここを出ていく気は端からないようだ。

「ほつとくわけにはいかねーなア。このまんまだったら俺沖田君のこと許せねエもんな」

さらりとした口調だった。

ことさらに怒っているわけではなく、純粹に沖田のことを諭そうとしている声音だった。

「旦那。俺ア分からないんですア。どうしてこんなに兩宮に対してイラついてるのか」

「分かんないの？」

「ええ。サッパリ」

銀時ははーっとため息をついた。

「やっぱり真選組1番隊隊長なんつー肩書き背負ってても、お前はやっぱりガキだな」

それならさつき土方のクソヤローにも言われた。

心の中で舌打ちした。

「お前はな、志保が笑ってることが氣にくわねエんだ」

沖田は目だけ布団から出して銀時をじっと見た。

「自分がこんな怪我してるのに、笑っていられる志保が氣にくわねエんだよ」

つまり本当のガキだっつーことだな、と銀時は薄く笑った。

そうだったかもしれない。

自分は必死に志保を護った。

泣いてなんかほしくなかった。

だけどその思いと一緒に、自分のことをあまり気にしているように見えない志保を憎む気持ちが存在しているのも確かだ。

「けどな、志保はおくびにも出してねエが、毎晩泣いてたんだよ」

沖田はハッと顔を上げた。

さっき大串君に聞いた、と不思議そうな沖田に銀時は言った。

「心配して、心配して、死ぬほど心配して……。それでもお前には笑顔しか見せられない……。そんな奴なんだよ、アイツは」

「……………」

気付けば、夕方になっていた。

冬の夕暮れの空に、カラスの鳴き声が響いた。

「素直になれよ、総一郎くん」

「総悟でさア、…旦那」

かすれた声で沖田は言った。

銀時はニツと笑う。

「ガキには、ガキなりのやり方があるはずさ」

最後にそう言って、銀時は部屋を後にした。

『お前はな、志保が笑ってることが気に入わねえんだ』

『心配して、心配して、死ぬほど心配して……。それでもお前には笑顔しか見せられない…。そう言う奴なんだよ、アイツは』

銀時の言葉が、頭の中をぐるぐると回っていた。

その言葉が本当なら…。どんなに切なくて、嬉しいだろう。

あたたかい気持ちで、胸にあふれた。

この気持ちは、何なんだろう。

近藤さんへの忠誠心とも違う、姉上への愛情とも違う、愛しくて愛しくて、たまらないような…。

「俺ア…」

気がつけば、外は真っ暗になっていた。

『ガキには、ガキなりのやり方があるはずさ』

沖田は布団を這い出て、襖を開け放った。

沖田は重い体を引きずって屯所内を志保を探して歩き回った。

誰に聞いても、見ていないと答えた。

「まったく、アイツどこ行っただんでさア……」

俺をこんなに疲れさせやがって。

でも、沖田はどんなに疲れようとも志保を探し続けると固く思った。

志保の部屋にも、食堂にも、会議室にもいなかった。

最後に辿り着いたのは、道場だった。

「こんなところに……」

いや、アイツのことだ。

そこには、刀を振り回したアイツが――。

「雨宮…」

小さな背中がビクツと震えた。

「あ、隊長…」

戸惑ったように志保がつぶやいた。

「お前、こんな遅くになにやってんでイ？」

「ああ、なんだか無性に体を動かしたくなって…」

そう言って、笑った。

『毎晩泣いてたんだよ』

「……………」

沖田は、ギョツと唇を結んだ。

「悪イ……」

「え……？」

「あんなこと言って、悪かった……」

柄にもなく、声が震えた。

もしかしたら許してもらえないかと思うと、不安が胸に広がった。

「謝ってもらったことなんか……ありません」

ごく小さな声がつつむいた沖田の耳に届いた。

「本当に…その傷は、私のせいですから」

横にひとつにまとめたダークブラウンの髪が、光に揺れた。

「私のほっこそ…ごめんなさい…」

沈黙が、流れた。

その瞬間、先ほどと同じ愛情が、胸に押し寄せてきて、思わず目を閉じた。

「俺が…」

こんなときなのに、かすれ声しか出なかった。

いや、こんなときだからだろうか。

「俺が頑張れたのは、お前がいたからでイ…」

志保がパツと顔を上げた。

澄んだ、美しい蒼い目と視線が絡んだ――。

「お前を失いたくなんか、なかった…」

本当に、そうだった。

「俺は、お前がいてくれて、よかった…」

やっと、言葉にできた。

その言葉を聞いたとき――志保の表情が、花が綻ぶように、綺麗な笑顔になった。

沖田はやっと、想いを自覚することが出来た。

『お前の弱点は志保だよ！』

『素直になれよ、沖田』

銀時の言っていたことが、ようやく分かった。

俺ア、コイツのことが…好きなんだア——
……。

第45話 あふれる愛情（後書き）

つ、つかれた…。

あ、でも私も沖神大好きですよ！

志保へのご質問など、どしどし応募ください！

あと、「銀魂 Lonely rainy day」のいい略し
方ありませんか？
いちいち書くのめんどくさくて…。

第46話　ただ、そこにいるだけで…

「もういいでしょう。ですがあまり無理はしないように」

最後の診察を終えた医者が微笑んで言った。

あの事件から十数日後。

ついに沖田は怪我が完治し、包帯が取れた。

部屋には沖田、近藤、志保、そして山崎がいる。

「先生、ありがとうございました」

近藤が頭を下げた。

「いえいえ」

山崎が医者を見送りに部屋を出ると、志保は沖田に向き直った。

「よかったですね」

「ああ」

「仕事、溜まっていますから」

「ああ」

「みんなも待っていますよ、隊長のこと」

「ああ」

「……………ホーホケキョー」

「ああ」

「……って聞いてんのかコラアアア!!」

「ああ」

志保の渾身のツツコミにも生返事しかない沖田。

「一体どーしたんですか？ 長く休み過ぎてボケてんですか？」

「ガハハ、まあそう言っな志保。総悟もやっとな復歸できて気が抜け

てるんだろっ」

「復帰するときにあって気が抜けたら困りますけどね」

本当は沖田の意識はしっかりとしていた。

実は、志保への気持ちに気付いたばかりでどう接すればよいのか分からないだけなのだった。

「まあいいです。そろそろ行きましょうか」

「…ああ」

「お前らを呼んだのは他でもない、この間の事件の詳細が分かったからだ」

土方はいつも通りの低い声音で言った。

「聞きたいか？」

土方は沈黙を了解のしるしだと捉えたようで、語りだした。

「淡雪の本名は柊五郎^{ひいらぎごろう}。妹の名は雪。ふたりっきりの兄妹で、とても仲が良かったらしい。柊家はな、幕府直属の名家だったらしい。しかし、当時当主だった祖父が天人と条約を結ぶことに強く反対してな…。一家もろとも襲われて、生き残ったのは、まだ幼い淡雪の父親だったそうだ…」

「……………」

あの男は、見た目よりずっと苦労してきたのだ。

今頃天国で、妹と再会できているだろうか…。

「あとはほとんど本人が語っていた内容なんだが…ああ、そうだ。スノードロップの花の写真がある。見るか？」

沖田と志保は無意識のうちに覗きこんでいた。

それは、少しつつむき加減の――白くて、儂く美しい花だった。

「それとな、この花の花言葉が『あなたの死が見たい』っていうのは少し間違いでな。人に贈るとそういう意味になるそうなんだがな……」

山崎の野郎、慌ててたから嫌な方を選んじまったんだな、とつぶやきながら煙草の煙を吐いた。

「本当の花言葉は――

『希望』…だとさ」

「副隊長、お客さんが来てるぜ」

土方の部屋を出てすぐ、原田に声をかけられた。

「え、誰ですか？」

「知らない顔だったな。でもけっこうな美人さんな女だったぜ」

指示された部屋の襖を開けると、そこにはちよこんと座布団に座って緊張した様子の女の子がいた。

志保が入ってきたことに気付くと、パツと顔を上げた。

「あ、あの…」

「えーと…」

いつもなら「ああ、山田さん、こんにちは」などとボケに逃げるのだが、今度はそうもいかない。

不思議と、見覚えのある顔だったからだ。

なんとか記憶の糸を辿る。

『平気ですか？ もう大丈夫…』

『いやっ…』

暗闇の隅っこで、ガタガタ震えていた小さい少女…。

志保のことを、化け物でも見るように怯えていた瞳…。

「あの時の…」

少女はぺこりと頭を下げた。

少女は、田中舞と名乗った。

かぶき町の街でくらす、八百屋の一人娘だという。

あるときよりずいぶん顔色がよくなったようだ。

「あときは、本当に、心の底から怖くて…手を差し伸べてくれたあなたさえ、私を殺そうとしているように見えてしまったんです」

「結構キツイことだと思いますね」

それこそが志保が気にしていたことだったのだ。

「でも…落ちついて考えてみれば、よく分かったんです。あるとき私を助けてくれたのは、あなただって」

舞は志保の顔を真正面から見た。

その顔には、涙が光っていた。

「あなたを傷つけるようなこととして、ごめんなさい…それに、ありがとう」

嬉しかった。

誰かを助けることが出来て、お礼を言われて…。

心から、嬉しかった。

どちらからともなく手を握り合って、志保も思わず涙ぐんでしまった。

「雨宮」

振り向くと、そこに沖田がいた。

隊服姿の沖田を見るのは、とても久しぶりだ。

沖田が志保の隣りに並ぶ。

志保はかぶき町の街が一望できる丘に来ていた。

前来たときは満天の星が見える夜だったが、青空の下も爽やかな風が吹いて、とても気持ちいい。

「あの人が会いに来てくれて……よかったです」

傷つけられた少女たちを救えなかったかもしれないということが、とても心残りだった。

実際に傷つけられてしまった体だけじゃない、心の傷をなかったことにすることはできない。

癒すことも、志保たちにはできない。

……

『ありがとう』

「よかったです、本当に」

「…ああ」

沖田はぽんぽんと、志保の頭を軽く叩いた。

沖田の手は、とてもあたたかかった。

「それに…」

「あ？」

沖田がこつちを見た。

だから自然と上目遣いになってしまった。

「隊長が、私がいてくれてよかったって言ってくれたときも、とても嬉しかったですよ？」

志保はいたずらっぽい表情でそう言うってから、めずらしい満面の笑みを浮かべた。

「!」

そのせいで沖田のポーカrfフェイスは崩れてしまった。

「？」

志保に自覚はなかったのだけれど。

スノードロップ。

その花言葉は、『希望』。

人に贈ることのできない、ただそこに在りつづけるだけでいい、白
雪の花…。

第46話 ただ、そこにいるだけで…（後書き）

この話で、やっと「スノードロップ篇」完結です。ワー、パチパチ…。

ここまでお付き合いくださり、本当にありがとうございました。

実は私もつい今日知ったんですが、「あなたの死がみたい」というのは本当の花ことばではなかったんですね…！
ですが時すでに遅し。

訂正するには話は進み過ぎていました…。
なのであんな苦肉の策に。

みなさま、本当に申し訳ありませんでした。

どなたかが少しでも、この「スノードロップ篇」を楽しんで頂いてくれたら、幸いです。

では！

次章予告 泣いた雨鬼

むかーしむかし。

といっても今から数年前。

江戸時代末期、江戸に地球に天人と呼ばれる異星人たちがやってきました。

自分たちの星が異星人たちに支配されるのを嫌悪した人間たちは、自分たちの誇りをかけて戦いを挑みました。

それが、攘夷戦争。

攘夷戦争は数十年に渡って続き、多くの侍たちが戦いに参加しました。

しかし、天人の絶大な力を見て逃げ腰になっていた幕府は、天人の侵略をあっさり受け入れ開国してしまいました。

そんな中でも、最後まで必死にあがいていた侍たちがいました。

銀髪を血に染めし白き鬼、しろやしや白夜叉——坂田銀時。

世を憂いて革命を望んだ狂乱の貴公子——桂小太郎。

鬼兵隊を率い、すべてを壊し続けた天才攘夷志士——高杉晋介。

戦いの先を見据え、宇宙へと旅立った剣豪——坂本辰馬。

歴史に深く名を残した4人。

しかし、もうひとり。

あまり知られてはいないけれど、伝説となったもうひとりの鬼がいました。

灰色のどんよりとした雲が空に浮かぶ日、決まって戦場に現れた、みんなよりひとまわり小さい影。

その蒼みのかかった目から、ぼろぼろ、ぼろぼろ……。

澄んだ透明な涙を流して、剣を赤き血に染める、まだうら若い少女がいました。

ぼろぼろ、ぼろぼろ……。

その涙は、彼女が剣の動きを止めるまで決して止まりませんでした。

そのことから、天人や攘夷志士たちは彼女のことをそう呼びました。

「あまおに雨鬼」
と。

雨鬼と呼ばれ、敵味方から恐れられた少女は、攘夷戦争が終結する
間際…。

突然、姿を消したのでした。

今、再び――運命さだめの歯車が、動き始める……。

第47話 キツカケ（前書き）

記念すべき50部目です！

よく3日坊主な私がここまで続けてこられた…。泣

それでは、どうぞ

第47話 キツカケ

「待ちなさいコノヤロー！」

冬のピンとした空気の中に、澄んだ少女の声が響いた。

江戸、かぶき町の街を真選組の黒い隊服を身にまとった体の小さい影が走る。

小柄な体だが、とても足が速い。

彼女が追うのは、きらびやかな女物のバックを手につかんだ大柄の男。

先ほど市井の女性から奪い取ったものだ。

つまり、ひったくり犯である。

男はサツと後ろに目を向けた。

自分より幾分も体の小さいその少女は少しも疲労の色を見せず自分を追いかけてくる。

足が自慢である自分についてくるとは…。

「つたく、サツサと諦めろよ！」

そうつぶやいて視線を前に戻した。

ほんの少しでも隙を見せたことを、男は後悔した。

「！…！」

どうしたことだろう——先ほどまで自分を追いかけていたはずの少女が、目の前にいるのだ！

「なっ、なんでお前――」

「私に背を向けて、逃げ切れることができますか」

そう言くと少女は、真選組1番隊副隊長雨宮志保は――
――男の腕を掴み、そのまま背負い投げした。

私から逃げたいなら、私を斬ってみればどうですか？

「雨宮、お手柄だねィ」

かわいた木のベンチに寝そべる志保に沖田が声をかけてきた。

いくら志保と言えどあれだけ長い距離全力で走れば体力を消耗する。

実はもう歩けないほど疲労困憊していて、なんとか部下には平静を装って先に帰ってもらい、ひそかに休んでいたのだ。

だがいちばん厄介な男に見つかってしまった。

沖田は志保が寝そべっているものと対のベンチに腰掛けた。

「ていうか、隊長。あなたどこ行ってたんですか？ ひつたくり犯見つけたときは一緒にいましたよね」

「ああ、お前がなんかダッシュして行っちゃったから、俺アのんびり団子食ってやした」

食べ終わった団子の串をポイツと投げ捨てながら事もなげに言う。

「ああ、それは今日私が行こうと思ってた数量限定の『いちご団子』……あれ、ない……」

…もう想像はついている。

「…隊長。あれだけ私のおやつとらないでっってお願ひしたじゃないですか！-！」

「悪い、悪い。次から気をつけらァ」

「……………」

さっきの男より、こっちの盗人を捕まえたいくらいだ、ホントに。

「お疲れさん、志保」

「ありがとーございます」

今日の仕事を終えた後、何気なく局長室を訪れたら、お茶を出された。

冷えた体にあたたかいお茶がしみこんでいく。

「今日もひったくり犯を捕まえたそうだな」

「ええ、まあ」

「本当によくやってくれているよ、お前は。市井でもお前は人気なんだぞ？」

近藤がニカツと笑いながら言った。

「え？」

「やっぱり真選組唯一の女隊士だしなあ。こんな場所^{ところ}でやってるだけで大したもんだ。お前がみんなになんて呼ばれてるか知ってるか？」

「……………」

近藤は黙っている志保を見て目を細めてから優しく言った。

「『青薔薇』だどよ」

「志保は本当によくやってくれてるよ」

志保に言ったときと同じセリフを土方にも、近藤は繰り返した。

「なあ、トシもそう思うだろ？」

振られて土方は仕方なく答えた。

「…まあな」

しかし、今はこんなやり取りをしている場合ではない。

今だうんうんと自分のことのように喜んでいる近藤を現実に取り戻した。

「近藤さん、またアイツがテロを起こしたそうだ」

近藤も表情を引き締める。

「アイツが…か」

「ああ」

今月に入ってから、もうすでにテロが4回も起きている。

黒幕は――すべて、高杉晋助だった。

もともと高杉は過激な攘夷志士だが、それにしても最近は何が過ぎる。

「こうなっちまったら、もう高杉に関する情報ならなんでも集めなきゃいけないエなあ」

「ああ。そうだな」

「しっかしなあ、高杉の野郎も変わっちまったなあ。昔はその名を馳せる伝説の攘夷志士だったのに、今じゃただのテロリストだ」

近藤が茶をすすりながらふと思いついたように言った。

「そういえば、伝説の攘夷志士の噂を聞いたことがあるな…」

「あ？」

「確かな…。数年前、伝説となった攘夷志士がいたそうだ。白夜叉、狂乱の貴公子桂小太郎、高杉晋助…。あともうひとりの名前は知らないが、とにかくみんなバカ強かったそうだ。だが…。もうひとり、伝説の鬼がいたそうだ。涙を流しながら人を斬る、鬼…」

「……………」

涙を流す、鬼か……。

自室で寝巻に着替え煙草を吸っていると、呼び寄せた男の声が聞こえた。

「入れ」

襖がスツと開く。

「なんですか、副長。こんな遅くに」

山崎が眠たそうに言った。

「山崎、頼んだ件はどうなってる」

「え？ ああ、志保ちゃんのことですか？ それはまだちょっと…」

そんなことだろうと思った。

いくら山崎と言えど、記憶を失くしている人間の足跡をたどるのは安易ではないはずだ。

「ならそれはひとまず置いておけ。その代わり、伝説の攘夷志士のことを調べろ」

「は？」

山崎の眠気はどこかへ吹き飛んだようだ。

「といっても白夜叉とか狂乱の貴公子とかあのへんの類じゃねエ。分かってるのはひとつ…『涙を流す鬼』だっつーことだ」

山崎は即座にうなずいた。

「分かりました」

俺は何を探しているのだろう。

どうしたいのだろう。

自分でもよく、分かっていない。

第47話 キツカケ（後書き）

ご感想、志保や「銀魂 Lonely rainy day」への質問など、心よりお待ちしております！

ホント、切実に（<―>）

第48話 体温（前書き）

長い！

今回久々にめちゃくちゃ長いですっ！

第48話 体温

「いらっしゃっせー」

機械音と同時に暖房のきいたコンビニの中へと志保は入った。

隊服で、しかも巡回中だったが、そんなもの志保にはお構いなしだ。

マンガ雑誌のコーナーで、お目当ての物を手にとる。

「なっしばらく買ってないうちに新章に入ってるじゃないですかー
！ むむ……！！」

そのまま買って、冷たい外気の中へと出た。

そのまま帰路についたが、かぶき町の途中で懐かしい建物を見つけた。

「あ……」

「万事屋銀ちゃん」という看板をかけたあの場所。

前に訪れたのはいつだったろうか。

気がついたら自然と足が木造の階段を上りつつあった。

ピンポーン

チャイムを押したが、一向に出てくる気配がない。

ピンポーン

もう一度押すが、返答はなし。

ピンポーンピンポーンピンポーンピンポピンポピンポピンポ

「うるせエエエ!!! 家賃ならねーっていったらクソババア
アアア!!!」

銀時が、すごい形相で戸を蹴破ってきた。

志保は戸の脇にいたのでそれを無表情で傍観する形になったが。

「あ、銀さん。おはようございます」

「なんだ、志保かよ。おはよー」

銀時はそう頭をボリボリ掻きながら言って、戸を閉めようとした。

「何ちゃっかりなかったことにしよーとしてんですか」

志保は足で戸を押さえた。

「ちよっ、空気読めよな。俺ア宇宙と一体化しようとしてんだ。邪
魔しないでくれや」

「何頭の悪いこと言ってるんですか」

「お前なア——」

「銀時様、家賃回収に参りました」

ドオオン

怒鳴ろうとした銀時の言葉を遮って、落ちついた声と爆発音が聞こえた。

見ると、銀時のすぐ真横の壁が吹き飛ばされているではないか。

「……ん？」

振り返ると、そこにいたのは長いモップを両手に持つ、メイド服を

着た女性だった。

「げっ…見つかった！ バカヤロー、お前のせいだぞ！！」

「…銀さん、あなたがそんな趣味を持っていたなんて思いもしませんでした」

「…え？」

「とばけてんじゃねーですよ。どこから雇ってきたんですか。メイドプレイですか？ お仕置きコースですか？」

「すみませんどこからツツこめばいいのか皆目不可能なんですけど」

静かに口論する志保と銀時、それをただ見ているだけのメイドという傍から見れば奇妙な光景だった。

「銀時様、女性と戯れずに家賃を払ってください」

「これのどこが戯れてんだよ！　つーかこいつは女じゃねエ！」

「なんだと腐れ天パもう一度言ってみろ。そのコンクリに沈めたあと爆破するぞコルア」

「ほら言った通りこんな発言をする奴は女とは認めませんンンン！
！」

「え、カラクリなんですか？」

「はい、たまと申します」

とりあえずお店で話でも、という流れになり、志保は万事屋ぎんちやんの下にある「スナックお登勢」のカウンターに座っている。

女将さんは買い物に出かけているらしい。

「へえ、最近の科学技術は発達してるんですね。フツーに人間かと思いましたよ」

言われてみれば整った顔立ちだが無表情で（志保も人のことは言えないが）無機質な印象を受けないでもない。

「お前は携帯電話も分らないじいさんか」

「うるっさい。じじいのような白髪頭の人には言われたくありません」

「ところで、あなたのお名前は？」

「私は、雨宮志保といいます」

自己紹介するのは何度してもあまり慣れないものだ。

「志保様ですね。データに新規登録しておきます」

「たま、ついでに付け加えとけ。志保は巷で言葉の暴れん坊將軍って騒がれてるってな」

「カラクリに何教えてんですか」

「了解致しました。志保さまは巷で言葉の暴れん坊將軍と呼ばれて……」

「いねエよ！ 呼ばれてたら泣きますよ！」

そんな会話をしていたら、お店の扉がガラツと開いて、数人分の声が入ってきた。

「たまー、オイル買ってきたアルヨー」

「神楽ちゃん、手がオイルでびしょびしょ」

「たま、店番頼んで悪かったね。はいオイル」

「すみません」

「私が買ッテ来タンダカラナ。アリガタク思エヨ」

「ありがとうございます、お登勢様」

「オイ、私ノ存在ト台詞ハ無視力？」

店の中が、一気に騒がしくなった。

入ってきた4人はそれぞれ思い思いのことをしゃべっていたが、いちばん先に志保の存在に気付いたのは神楽だった。

「あ、お前来てたアルか！」

ついこの間の事件で髪を切られてしまった神楽だったが、まだ結べる長さまではいかなくとも、だいぶオレンジ色が長くなっていた。

それを見た志保は思わず微笑んだ。

「！」

神楽は照れたのか、赤い顔をしてそつぽを向いてしまった。

そんな神楽の様子にますます笑みを深めていたら、ひとりの女性（？）と目があった。

お登勢と呼ばれていたから、このスナックの女将さんだろう。

「ん、見ない顔だね…。まさか銀時のコレかい？」

そう言うとお登勢は小指を立てた。

久々来たな、それ。

「ご冗談を。もしそうなら私は頭を打ち付けて記憶を抹殺しますよ」

「心と体の両方で拒否されたんだけど。俺の心が抹殺されそうだよ」

「まあ、それもそうさね」

「何納得してくれてんだババア」

ふたりの言い合いが始まった。

家賃回収の話に移ると銀時はもっぱら弱い立場のようだったが。

「すみません志保さん、騒がしくて。銀さん達いつもこんな感じなんですよ」

「……………あ、新八君。久しぶり」

「今一瞬「コイツ誰だっけ」って思いましたよね。完全に僕のこと忘れてましたよね」

神楽がポンと新八の肩を叩いた。

「諦めるネ新八。人は生まれながらにして存在色素が決まってるってパピーが言ってたネ」

「娘に何教えてんだあのハゲ親父」

「ヘーアンタが噂の『青薔薇』かい」

「その名前、知ってるんですか？」

ついこの間近藤に聞いた自分の異名をここでも聞くとは思いませんでした。

「知ってるも何も、真選組唯一の女隊士「青薔薇」といったら弱きを助け強気を挫く、民の味方って有名だけどね」

「私、自分がそんな勧善懲悪な人間だとは知りませんでした」

「俺はお前がそんな言葉を知ってることに驚きだよ」

「まア、せいぜい頑張りな」

そう言うと、お登勢はケンカしている神楽と新八のところに行った。

みんなに慕われるのは、嬉しい。

だけど、私はそんなにいい人間にはなり切れない。

「ハァー」

ふと視線をあげると、じっとこっちを見ている銀時と目があつた。

「何ですか」

「…お前つてさ」

一瞬、間があいた。

「よくため息つくよな」

「……………」

なぜだか、目が逸らせなかった。

「…ダメですか？」

「いや、ぶえつつにー」

「全然可愛くないですから。逆に気持ち悪いです」

「ホントひどいよな、お前」

その言葉は無視した。

「女の子にはいろいろ悩みがあるんですよー」

そう言って、何気なく銀時のほっぺを軽く引つ張った。

本当に、何気なくだ。

だが、銀時は目を見開いて、固まってしまった。

「…銀さん？」

「……ハハッ」

そしていきなり笑いだした。

「何いきなり笑ってんですか、気持ち悪い」

志保がこんなことを言っても、言い返してこない。

ただ左手で顔を覆った。

「ホント、何なんだよお前は……」

「は？ 何言って……」

言葉が続かなかった。

銀時の頬をつかんでいた手を、ひとまわり大きな手が包みこんでそのまま引っぱ張った。

何が起こったのか、よく分からなかった。

ただ、銀時の体と触れ合っている部分に体温がきた。

熱が伝わってきて、体が、あつくなる。

抱きしめられている。

私が、銀さんに。

周りの音が、すべて消えた。

「銀、さ…」

時が止まったかのようにだ。

指の1本さえ、動かせない。

そしてふと、言葉が耳をかすめた。

「

」

第48話 体温（後書き）

ご感想——…お待ちしております。

第49話 再会（前書き）

第50話、かなり編集しました！

第49話 再会

犬の鳴き声が壁伝いに聞こえた。

冬の凍てつくような寒さの夜だった。

銀時はひとり誰もいない居間で社長椅子に腰かけ、窓から見える月を眺めていた。

「……………」

もうすでに時刻は深夜をまわっていた。

神楽は今日は新八の家にお泊りで、本当の本当にこの万事屋には銀時だけだった。

ガラガラ

いつもならチャイム音が響く玄関から、そっと開けたのだろう小さな戸を開け閉めする音が聞こえてきた。

「よう、久しぶりだな。銀時」

「ッラ。待ってたぜ」

「ッラじゃない、桂だ」

指名手配犯の桂小太郎。

彼こそが、銀時がこんな遅くまで待っていた人物だった。

桂が持参してきた銘酒「鬼嫁」をつぎ、ぐいっと一気に飲んだ。

「どうした？ 貴様から誘うなんぞめずらしいじゃないか？ ん？
もしかや攘夷志士になると決心したのか？」

「なんでそうなるんだよ。何いきなり自分の願望突き出してるんだ
よ」

「じゃあ何なんだ」

ハァー、と銀時はため息をついた。

コイツは相変わらずで、うらやましい限りだよ。まったく。

「なァ、ツラ。高杉の野郎は志保のこと、知ってんのか？」

「ツラじゃない、桂だ。…何？」

桂の視線が、鋭くなった。

「そんなことを俺に聞いてどうする」

「もし知ってんなら、アイツは黙ってなんざいねーだろうが」

「俺の口からは何とも言えん。だが、高杉が1度かぶき町に来ていたという話を聞いたことがある」

「どちらとも分からねえ…てことか」

「ああ。俺は会っていないことを祈るがな」

そのあとは、ただ黙って酒を飲んでいるだけだった。

…ヤバい予感がして、ならねエ。

「失礼します」

銀時と桂が酒を飲み交わしている頃、山崎が再び副長室を訪れた。

「どうだ」

「はい、かなり調べられました」

山崎は分厚い紙の束をめくり、報告し始める。

「攘夷戦争末期の頃に突如姿を現した15、6歳頃の少女だそうです。隊を持たないことでも有名で、よく白夜叉や高杉晋助などと行動を共にしていました。そして、天人を斬る時涙を流すことから――

――『雨鬼』と呼ばれていたそうです」

「……………」

「しかし、この雨鬼と志保ちゃんと何の関係が…？」

攘夷戦争が終結した年は、約2年前。

志保の年は、18歳。

ぴったり当てはまる。

「それはじきに話す。ご苦労だったな」

山崎は疑わしげな視線を向けながらも、黙って退出した。

土方は吸っていた煙草を灰皿に押し付け、外に出た。

雲の多い夜だ。

明日は雨かな、とぼんやり思ったとき、柱に何かが寄りかかっているのが視界にチラリと入った。

「…総悟」

「土方さん。俺アアンタに聞きたいことがあるんでさア」

沖田が低い声音で挑戦的に言った。

身構える土方に、沖田は真剣な面持ちで問いかけた。

「…知ってますか？ 俺、第48話にちょこつと出てから3話分まったく出てないんですぜ？」

「いや、知らねーよオオオオ！！」

土方渾身のツッコミだ。

絶対志保を調べていることを問い詰められるだろうと思っていたのに、めずらしく真面目な顔の沖田から出た言葉がコレだ。

ツッコみたくもなる。

「こんな場面つくって言うことがソレ！？」

「だって、俺は小説のキーワードにのるほど重要な人物なのに、こんな仕打ちはないですぜ」

「…しゃーねーだろ。今は出しづらいときなんだよ」

「まあ、いいです。ホントはこんなことを言いに来たんじゃねエ」

そう言つと沖田は、今度こそ真剣に土方を見た。

「山崎にこそそと雨宮のことを嗅ぎまわらせてるようですが、
体何のつもりでイ？」

「……………」

思っていた通りだった。

志保のことを疑えば、沖田コイツが黙つてはいないだろうと。

「お前には関係ねエ」

「関係ありますア」

沖田が少し語気を荒げた。

「アイツを連れてきたのは、俺でイ」

『外に出れば、何かいいものが見つかると思ったんでさア』

確か、そんなことを言っていた。

「俺だって…本当は、疑いたくなんかねエ」

沖田の視線を嫌というほど感じた。

「本当は、仲間だって思っていてェんだ。だが…真選組のことを考えると、どうしても、ダメだ」

沖田は何も言わず、自分の部屋に戻っていった。

今日はどんよりとした灰色の空だ。

志保はひとりで、かぶき町のはずれを巡回していた。

昨日の、銀時のことが思い出されてならない。

『ホント、なんだよお前は…』

アンタの方が何なんですか。

『すまねエ』

なんで…謝るんですか。

銀時は、明らかにいつもと様子がちがった。

見るからに…不安げだった。

志保を見る目が、何かを求めている。

銀さん、なぜあなたはそんな目で、私を見るんですか。

教えて下さい――。

そのとき、後ろに気配がした。

殺気はない。

ゆっくりと振り返った。

そこには――……。

「よオ、久しぶりだな。……志保」

あのとと同じ、女物の蝶をあしらえた着物を着た、眼帯の男。

「高杉、晋助…」

その男が、たったひとりでした。

何ヶ月か前の雨の日と同じで、高杉からは殺気は感じられなかった。

だからとりあえず刀は抜かない。

その代わりに、何者にも変えることが出来ないような強い意志が全身から発せられていた。

「何か用ですか」

「前に言っただろう。覚悟しておけ、と」

確かに、そうだった。

けれど、忘れていた。

いや、忘れたかったのだ。

自分の過去を知るかもしれない、この男と出会った記憶を。

「私を連れていく気ですか？」

「ああ、そうだ」

高杉はニヒルな笑いを口元に浮かべた。

「私はあなたについていく気はありません。今の場所が気に入っていますので」

淡々と言った。

「真選組がか」

「はい」

何があるうと、今を捨てることはできない。

「そうだろうな。だがお前が記憶を取り戻したときにもそう言える

かどうか、俺は知りたいもんだがな」

そう言った直後、高杉は顔をゆがめた。

「どうしたら……お前は思い出してくれるんだよ、志保……」

「……………」

雨が天から降り出し、志保たちの体を強く打った。

次の瞬間——志保の体は、高杉の腕の中にあつた。

「……」

志保は必死に抵抗しようとした。

だが、それが出来なかった。

同じだ。

銀さんに触れたときと同じ…あつたかくて、懐かしいような…。

そういえば、前会ったときも抱きしめられたっけ…？

この人、顔に似合わず抱きつき魔なのか？

ぼんやりと、呑気にそんなことを考えた。

『晋ちゃん、遊んで？』

突然、声が頭の中に流れた。

『なんだよ？ うっせーな』

『高杉、遊んでやればいいじゃないか』

『お前は黙ってろ、ツラ』

『ツラじゃない、桂だ！』

頭が割れるように痛い。

周りの景色が見えない。

ただ分かるのは、自分の身を強く打つ、冷たい雨だけ。

『志保！』

気付けば、そこは懐かしさであふれる場所だった。

第50話 よみがえる記憶（前書き）

人間の記憶とは、不思議なものだ。

昨日の夕飯のメニューは忘れたりするのに、何年も前に見た夕暮れの景色は覚えていたりする。

そしてまた失った記憶を取り戻すキツカケというのも、意外なものだ。

第50話 よみがえる記憶

志保は、色とりどりの花が咲き乱れる花畑にいた。

まだ幼い、子どもの頃の志保だ。

花畑の頭上にはどこまでも、ところどころ雲が浮かぶ青い空が広がり、周りには山々が見える。

志保は、赤、オレンジ、白、ピンク、そして黄色の花、5本の花々を摘み、にっこりと笑った。

あどけない、純粹な笑顔だ。

そのまま立ち上がろうとしたが、何かを見つけたのかますます笑顔を深めてもう一度しゃがみこんだ。

志保が見つけたのは――四つ葉のクローバーだった。

そして両手いっぱいの花々を抱えて、走り出した。

のどかな田舎道を、志保は鼻歌を唄いながら歩いた。

太陽は半分沈み、西の空は茜色に染まっている。

同じような景色の道をしばらく行くと、大きな屋敷が見えてきた。

志保はそこに駆け込んだ。

庭では、志保より少し体の大きなふたりの子どもがケンカしていた。

それが日常茶飯事なのか、志保は少しも動揺しない。

「ただいまー！」

志保が明るく声をかけると、ふたりとも手を止めてこちらを見た。

ひねくれたような表情の男の子と、長い黒髪を後ろでひとつに結んだ男の子だ。

「ああ、おかえり」

「遅かったな」

「うん。あのね、花摘んでたの」

志保は笑ってふたりにそれぞれオレンジと赤の花を差し出した。

「はい、晋ちゃんとヅラにもあげます！」

「ヅラじゃない、桂だ。む、ありがとう」

桂はお礼を言って受けとった。

「別にいらねえよ。あと晋ちゃんってのも止める」

高杉はプイツと横を向きながら言った。

その顔は夕陽のせいかなんかのり朱く染まっているように見えた。

「そんなことを言っな。志保からの贈り物だぞ。素直にもらっておいたらどうだ？」

からかうように言った桂を、高杉は睨みつけた。

今度は頬がはつきりと朱くなっている。

また言い争いを始めた高杉の手にそつと花を握らせると、志保は屋敷の中へ入っていった。

ここは、たくさんの子どもが集まる寺子屋だ。

大抵の子は家から通っていたが、孤児^{みなしこ}だった志保はここに引き取られているのだ。

母屋の方へ足を向ける。

探している人物の部屋を訪れたが、そこに人はいなかった。

兄ちゃんが探してもいないときは、ぜったいあそこにいる。

志保はそう考えると、その場所へと走り出した。

志保が辿り着いたのは、教室のある屋敷を挟んで母屋の反対側にある道場だった。

中から竹刀を振る音が聞こえる。

(やっぱり、ここにいた)

「銀兄ちゃんっ！」

竹刀を振っていた白髪の天然パーマの子どもは振り返った。

死んだ魚のような紅い目をしている。

「なんだ、志保か」

「なんだって、最初から私だって分かってたでしょう?」

この寺子屋で銀時のことを「銀兄ちゃん」と呼ぶのは志保だけなのだ。

「はい、兄ちゃんにもお花」

志保は白い花を銀時に差し出す。

「……………」

銀時は黙ってその花を見つめていた。

そしておもむろに受けとり、それを志保の頭にさした。

キョトンとする志保に、銀時は言った。

「俺アそーいうのすぐ失くしちまうから、代わりにお前が持つとけ」

「…うん」

道場を出ようとする小さな背中に、銀時は稽古に戻りながらつぶやいた。

「…先生、部屋にいたぞ」

「うん！　ありがとう」

志保は夕陽が差す縁側を歩き、もついちど母屋の方へ戻った。

いちばん端の部屋の障子を開ける。

「松陽先生？」

そこには、髪の長くて優しげな表情の、志保たちの大好きな師がいた。

松陽先生は、書物を読んでいた手を止め、志保に優しく微笑んだ。

「おや、志保。おかえりなさい」

「ただいま。あのね先生、私みんなに花摘んできたの。先生ももらってください」

志保は机の下に隠していた手に持った花を取りだした。

「ありがとう」

「あと、これも」

ピンク色の花と四つ葉のクローバーも渡す。

「では、一緒に生けておきましょうか」

松陽先生は花瓶を取ってきて、それに黄色の花とピンクの花を生けた。

「それでは、これも」

そう言うと、松陽先生は白い花がさされた横の髪にクローバーをさした。

「似合っていますよ」

志保はその言葉に、にっこりと微笑んだ。

満月の夜だった。

空には満天の星が輝き、地上の者たちを見下ろしている。

そんな静かな世界に、不似合いなものが空に伸びていた。

「うつ…うつ…」

たくさん子どもたちが過ごした、寺子屋が――――炎をあげている。

すべてが真っ赤に染まり、ゴーゴーという炎の音と、パキパキという木が崩れる音が、響いていた。

そんな中に、志保のすすり泣きが交った。

燃え盛る寺子屋のすぐわきに、志保と銀時がひざまづいている。

「先生…松陽先生…！」

「志保…！！」

炎の中に飛び込もうとする志保を、必死に銀時が抑えつけていた。

志保たちが失ったのは、今まで過ごしてきた寺子屋だけではなく、
た。

みんなが尊敬し、愛していた師も――炎の中だった。

「先生……」

ふたりの目には、涙があふれていた。

「松陽先生EEEE!!」

大切なものを失った志保の声が、空に響いた。

また世界が変わった。

志保は狭い小屋の中で、そのときを待っていた。

周りには、数人の仲間たち。

桂小太郎。

高杉晋助。

坂本辰馬。

うつむく志保に坂本が声をかけた。

「志保、もうすぐ出るき…大丈夫じゃか？」

「心配なのはアンタの脳ですよ、辰馬」

「なんじゃと、人が気をかけちゅーってのに」

その会話が途切れると、また沈黙が舞い戻った。

「……………」

そのとき、小屋の戸が開いた。

そこから暗い中に光が差し込んできた。

「おい、そろそろだぞ」

白夜叉の服装に身をつつんだ、坂田銀時だ。

みんなが徐々に立ち、小屋を出ていく。

最後に扉をくぐったのは、志保だった。

「大丈夫か？ 志保」

銀時の紅い瞳を見上げる。

「…うん」

その日も、曇天だった。

すべてが灰色の、戦場。

攘夷戦争が、幕府が鎖国を終わりにした今でも、各地で続いていた。

銀時に続いて、戦場の真ん中へと赴く。

それから、背中あわせになった。

「行くぞ…志保」

「はい」

それぞれ刀を抜き、敵へと飛びかかっていく。

どれくらい時間が経ったのだろう。

だが、もうどれくらい敵を斬ったか分からないくらい、刀はたくさんの血で汚れていた。

そして、頬には涙の伝った跡が。

また、無意識のうちに泣いていたのだ。

いや、心の中では意識していたのか。

一息ついた瞬間、背後から殺気を感じた。

即座に振りかえり、手に刀をかけると案の定天人がいた。

「うらあああああ！！」

志保は、一太刀で自分よりいくらかも体の大きい天人を斬った。

天人血を振りまいて倒れた。

その場を去ろうとする志保に、ごく小さな天人の声が届く。

「雨、鬼…貴様らへの恨み…いつか必ず、我らが晴らす」

その言葉を言い終えたとき、絶命した。

また、涙が流れる。

雨鬼。

それがここ、血を血で洗う戦場に身を置く、志保の呼び名だった。

雨が、降り出した。

しかし、それでさえも体についた血を洗い流してはくれなかった。

第50話 よみがえる記憶（後書き）

ついに私、今日コンタクト tookりましたー！

入れるまでにめちゃくちゃ楽しみですけど、入れてみたらとっても楽しいです！

本当に冗談じゃなく、世界変わります！笑

第51話 運命

気がつくと、志保はまた高杉の腕の中にいた。

どれだけの時間が流れたのか、まったく分からない。

数分かもしれないし、数時間かもしれない。

もしかしたら、雨の降り注ぐ数日間だったかもしれない。

ただ、どちらにせよ周りの景色は何も動いてはいなかった。

強い雨の向こう側で、突然雷が光った。

その瞬間に、周りが白くなった。

『志保！』

高杉の肩越しに、まだ幼い銀時、桂、高杉。

それに、微笑んだ松陽先生が見えた。

どうやら無意識のうちに高杉のことを押しのけていたようだった。

驚いた表情の高杉が志保の目に映った。

「志保……」

包帯に覆われた人を寄せ付けない顔に、ちょっとひねくれたような幼き日の面影を、志保は見た。

「し…晋ちゃん…」

思わず、口からこぼれた。

「…!! お前…」

高杉の表情は、今にも泣き出してしまいそうだった。

「3日後、またこの時間にこの場所に来る。俺と一緒に来るかは—
—」

そこまで言って、高杉はキュッと唇を結んだ。

呆然とする志保を残して、高杉は足早に去っていった。

私は、あの高杉晋助や桂小太郎と幼馴染だった。

攘夷戦争に出ていた。

私が『雨鬼』だった。

『攘夷戦争末期の頃に突如姿を現した15、6歳の少女だそうです。隊を持たないことでも有名で、よく白夜叉や高杉晋助などと行動を共にしていました。そして天人を斬るとき涙を流すことから――

――『雨鬼』と呼ばれていました』

志保は山崎が土方に調査結果を報告していたとき、それを偶然立ち聞きしてしまったのだ。

そのとき何を思ったか、あまり覚えていない。

急いで自分の部屋へ戻る志保を、沖田が見ていたことにも気がつかなかった。

記憶を失っていたとはいえ、攘夷戦争に参加した身で真選組に入ってしまった。

私は――。

ふいに、雨が止んだ。

「志保？」

今だ鳴りやまない雷の音の間に、自分を呼ぶ声が聞こえた。

ぼんやりと、きれいな銀髪が視界にとらえられた。

「おい、大丈夫か？ 志保」

銀時の大きい手が、傘を持ち志保の肩を支えていた。

「ったく。沖田君が、お前が帰ってこないってうちに来たんだよ。あんまり心配させんじゃねエよ」

志保は、フツと笑った。

思わず出た、笑みだった。

「思い出したよ…」

銀兄ちゃん」

銀時が、ハッと息をのむ。

「志保、お前…」

「私、前辰馬に会った」

何か言いかけようとした銀時を遮って、志保が話した。

「辰馬に？」

あのにきにも、自分が攘夷戦争に参加していたのではないかと疑った。

だが、そんなこと信じたくなかったから――その疑いを、心の中に封じた。

「辰馬、言ってた…」

『運命は…残酷じゃき』
さだめ

「なんで、なんだろう…。これが、最初から定められていたことなら…なんで私は、生きてるんだろう」

一生懸命、頑張ってきたつもりだった。

みんなを護ってきたつもりだった。

だけど、それもみんな嘘だったのだろうか？

神様は、ひどすぎる。

「私…もうあの場所には戻れない」

そうだ。

私は、あの人たちと一緒にいてはいけないんだ。

銀時の傘から出る。

「志保……」

銀時の手が志保に伸びるが、志保は拒んだ。

「ごめんね、銀兄ちゃん。私……」

晋ちゃんと一緒に行く」

「銀ちゃん！ 志保、見つかったアルか！？」

帰宅したとたん、新八と神楽、それに定春が駆けよってきた。

「ああ。なんか道に迷っちゃったらしい。真選組まで送ってきたよ」

「良かったですね！」

新八がホッとしたように言った。

「じゃあご飯にしましょうか」

「ああ」

新八の後に続いて居間に入りながら、先ほどの出来事に思いを馳せた。

『思いだしたよ…銀兄ちゃん』

とうとう、思いだしてしまった。

真選組にいる志保が、攘夷戦争に参加した過去を思い出してしまったら、どうなるかは分かっていた。

そして思いだすいちばんのキッカケになりそうなものが、高杉であるということも。

分かっていて、止められなかった。

「銀ちゃん、早くするアル」

だが、止めて何になったのだろう。

過去を封じ込めて今を過ごしていても、それは志保のためにはならない。

過去には向き合わなければ、前には進めない。

たとえそれが、変えることのできない運命だったとしても。

『晋ちゃんと一緒に行く』

志保は、もう真選組にはいられないと言った。

攘夷志士であつた志保を真選組に入れたとして近藤たちは咎を受けるかもしれない。

志保は、少しでもそれを防ぎたかつたのだろう。

「銀ちゃん？」

いつまでたつても食卓につかない銀時を不思議に思い、神楽が駆け

よってきた。

行かないでほしかった。

これ以上、大事な仲間を失いたくはなかった。

だが、決意した志保を、銀時には止めることはできない。

止めることが出来るのは――アイツらだけだ。

第52話 最後の日

「あーっ、志保ちゃん！」

志保が真選組の門をくぐると、たまたま通りかかった様子の山崎が声をかけてきた。

「ずぶ濡れじゃないか…遅かったし、心配したんだよ」

「ごめんなさい、ちよつと道に迷いまして」

志保はちよつと笑いながら言った。

「またかい？ いい加減巡回の道くらい覚えなよ」

「そうですね。山崎さんの存在よりは早く覚えられると思います」

「何それ！？ 俺出てくるたびに地味キャラ扱い！？」

そんな会話をしながら、いつの間にか志保の部屋の前まで来ていた。

「とにかく、そんな格好だと風邪ひくから着替えておいで」

「はい」

志保は山崎と別れ自分の部屋に入る。

「……………」

その瞬間に志保の中で何かが切れ、その場にへたり込んだ。

何も気づかれていないだろうか。

何も無いように、振舞えていただろうか。

普通に振舞うのが、こんなに難しいことだとは思わなかった。

志保は濡れた体を拭き、たまご色の袴に着替えた。

「ふー…」

とにかく、いつものように過ごさなければ。

「志保、おかえり！」

いつも宴会をやる部屋に入った志保を待ち構えていたのは、すでに出来上がっている近藤だった。

「…近藤さん、何やってんですか？」

「ガハハハ、ちょっと遅くなったがなー、総悟の退院祝いだー！」

「ほー」

部屋を見渡すと、各々酒瓶を手に隊士たちが酔っ払っている。

「近藤さん、アンタがそんなんじゃ他の隊士に示しがつかないだろ」
そう言う土方も頬が真っ赤になっている。

「まあまあ、お前も飲めや」

呆れる志保に、沖田は上からのしかかってきた。

「沖田さん…重いです」

「いいじゃねーか、今日は無礼講だぜい」

「あなたは年中無礼講ですけどね」

ほら、飲めと酒瓶を押し付けてくる沖田をそつと振りほどいて、志保は笑顔で言った。

「私は今日は遠慮しておきます」

志保は酔っ払ってグタグタになった隊士たちの介抱に向かった。

ひとりずつ優しく水を飲ませたりしている。

いつもの志保だったら「何寝っ転がってますかコノヤロー」とか言いながら蹴り上げてるだけだったのに。

「...?」

「志保ちゃん、疲れたろ？ みんな風呂入り終わってるし、君も入っといで」

今回もひとり飲まずにみんなの餌食になっていた山崎が志保に声を

かけた。

「あ、ありがとうございます」

志保は素直に風呂場に向かった。

みんな百も承知だが、真選組で女であるのは志保だけだ。

だから風呂なども問題になってしまうのである。

厠は何かひとつだけ女用をつくってもらえたのだが、風呂はそうもいかず、みんなとずらして夜遅くにひとり入っているのだった。

袴を脱ぎ、タオルを持って浴場のドアを開けた。

当然だが、そこにはだれひとりいずがらんとしていた。

髪の毛と体を洗い、広い湯船につかる。

体の力を抜いて、ぼんやりと中を見つめる。

「……………」

やっと、今日を終えることが出来た。

最後に、みんなと過ごすことが出来た。

これで、思い出をたくさん持って、出ていくことが――。

『志保、おかえり！』

『お前の好きにしたらいい。やってみろ』

『志保ちゃん！心配したんだよ』

『副隊長ー！』

ハッとした。

みんなの顔が、鮮明に浮かんでくる。

近藤さん。

土方さん。

山崎さん。

原田さん。

そして――。

『俺は、お前がいてくれて、よかった……』

沖田さん……。

身元のはっきりしない怪しい私なんか、そう言ってくれたのに。

私、本当は――……。

志保はゆらゆらのぼる湯気の中で、身を震わせて泣いた。

次の日。

宴会の次の日で誰もがまだ熟睡している早朝の時間、土方は朝の煙草を吸っていた。

冬の朝はシンと冷え込んでいるが、土方は嫌いではなかった。

煙草の灰を落とすため、灰皿の淵にトンと置いたとき。

「副長、副長オオオ!!」

静かな朝に似合わないドタドタという激しい足音がだんだん近づいてきた。

前置きもなしに、いきなり障子が開け放たれた。

そこには焦りまくった山崎の姿が。

「いい加減にしろ、山崎。うるせーぞ」

「副長、そんな落ちつき払ってる場合じゃないですって！ 大変です!!」

これ見て下さい、と切羽詰まった様子で白い封筒を差し出してきた。

山崎の剣幕に土方は何も言わずに封筒を受け取った。

「!!」

そこには――丁寧な字で「脱退届」と書かれてあった。

第52話 最後の日（後書き）

もうすぐ2011年も終わりですね！

ところで、私の学校ではフランス語も勉強出来るんですけど2011年はフランス語で「deux mille onze」(ドウ ミル オンズ)「って言うんです。

2012年は「deux mille douze」(ドウ ミル オンズ)「なんですな。

今まで「ドウ ミル オンズ」って言い慣れてたので、変わるのには
ヘンな感じですね。笑

第53話 残した手紙（前書き）

最後、少しばかり変更致しました。

かなり流れを変えようと思いますっ！

第53話 残した手紙

『拝啓 真選組のみなさま。

突然、このような形で手紙を書くことをお許しください。

誠に勝手なこととは思いますが、真選組を脱退させてください。

こんな私を少しでもみなさんの仲間にしてくださったこと、本当に感謝しています。

ありがとうございました。

さよなら。

雨宮志保』

志保は筆まめなほうではなかった。

手紙は、とても短かった。

「……」

「志保ちゃん、いきなりこんな…どうして!」

逃げられてしまったか。

俺に探られてることを気取ったか。

自分の隠された過去を思い出したか。

土方は、志保が雨鬼であるとほぼ確信していた。

そろそろ潮時だと、自分で分かっていた。

だが、志保が消えたという事実を突き付けられて浮かび上がってきた想いは、攘夷志士の雨鬼を捕えられなかったことより、真選組の仲間である志保を失ったことだった。

「副長、のんきに構えてる場合じゃないでしょ！」

「ザキ、何朝っぱらから大声出してらんでイ？」

そこへ、沖田が顔を出した。

昨日の二日酔いが響いているのか、少し具合が悪そうな顔だ。

「隊長、大変ですよ!!」

「あ?」

「志保ちゃん、真選組やめるって出て行っちゃったんですよ!!」

「え?」

その言葉を聞いた瞬間、沖田の表情と体が固まる。

目は見開かれ、魂が抜け落ちてしまったかのような表情だ。

「雨宮…なんで…」

「沖田さん、しっかりしてください!」

山崎が沖田の肩を揺さぶる。

「とにかく、志保ちゃんのこと探しましよう。今朝出たなら、そう遠くまでは行っていないはずです」

「ああ」

沖田は部屋を飛び出して行った。

「土方さんは、探さないんですか？」

「ああ」

土方はそのとき、手紙に2枚目の紙があることに気がついた。

『嘘。』

そんなの、本当は嘘。

本当は、もっとみんなと一緒にいたかったです』

紙には、乾いた涙の跡があった。

「……………」

志保を見つけるのは、沖田だという確信があった。

そして土方は、沖田ならきっと見つけて帰ってくるだろうと信じていた。

攘夷志士という敵ではなく——仲間として。

どこを探しても、志保はいなかった。

行きつけの甘味処にも、巡回の道にも、かぶき町のどこにもいない。

あちこち走りまわったが、志保の姿を見たという者も、誰もいなかった。

息が切れる。

立ち止まって、しゃがみこんだ。

（雨宮…どこ行っちゃったんでイ…）

汗をぬぐい顔を上げると、「万事屋銀ちゃん」の看板が目に入った。

(まさか…)

「旦那！」

銀時がジャンプを顔につけてソファーに沈んでいると、沖田がチャイムも押さずに飛び込んできた。

そうか。

志保は——出ていったのか。

銀時はジャンプをはずし、汗だくの沖田に向かい合った。

「志保なら、ここにはいねえぞ」

「！！ ここにはって…旦那、アイツが出ていくってこと知ってたんですかイ！！」

「ちよつ、沖田さん！」

新八の制止も聞かずに沖田が銀時に掴みかかった。

「なんで雨宮のこと止めてくれなかったんでさア！！」

「……………」

銀時を睨みつけるその目を、静かに見返した。

「オイ、サド！ 志保が出ていったって、どーいうことアルか！」

神楽が間に入ってきたが、沖田は銀時だけを見ている。

銀時は、一息ついてから口を開く。

「それはなア、俺には志保は止められねエからだよ」

沖田が目を少しだけ見開いた。

「俺は、アイツを止めちゃいけねエんだ…。今のアイツの仲間は、俺じゃない。志保を止めることが出来るのは————お前らだよ」

「…」

沖田はうつむいて、銀時の胸倉を掴んでいた手を外した。

銀時はジャンプのページをめくりながら言った。

「志保は昨日、かぶき町の北のはずれにいた。今日もそこに行ったんじゃないか？」

沖田はパツと顔を上げた。

唇をかむ。

「…ありがとうございます」

来たときと同じように嵐のように去っていった。

「銀さん…僕たちも志保さんのこと探した方が…」

「いや。アイツらに任せるんだ」

銀時は目をつぶった。

——沖田君、頑張れ。

志保は昨日の場所に辿り着いた。

まだ誰も起き出さない早朝に、荷物をまとめて真選組を出てきた。

昨夜のうちに書いておいた手紙を残して。

まとめた荷物の中には、沖田に買ってもらった着物や、みんなで撮った写真も入っている。

やっぱりまだ、未練を吹っ切ることなんてできそうにない。

そのとき、後ろから人が歩いてきた。

振り返ると、約束していた人物がゆっくりゆっくり、近付いてきていた。

「晋ちゃん…」

「…来たか」

高杉がつぶやいた。

それまで鋭い視線だったのが、志保を見ると柔らかくなった。

「…いいのか？」

高杉が問いかけた。

この人は、昔から口数が多い方ではなかった。

自分と一緒に来たら、今までの仲間から命を狙われることになる。

江戸の街を、二度と自由に歩けなくなる。

それでも、いいのか――？

「いいんです。その覚悟で、ここに来てるんだから」

志保は少し高杉を睨むように見ながら言った。

「そうかい。…じゃあ、行くぞ」

高杉が、手を差し出した。

未練は、たくさんある。

多すぎるほど、たくさん。

だけど、離れたらきっと忘れられる。

そのほかに、賭けるしかないんだ、今は…。

志保はその手を、ぎゅっと握りしめた。

沖田は銀時が教えてくれた場所に向かって全力疾走を続けた。

もうすでに体力の限界は超えている。

ゼーゼーと息が切れている。

だが、何に変えても志保は失いたくなかった。

坂を登り切って、視界が開けた。

だがそこには、誰の姿もなかった。

沖田は棒立ちになる。

「……………」

——間に合わなかった。

沖田は膝を地面につく。

「……クソオオオ!!」

虚しい声が、空に響いた。

薄闇の中。

志保と高杉は笠を深くかぶり川に浮かぶ小さな舟に乗りこんだ。

ゆっくりと川を下っていく。

もう、戻れない。

—— さよなら、みなさん。

だんだん深くなっていく闇の中で、
灯籠の灯だけがゆらゆら揺れた。

第53話 残した手紙（後書き）

私の書く高杉さん、なんかナヨナヨじゃね？

弱杉さんじゃね？

感想、お待ちしております！

第54話 薄闇から暗闇へ

海に辿り着いた舟から降り立った志保は、高杉に連れられて大きな船に移った。

船は闇の中で不気味に存在感があった。

波はまったく荒立たず、静かなばかりだ。

「これが鬼兵隊の所有する船さ。普段俺たちはここで暮らしている」

「攘夷志士の分際でいいものに住んでいますね」

高杉がフツと笑った。

「よく言うじゃないエカ」

「いやあ、つい本音が…」

高杉はまあいい、と言って中へ入っていく。

志保は高杉の後に小走りに続いた。

入口には、ヘッドホンとサングラスをつけたツンツン頭の男が待ち構えていた。

鬼兵隊の実質？2、かわかみばんさい河上万斉だ。

「晋助、ずいぶん遅かったでござるな」

「ああ。ちよいと遊んでたもんでな」

「…というか、その子どもは何でござるか？」

志保は子どもと言われてカチンと来たが、そんな志保に気付かず万斉は続けた。

「晋助、子猫を拾うように子どもを連れ帰ってもらっては困る。…まさか、晋助がこえた…」

「誰が子どもですかコノヤロオオオ!!」

万斉の背中に志保のタイキックが決まった。

「いてて…何するでござる」

「何するでござるじゃねーですよコノヤロー。誰が子どもですか。私は正真正銘18歳の大人です!」

「18歳? 拙者はてつきり13、4歳かと…」

「チビって言いたいならハッキリ言えはいじやないですか! つかこの人が父親ってかなり無理があるでしょ! よくてお兄さんくらいでしょーが!」

そんな初対面のふたりのやり取りを高杉は面白そうに見ていたが、やがて口を出した。

「万斉、そいつは雨宮志保。まだハナタレのガキだがコイツが『雨鬼』だよ」

「誰がハナタレだ」

高杉の言葉に万斉がほう、と感心した表情（といってもグラサンで目が隠れているので憶測だが）になったが、直後眉をひそめる。

「晋助、雨宮といえば真選組に入ったのではなかったか？」

「あア、そうだ」

ガキイイイイン

とたんに刀を抜かれたが、志保はそれを受け止める。

「…なぜ真選組女隊士『青薔薇』殿が敵陣の本拠地なんぞに来たんでござるか」

互いの刀が、加えられる力によってガタガタ震える。

「返答によつてはその首、もらい受ける」

志保はポーカーフエイスのまま答えた。

「真選組はクビになりましたので」

「…何？」

さらにグツと刀に力を込め、万斉を押し返した。

「大丈夫です。真選組にここの居場所を知らせて一網打尽に、とか考えてませんから」

「……………」

万斉はしばらく興味深げに志保を眺めていたが、やがてフツと笑みを漏らした。

鋭い雰囲気似合わず、優しい笑みだった。

「良からう。だが晋助、拾い癖は直せ」

「ああ」

万斉はもう一度フツと笑ってその場から立ち去った。

再び歩き出した高杉の半歩後ろをついて行きながら志保は訊ねた。

「今の人も幹部なんですか？」

「ああ。河上万斉——『人斬り万斉』って異名も持ってるがらア。お前仮にも真選組隊士だろう。知らねーのかイ？」

「何度か聞いたことはあると思うけど…顔は知らなかったし」

「おめえ、人の顔と名前覚えるの苦手だったもんなア。この分だと——から自己紹介させにゃいかんようだぜ」

そうこうしている間に階段を下り、ひとつの部屋の前についた。

中に入りながら高杉が言った。

「ここがおめえの部屋だ。今日はとりあえず呼びに来るまでここにいろ」

「うん」

その部屋はこじんまりとしていたが、きれいな部屋だった。

調度品は青色に揃えられ、窓からは海の中が見えた。

「わあ……」

初めて見た海の中は色とりどりの魚が泳ぎ、澄んで美しかった。

「じゃあな」

高杉はそんな志保を一瞥してから部屋を出ていった。

「ふう」

志保はベッドに勢い良く仰向けに転がった。

ここまで、長い旅だった。

江戸から、武蔵のあたりまで小さい舟で下ってきたのだ。

赤と紫が交った薄闇から本当に灯籠しか光がない真っ暗闇に景色が変わるほどだ。

今まで見たことのない風景を見るのはなかなか面白かったが、何せ一緒にいるのが高杉だ。

記憶の中の小さな高杉はよくしゃべったし、みんなから聞くイメー
ジも決して無口という訳ではないのだが、再会したばかりでこん
な状況の中おしゃべりという訳にもいかない。

本当に時がゆっくり流れたように感じた。

「……………」

とにかく、不安だった。

真選組に入隊したときさえも、こんな気持ちにはならなかった。

この気持ちは――あのとき以来だ。

約2年前。

たったひとりで暗闇の森で目覚めた、あのとき。

自分の身を守るものがこの剣しかなくて、自分自身が誰かも分からなくて、どうしようもなく心細さが胸に渦巻いていた。

恐怖なら、スノードロップの事件のときだって、その前だって幾度となく味わってきた。

だが、それとも違う大きな何かに飲みこまれてしまいそうな、逃れようのない不安。

『志保！』

「みんな…」

ギュツと自分自身の肩を抱いた。

そうでもしないと、自分の中の何かが壊れてしまいそうだった。

出てきたばかりだというのに、江戸のみんなに会いたくてしょうがなかった。

第54話 薄闇から暗闇へ（後書き）

万斉の言葉遣いって難しいイイイ!!

高杉もそうだけど鬼兵隊の人たちってなんでこんなに書きづらいの
!?

これからまた子を登場させて、武市さんを登場させて…。

ああ、先が思いやられる…。

どうかこんな私にご感想のお恵みを（・o・）／

第55話 VS弾丸（前書き）

第55話 VS 弾丸

「そうか、志保は行っちゃったのか…」

「…すいやせん」

うなだれる近藤に、沖田はただただ謝ることしか出来ない。

「いや、お前は悪くねエ。よく追いかけて来てくれたな。今日はもう休め。トシもだ」

「…ああ」

沖田が自室に入っていくのを見届けると、土方も副長室に入った。質素な着物に着替え、いつものように煙草に火をつけた。

「……………」

あれでも落ちついたほうなのだ、近藤は。

志保が消えたとき、今まで見たことがないくらい取り乱していた。

自分も志保を追いかけると言っ、江戸の平和なんか今はどうでもいいと言っ、聞かなかった。

なんとか土方が、必ず総悟が連れて帰ってくる、あんたはここで腰を据えて待て、と引きとめたのだ。

だが…。

分かっているのだ、沖田は悪くない。

あんなに必死に追いかけて行ったんだから、どうしても間に合わない。

「くそオ…」

なんだだ。

なんで、お前は行っちゃったんでイ。

『隊長が、私がいてくれてよかったって言うてくれたときも、
とても嬉しかったですよ?』

そう…笑ってくれたのに。

『ここなら、私も雨宿りできるのかな……』

そう言ったじゃねエか！！

。なのお前は…自分から、また雨の中に出て行っちゃった――

自らの手で、傘を放り投げて。

沖田は敷布団をぎゅっと震える手で握りしめて、声にならないうめき声をあげた。

「何なんスカ、この女は！」

志保が高杉に連れられてきた部屋に入ったとたん、女の子のキツイ声が飛んできた。

和室には、先ほどの河上万斉、黄色い髪の子、大きな体の男が志保たちを待っていた。

「コイツは新しく鬼兵隊幹部になる雨宮志保だ」

「また晋助殿がスカウトしてきたんですか」

大きな男が無表情のまま言った。

「このふたりには初めてでござろうな。こっちは『紅い弾丸』と恐れられる来島また子。こっちは鬼兵隊の頭脳。参謀の武市変平太でござる」

万斉が高杉に代わって紹介した。

武市は「どうも」と言って軽く頭を下げた。

「こんなチビにいきなり幹部が務まるんスカ!？」

叫んだまた子に上から睨みつけられるが、志保はひるむことなく無表情でじつと見返す。

「何なんですか、この船の人たちは人をチビ呼ばわりするのが好きなんですか」

「実際アンタチビじゃないスカ」

「まあ、雨鬼殿なら経験も豊富。大丈夫でござろう」

「!」

「!」

万斎がサラリと言った言葉にまた子と武市が反応した。

「なっ…雨鬼って、あの『雨鬼』ッスか!？」

「……………」

慌てだすまた子と対照的に武市はじつと志保を観察する。

「ほう、こんな幼い子があの伝説の雨鬼…あと2、3年したらすごいことになるですよ」

「うっさいロリコン」

「ロリコンじゃないフェミニストです」

「武市変態いい加減にしてくださいよ」

「変態じゃない、先輩だから」

「つーかこの娘はこれ以上成長しないでござろっ」

「いや、人をめぐって何っー話してんですか」

「とにかく!」

話を打ち切るようにまた子が大声を出した。

「私はこんな小娘、雨鬼だろうがなんだろうが幹部なんて認めない
ツスからね!」

「別に私もあなたに認めてもらおうなんて思いませんから」

「生意気ッスよ！」

このふたりはウマが合わないにも程がある。

万斉と武市はため息をついて、高杉はやはりいがみ合っふたりを面白そうに見ていた。

「じゃあ、認めさせればいいだろう」

高杉がふいに、言った。

その声はうるさかった部屋が一瞬にして静かになるような声だった

「晋助様……」

「来島、志保と勝負しろ」

「ったく、晋ちゃん何考えてんだか…」

案内されたところで待たされながら、志保はつぶやいた。

手入れをしたばかりの刀を鞘から出してみると、自分の顔が映るほど磨かれている。

「そういえば、主は晋助の幼馴染だったんでござるな」

いつの間にか隣りに来ていた万斉が言った。

「河上さん…」

「万斉でいい」

「河上さん、なんでそのことを？」

「今普通に無視しなかったか？ …一度酒に酔った勢いで話してくれたことがあってな」

寺子屋に通っていた幼き頃。

一緒にいた白夜叉、桂小太郎の他にもうひとり女の子がいた。

自分より年下のその子は、いつもトコトコ自分にくつついてきたという。

「あのときほど優しい表情をしていた晋助は今だ見たことがない…」

「へえ」

そして一緒に攘夷戦争に参加した。

そして攘夷戦争の最中——さなか姿を消した。

『ずっと一緒にいてほしかった』。

そう言っていたでござるよ。

晋ちゃんには、似合わないなあ…。

「よほど主のことが好きだったんでござるうつ、晋助は」

「……………」

感傷に浸っていたそのとき。

「さあ、準備は出来たツスよ!」

また子の声が響いた。

「用意はいいツスカ」

「いつでもどーぞ」

志保は刀を構え、また子を見据える。

先に動き出したのはまた子だった。

志保の周りをすばやく動くまた子から志保は自然を外さないようにする。

ダン！

ダン！

2発撃った弾を志保は華麗に避ける。

また子思わず感心したようにむ、という表情になったがすぐに次の攻撃に出る。

「まだまだ！　こんなもんじゃないッスよ」

さすがは「紅い弾丸」。

その銃の腕前は並大抵のものではなく、危うくあと少しで志保の体を撃ち抜くものもあった。

だが志保も負けずに攻撃を仕掛けていく。

また子の腕を斬りつけ、そこから紅い血が滴る。

「ッ！ なかなかやるツスね」

「そちらこそ」

お互い息をつく。

今のところどちらが優勢というわけでもなかったが、銃使いのまた子に接近戦を持ちかければ撃たれてしまう危険性が高い。

とにかく、長期戦に持ち込むしかない。

後ろ側に回り込んだ志保に、また子はすばやく振り返って弾丸を放とうとした。

「!?!」

だが、いくら引金を引いても弾は出てこない。

——この時を待っていた！

銃使いが最も恐れること、それは長期戦。

弾が切れてしまったら、もう勝ち目はない。

「くっ……」

ひるむまた子の首に、志保は光を放つ刀を当てた。

「勝負……あり、ですね」

「……しょうがないッスね」

敗北宣言をしたまた子に、志保は刀を鞘におさめた。

「…これが『雨鬼』の実力か。また子に長期戦を仕掛けられるとは」

「なかなか戦力になりそうですね」

「アンタ、意外と強いッスなあ」

「えへん！」

得意げに胸を逸らす志保に、また子は強い口調で言った。

「けど、晋助様は渡さないッスから！」

「…へ？」

そんなことを言われるとは思いもしなかった志保は、ふぬけた声を

出してしまった。

「志保」

「はい」

高杉に声をかけられた志保は、集まったみんなの輪から視線を外す。

「早速だが任務だ。お前ら全員にだ」

「何でしょう」

高杉はゾツとするような黒い笑みを浮かべてつぶやいた。

「真選組を――潰せ……！」

「……！」

第55話 VS弾丸（後書き）

万斉さんの口調がいつまでたっても掴めない…。

「いざろっ」とか言っつけ？

それに私の勝負場面の描写の下手さといったら…。
誰でもいいのでアドバイスをー＼（-o-）／！

第56話 宣戦布告（前書き）

明後日から学校が始まるので、また更新ペースが遅れると思います。
ですが地道に続けていきたいと思しますので、よろしく願いいたします（●^o^●）

第56話 宣戦布告

志保が真選組から去ってから、もう2週間経つ。

それから、みんなどこかぽっかり穴が開いてしまったかのようにだった。

志保が現れる前はこれが普通だったのに。

志保の存在を知ってしまったから――。

1度灯りの存在を知ってしまったら――もう元の暗がりには戻ることは出来ない。

そんなわけで、真選組の士気はいまいち盛り上がらないのである。

「トシ…みんな最近元気ないな」

「ああ、そうだな」

局長室で刀の手入れをしながら土方と近藤は話す。

「やっぱり…志保がいないからかな」

「近藤さん…そっぴやアంతもだいぶやつれたぜ」

「ああ…そうかもな」

近藤は苦笑いしながら答えた。

志保を実の娘のように大切にしていた近藤だ。

突然何も言わずにいなくなってしまうってショックに違いない。

それは、自分も同じだった。

まさかなくなる前はただの隊士の存在に自分の心が左右されるだなんて思いもしなかっただろう。

そしてアイツも――。

自分たち以上に、心に深い傷を負っただろう。

沖田は、今日もただ江戸の街をひたすら歩く。

何日もかけて、そこら中を。

そこに、自分より頭ひとつ小さい真選組の隊服を来た少女を探して。

志保が姿を消していちばん大ダメージを受けているのは他でもない
沖田だろう。

仕事も手につかなくなり（もともと仕事なんかしないが）、日に日に志保のことを考える時間が増えていく。

ふいに顔を上げると、志保がいつも団子を買ってくる甘味処が賑わっていた。

アイツ、ここの団子好きだったね——。

『あーっ隊長！ また私の団子勝手に食べて！！ やめてくださいって何度言えば分かるんですか！』

そんな怒った顔の志保が見たくて、それからもずっと志保のおやつを取りつづけた。

『もう、たまにはちゃんと仕事してください。私が安心してサボれないじゃないですか』

たまには雨宮のぶんの書類、やってやればよかったなァ――

後悔時すでに遅し、とはよく言ったものだ。

後で悔いても、もう遅い。

『隊長！』

『沖田さん……』

「総一郎くん」

「……………」

今一瞬、記憶の中の志保の声に交じって変な声が聞こえた。

「ねえ、総一郎くん聞こえないの？　おい」

意識と焦点をゆっくり戻すと、そこにはいつもの半眼とけだるそうな男――坂田銀時が目の前にいた。

「旦那……。何ですかイ？」

「ありやりや、俺の『総一郎くん』にもツツコまないなんてかなり重症だなア」

銀時がかぶりを振って言った。

「お前、こんな道の真ん中につつ立ってたら邪魔だぞ」

「……すいやせん」

銀時は驚いたように目を瞬いてから、呆れたような表情になった。

「こりゃ本当に重症だな。素直に謝るなんざ、お前らしくねーぞ」

「……………」

「志保だつて、そんなんじや喜ばねーぞオ」

沖田はキツと銀時を睨みつけた。

「喜ばねーって、俺たちをこついうふうにしてるのはアイツじゃないですかイ！　なんで何も言わずに行っちゃったんでイ——
——旦那！！」

「……………」

銀時は困ったように黙り込んだ。

「アイツは結局、俺たちを捨てて——」

その言葉を聞いた瞬間、銀時の目が鋭く炎をも燃え上がらせた。

グツと沖田の胸倉を掴む。

「!」

「甘ったれんじゃねエ!!」

銀時の突然の大声に道行く人たちはビクツとして振り返る。

沖田も普段めつたに怒らない銀時の怒りの表情にひるむ。

「お前、志保がどんな気持ちで出て行ったのか分かってんのか!!」
志保はな———」

プルルルル　プルルルル

そのとき、銀時の声を遮って沖田の懷から音が流れてきた。

銀時はチツと舌打ちして沖田の胸倉を掴んでいた手を乱暴に離れた。

沖田はスカーフを整えて、音の原因であるケータイを取りだした。

画面を見ると、そこには「土方十四郎」の憎き文字。

よりによってこんなときに……。

「何なんですかイ」

『オイ総悟！ お前今どこだ』

「え？ かぶき町ですけど…」

『チツ外か…。どこでもいい！ テレビ見る。今すぐだ！』

沖田は通話したまま辺りを見回す。

すぐ近くにテレビがあるような家電屋も電気屋もない。

だが、「万事屋銀ちゃん」の文字が目飛び込んできた。

「おい、どうした？」

「旦那、ちょっとテレビ借りまσα！」

「えっ、テレビ借りるってどーやって？」

つい先ほどまで怒っていたのにそんなアホなことを言う銀時を無視して、沖田は万事屋に飛び込んだ。

「サド！ お前何人ン家にズカズカ上がり込んでるアルか！！」

「何大声あげてるの神楽ちゃん？ あれ、沖田さん！？」

神楽も新八も無視して、沖田は居間のテレビをつけた。

砂嵐状態の画面だったが、バンバン叩くと徐々に写りがよくなっていき、パツと画面が出た。

銀時も追いつき、一緒に画面を見つめる。

そこには銀時が大ファンだという結野アナが切羽詰まった表情でニュースを読み上げていた。

『速報です！ 今情報が入ってきました。最も恐れられている攘夷志士、高杉晋助率いる攘夷集団鬼兵隊から、テレビ局に脅迫状が届きました』

「何だと……！！」

『今その文面をお伝えしたいと思います！ 明後日の日没、鬼兵隊は江戸の北の山にて姿を現す。青き瞳の雨鬼の復活と共に。真選組よ、我らを捕えてみよ。』……何なんでしょうか、これは』

『真選組への宣戦布告、予告状でしょうか。それに青き瞳の雨鬼、
というのが気になりますね』

『復活、というからには以前鬼兵隊に所属していた人物なんですよ
うか』

『分かりません』

その頃、土方も屯所で同じ映像を見ていた。

青き瞳の雨鬼と共に――。

脳裏に浮かぶのは、たったひとりの少女だった。

図面……！

第56話 宣戦布告（後書き）

さて、ここまで来たはいいが、どうやって繋げるかが問題だよなあ…。

でも、頑張ります！（^^）！

第57話 決意の誓い（前書き）

いつの間にか記念すべき第60部…！！

でもそれがこんな中身の無い短い内容とは。

時が経つのは早いものですね。

あと少しで「銀魂―Lonely rainy day―」も終わりますが、よろしく願いいたします（*^|^*）

第57話 決意の誓い

『明後日の日没、鬼兵隊は江戸の北の山にて姿を現す。青き瞳の雨鬼の復活と共に。真選組よ、我らを捕えてみよ』

速報ニュースの直後、真選組では各隊の隊長を集め緊急会議が行われていた。

「ほとんどの者がさっきのニュースを見ただろうが、見てない奴のために一応説明しとく」

沖田をはじめとする1番隊から10番隊までの隊長、それに監察である山崎が無言で土方の顔を見つめる。

沖田の隣りに、そこだけぽっかり空間があった。

本来ならそこは、「副隊長」という特別に設けられた役職である――
――志保がいる場所だった。

だがもうそこを誰もわざわざ見たりしない。

いないことを何度確認したって志保が帰ってくるわけではない。

でも、その席を詰めもしなかった。

やっぱり少しでも希望を抱いて、失望して、またちょっと希望を残して――そんな、繰り返しだ。

「明後日の日没――5時頃に高杉率いる鬼兵隊が北の山に来る。予告状の文面の感じだと、総大将自ら出てくると見ていい。真選組がない隙を狙おうとする輩も出てくるだろうから、各隊半分に分けて北の山と、普段の江戸の警備に当たらせる」

みんながうなずく。

だが沖田はそんなことより、もっと気になっていることがあった。

「土方さん……」

痺れを切らして口を開いた沖田に、土方が分かっているという表情でうなずいた。

「それと、気になる内容があった。『青き瞳の雨鬼の復活と共に』。雨鬼つっーのは山崎の調べで2年ほど前に攘夷戦争に参加した伝説の攘夷志士だっていうことが分かってる」

土方は、一呼吸置いて早口に言った。

「俺は雨鬼は雨宮だと思っている」

「「「！」「」」

「トシ、本気が…！」

みんなが一斉に息をのんだ。

近藤も机に手をついて身を乗り出す。

沖田に至っては驚きすぎて何も言えないようだ。

「思ってるっつーか、ほぼ確信だ。雨宮が記憶を失ったといったのが2年前。確か雨鬼の年齢は15、6歳。雨宮は18歳——ピツタリだ」

「だが……」

「それにアイツはついこの間真選組^{ウチ}から姿を消した。そして鬼兵隊に『雨鬼』が現れた。偶然にしちや出来過ぎじゃねーか」

「……………」

本当に、土方の言つとおりだった。

文句のつけどころがない。

「『雨鬼』の正体が雨宮だろうとなんだろうと俺たちの敵にや変わりねエ」

斬れ」

その後、会議室には沖田と土方だけが残った。

「……………」

沈黙が空間を覆い尽くす。

沖田は煙草に火をつけるその背中をじっと見続けた。

土方がその視線に気づいているかどうかは定かではないが、煙草の煙を吐き出しながら外のほうを向いていた。

「土方さん」

沖田は低い声で静かに問う。

「何で教えてくれなかったんですア…雨宮のこと」

我ながら子どもっぽい質問だと思った。

土方の背中には終始何も言わない。

だが沖田には絶対聞いていると分かっていた。

「雨宮が元攘夷志士だって分かったら、隊の士気に関わるからですかイ。疑心暗鬼になるからですかイ。それとも…」

「ちょっとでも……かけてたんだよ」

だんだんうつむきがちになっていた顔を上げると、土方の鋭い相貌が、かすかに哀しげな色を帯びて沖田を見つめていた。

そんな表情をするのは――――卑怯だ。

「いや、信じてたかったのかもしれないエ。俺だって、心が無いわけじゃねーんだ。けどな、雨宮は攘夷志士だった……それも伝説の鬼だ。今も昔も――――俺たちの敵だ。それを、忘れるな」

そう言った土方の表情には、たくさんのものが入り混じって見えた。

土方はそのまま部屋を出て行った。

「……………」

沖田はひとり残された部屋で、しばらくぼんやりと中を見つめていたが、やがてごろんと寝っ転がった。

攘夷志士だった過去？

そんなモン、知るかっでんでイ。

たとえどんな過去があるって、誰が何と言おうと、沖田にはどっぴりも良かった。

本当は真選組1番隊隊長ともあろう人物がこんなことを思っていないのだろう。

だが、それほどまでにこの思いは強かったのだ。

それほどまでに、志保と自分たちはたった今この瞬間までずっと――
――強い絆で結ばれている仲間なのだ。

志保だって、きっとそう思っていてくれるはずだ。

明後日の決戦で――仲間を、雨宮志保を、取り戻して
見せる。

絶対に。

沖田は淡い光と影が合わさった部屋で、固く心に誓った。

第58話 日没の対峙

陽が西の空に傾いている頃なのだろう。

海の中にもほんの少し、茜色の幾筋かの光が差し込んでいた。

決戦の時まで、あとわずかしかない。

志保はベッドに腰掛け、じっとそのときを待つ。

志保の格好は、また子がこの日のためにわざわざ作ってくれた着物だ。

上下が羽織とスカートに分かれ、全体的に露出度の高いものとなっている。

色は雨鬼の象徴である鮮やかな青だ。

高杉がテレビ局に送りつけた予告状の内容を、志保もラジオを通して聞いていた。

真選組は今頃、総出で事にあたっているだろう。

今は敵になってしまった真選組。

でも――……。――。

そこまで思いが至ったとき、志保はハッとなった。

何バカなこと考えてるんだろう。

今でもまだ、真選組みんなが自分のことを仲間だと思ってくれているだなんて――。

志保はツツとそのきれいな顔をゆがめた。

そんなこと考えちゃいけない。

望んじゃいけない。

自分は罪を犯した、裏切り者なのだから。

自分が姿を現したとき、彼らはどのような表情をするだろうか。

驚きに目を見開くだろうか。

敵意を剥き出しにしてこちらを睨むだろうか。

それとも――……。

それだけが、何より怖くてたまらない。

「志保、そろそろ時間ッスよ」

コンコン、というノックの後、また子が部屋に顔を出した。

また子とは、この数日間の間に急速に仲良くなった。

志保はこの慣れない状況の中で何かにつけて突っかかってくるまたは逆に接しやすかったし、また子も最初こそ認めようとしなかったが男所帯の中で同年代の女性である志保がいて嬉しかったのだらう。

だんだん妹のように世話を焼くようになった。

「緊張してんスか？」

動かない、言葉も返さない志保を見てまた子が言った。

「大丈夫ッスよ。アンタはこの私を負かせたんスから」

「…うん」

志保はまた子の後に続いて部屋を出た。

希望と絶望を心にごちゃまぜに抱えながら。

同時刻、真選組は指定された北の山のふもとに集まっていた。

近藤は、江戸の警備組を指揮するため、屯所に待機している。

最後まで自分も行くと言い張っていたが、土方の強い意思に押し切られた。

「だけど、何かあったときは必ず連絡しろよ。必ずだぞ」

土方、沖田を最前列に全員が緊張した面持ちで山を見つめている。
普段何かしらふざけている沖田でさえも、口を一切聞かない。

風が吹き抜けていく音が聞こえるほど、辺りは静まり返っていた。

そしてとうとう、太陽が山のとっぺんから姿を消した。

約束の、時間だ。

そのとき、山の開けたあたりに人影が現れた。

へりが飛んできて、その場所を眩しいライトで照らしだした。

「――」

そこには、鬼兵隊の首領である高杉晋助を始め、河上万斎、来島また子、武市変平太。

それに、青い着物を身にまとった、鬼の顔の志保がいた。

「雨、宮…」

見慣れた小さなみんなの顔が、こちらを見つめている。

さんざん不安に思った、みんなの表情^{かお}。

哀しみに、苦しみに耐えて、もがいているような苦悩の表情――

――。

それは想像していたどの表情よりも志保の心を締め付けた。

けれど、顔にそんな感情を出してはいけない。

幸い――――なにかどうかは分からないが――――志保は感情をコントロールするのが普通に出来た。

冷たい鬼のような無表情を作る。

『幕府の犬ども！ 私たちを捕まえたかったら山の頂きに来るツス
！！ まあ、貴様らのような下衆は中腹止まりだろっツスけどね！』

また子がメガホンでいつもの挑戦的な叫ぶ。

その隣りで高杉もニヒルな笑みを浮かべてメガホン越しに言う。

『雨鬼はもう俺たちのモンだ…取り戻したかったらその命をかけてあの上に署名しろ』

「さすが晋助様、カッコいいツス！　ん？　…あのこと？　晋助様、あのことって何スか？」

『気になるか？　それはな…大江戸青少年健全育成条例改正案反対案だアアアア！！』

高杉———もとい高杉のコスプレをした武市が紙を掲げながらシャウトする。

その刹那にまた子の銃から弾丸が武市に向かって放たれる。

「こんなシリアスな場面で何ロリコンぶり発揮してんスカアア！
先輩、ふざけるのも大概にするツスよ！？」

「ロリコンではない、フェミニストです！！ 最近シリアスばっかりやってるけど一応『コメディー』なんだからたまにはボケぶっ込んじまえてという頭の悪い作者の行動ですよ」

「だからって今やることよくな！？ つーか本物の晋助様は？」

ベベン、と香気に三味線を弾いていた万斉が答えた。

「すでに頂きの小屋の中でござるよ」

「チッ…仕方ないツスね。『つーことで貴様ら、せいぜい足掻けばいいツス！』」

最後にまた子が叫んで、鬼兵隊幹部はその場を去った。

志保は――――振り返らずに、だんだん深まる闇の中に姿を消

した。

一連のやり取りを下から眺めていた真選組は、志保の姿を見つめて苦悩していたが、最後の方になるにつれ半眼になり、連中が引つこんだあとは声を揃えてつぶやいた。

「何だアレ」

いちばん初めに今の状況を取り戻したのは土方と沖田だった。

「土方さん」

沖田が声をかけると、土方もうなずく。

「お前ら、氣引き締めろ！ 今から1番隊から突入する。目指すは山の頂きだ。だが連中がただで頂きに着かせてくれるたア思わねエ。充分注意しろ！ 行けエエエ！！」

オオオオオ！！と声をあげ1番隊が山の中へ刀を抜き駆けて行く。

「総悟！」

沖田が列の最後に行こうとしたとき、土方の鋭い声がそれを引き留める。

「お前はいったんここに残れ」

「！ 何ですかイ……」

反論しようとした沖田だったが、土方の目を見てここは大人しく言うことを聞いた。

徐々に小さくなっていく隊員たちの黒い背中を見つめながら、静か

に近付いてくるそのときを沖田はただひたすらに待つのだった。

第58話 日没の対峙（後書き）

無理にギャグ入れることなかったな…。

雰囲気壊れた（＜―＞）

まあ、もともと雰囲気も何もあつたもんじゃないですけどネ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2009u/>

銀魂 - Lonely rainy day -

2012年1月14日20時50分発行